

土地分類基本調査（土地履歴調査） 説明書

瀬戸

5万分の1

平成24年3月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

土地分類基本調査（土地履歴調査）説明書「瀬戸」

目 次

はじめに

1	調査の概要	1
1.1	調査の目的	1
1.2	調査方法及び成果の概要	1
2	調査地域の概要	3
2.1	地域の位置	3
2.2	地域の行政概要	3
2.3	地域の特性	6
3	調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係	9
3.1	地形概説	9
3.2	地形細説	11
3.3	地形と土地の開発、保全及び利用との関係	17
3.4	地形と災害及び保全との関係	21
4	土地利用の変遷の概要	23
4.1	過去の土地利用状況の概要	23
1.2	土地利用変遷の概要	27
5	調査地域の災害履歴概要	32
5.1	災害履歴概説	32
5.2	災害履歴細説	37
6	調査成果図の見方・使い方	46
6.1	地形分類図	46
6.2	土地利用分類図	49
6.3	災害履歴図	49
6.4	成果図面の使い方	50
7	引用資料及び参考文献	52
7.1	引用資料	52
7.2	参考文献	54

資料

災害年表

既存資料におけるボーリング資料

はじめに

国土交通省国土政策局では、国土調査の一環として、全国の都道府県と協力して「土地分類基本調査」を実施し、5万分の1地形図を単位に、土地の自然的条件（地形、表層地質、土壌）等について調査した結果を、調査図及び調査簿として整備・提供してきました。

近年、集中豪雨や大地震の多発により、毎年のように水害や地盤災害が発生していますが、これらの災害の中には、土地本来の自然条件を無視した開発や利用に起因するものもあり、土地の安全性に対する関心が高まっています。

このため、新たな土地分類基本調査として、地域ごとの土地の改変履歴や本来の自然地形、過去からの土地利用変遷状況、自然災害の履歴等に関する情報を総合的に整備し、土地の安全性に関連する自然条件等の情報を、誰もが容易に把握・利用できる土地分類基本調査（土地履歴調査）の検討を進めてきました。

この「瀬戸」図幅の調査成果は、名古屋周辺地区の土地分類基本調査（土地履歴調査）の最初の成果として、平成23年度に実施した調査の結果をとりまとめたものです。本調査成果については、行政関係者や研究者等の専門家だけでなく、学校教育・生涯学習・地域の活動等に取り組む団体や住民の方々、居住地域の地形状況を知りたい方、新たに土地の取引をされようとする方々、不動産の仲介・開発等に関する企業の方々、その他地域の自然環境、土地利用、災害等に関心を持つ方々等に、幅広く利用していただきたいと考えています。

最後に、調査の実施にあたり終始ご指導をいただいた地区調査委員会の皆様をはじめ、ご協力をいただいた関係行政機関等の関係方々に深く感謝申し上げます。

平成24年3月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

1 調査の概要

1.1 調査の目的

本調査は、自然災害等に対する土地の安全性に関連して、土地本来の自然条件等の情報を誰もが容易に把握・活用できるように、過去からの土地の状況の変遷に関する情報を整備するとともに、各行政機関が保有する災害履歴情報等を幅広く集約し、総合的な地図情報として分かりやすく提供することにより、災害等にも配慮した土地取引、災害時の被害軽減、被災しにくい土地利用への転換を促すなど、安全・安心な生活環境の実現を図ることを目的とする。

1.2 調査方法及び成果の概要

これまでの土地分類基本調査の調査項目に加え、土地の開発等により不明となった土地本来の自然地形や改変履歴等を明らかにするとともに、過去からの土地利用変遷情報を整備し、災害履歴情報を編集するため、主に次の方法により以下の土地状況変遷及び災害履歴情報からなる調査成果を作成した。

調査成果図は、概ね縮尺5万分1の精度で編集し、同縮尺の地形図を背景図として地図画像（PDF ファイル）を作成した。

(1) 調査方法

土地状況変遷情報は、5万分の1都道府県土地分類基本調査成果や国土地理院作成の土地条件図等既存の地形分類図、明治以降に作成された旧版地図、昭和20年頃の米軍撮影空中写真、最新の空中写真等を活用して作成した。

災害履歴情報は、地方公共団体や関係行政機関等が調査した水害、地震災害等の現地調査図等の資料より編集した。

(2) 本調査による調査成果

① 土地状況変遷情報

i. 自然地形分類図

土地本来の自然地形である山地・丘陵地、台地、氾濫原低地、自然堤防、旧河道、湿地、三角州・海岸低地等に分類した図である。なお、現況の人工改変地にあつては改変前の自然地形を復元し分類している。

ii. 人工地形分類図

人工改変地を埋立地、盛土地、切り盛り造成地等に分類した図である。なお、本調査成果図では、人工地形及び自然地形を重ねて「人工地形及び自然地形分類図」にまとめて作成している。

iii. 土地利用分類図（2時期分）

明治期（現在から概ね120年前）と昭和40年代（同概ね40年前）の2時期の土地利用状況を復元し分類した図である。

② 災害履歴情報

i. 災害履歴図

浸水状況、地震被害等の既存資料図を基に、被害分布等の図にとりまとめて編集したものである。

ii. 災害年表・災害関連情報

年表形式の災害記録、災害に関する文献情報等にとりまとめたものである。

③ 調査説明書

調査成果図等の利用の参考とするため、本説明書を作成している。

④ 調査成果図 GIS データ

各調査成果図の GIS データを作成している。

1.3 調査実施体制

(1) 地区調査委員会

委員長

海津 正倫 奈良大学 文学部 教授

委員

(学識経験者)

藤本 潔 南山大学 総合政策学部 教授

堀 和明 名古屋大学 大学院環境学研究科 准教授

(関係県・政令市)

河隅 彰二 愛知県 地域振興部 土地水資源課 課長

桐山 敏通 岐阜県 都市建築部 都市政策課 課長

堀田 俊幸 名古屋市 緑政土木局 企画経理課 主幹

(2) 実施機関

① 計画機関

国土交通省 国土政策局 国土情報課

② 受託機関

地形分類調査・災害履歴調査・土地利用履歴分類調査

株式会社 地域開発コンサルタンツ

実施管理

株式会社 パスコ

2 調査地域の概要

2.1 地域の位置

本調査の対象地域（以下「本図幅」という。）は、国土交通省国土地理院発行5万分の1地形図の「瀬戸」の全域、北緯 $35^{\circ} 10' \sim 20'$ 、東経 $137^{\circ} 00' \sim 137^{\circ} 15'$ （座標は日本測地系^{*}）、愛知県北部、岐阜県南東部にまたがる面積約 420.7km^2 の範囲である。図2-1に本図幅の位置図を示す。



図 2-1 調査位置図

2.2 地域の行政概要

本図幅に関係する市区町村は、岐阜県の3市（多治見市、瑞浪市、土岐市）、愛知県の9市（名古屋市、瀬戸市、春日井市、豊田市、犬山市、小牧市、尾張旭市、日進市、長久手市）である（図2-2、表2-1）。

^{*}世界測地系(日本測地系 2000)では、 $35^{\circ} 10' 11.6'' \sim 20' 11.6'' \text{ N}$ 、 $136^{\circ} 59' 49.3'' \sim 137^{\circ} 14' 49.2'' \text{ E}$ の範囲。

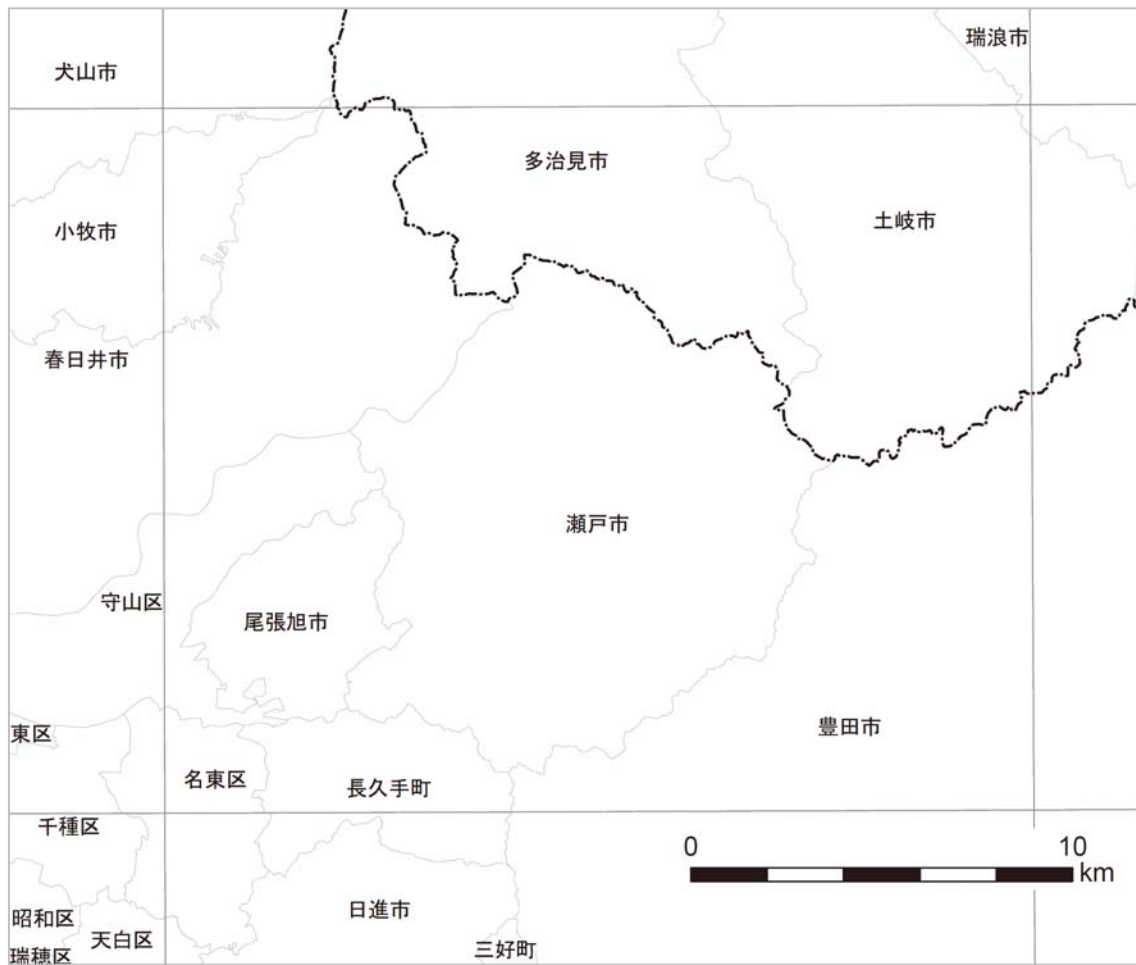


图 2-2 関係市区町村

表 2-1 関係市町村（面積、人口、世帯数）

	図幅内面積	行政面積	行政区域内世帯数	同 人口総数
	ha	ha	世帯	人
岐阜県				
多治見市	4,670	9,124	40,200	112,595
瑞浪市	20	17,500	13,597	40,387
土岐市	5,870	11,601	20,760	60,475
愛知県				
名古屋市				
守山区	1,690	3,399	67,087	168,551
名東区	600	1,944	71,894	161,012
瀬戸市	11,140	11,161	50,289	132,224
春日井市	5,210	9,271	119,187	305,569
豊田市	8,050	91,847	162,065	421,487
犬山市	140	7,497	27,359	75,198
小牧市	1,090	6,282	55,783	147,132
尾張旭市	2,100	2,103	31,009	81,140
長久手市	1,500	2,154	22,240	52,022
計	42,070	173,883	681,470	1,757,792

1. 図幅内面積は、本調査における図上計測値。
2. 行政面積は国土地理院「平成23年全国都道府県市区町村面積調」（平成23年10月1日現在）による。
*印は、境界未定のため総務省「全国市町村要覧平成22年版」記載の便宜上の概算数値を参考値とした。
3. 人口、世帯数は平成22年国勢調査人口集計結果による。

2.3 地域特性

(1) 沿革

本図幅の地域は、旧尾張国と美濃国に属し、明治4（1871）年廃藩置県により、尾張国では名古屋県、額田県が、美濃国では岐阜県が設置された。名古屋県は、明治5（1872）年4月に名称が愛知県と改められ、同年11月には額田県を管轄を含めて現在の愛知県の範囲となった。また、岐阜県は、当初旧美濃国のみであったが、明治9（1876）年、旧飛騨国の地域が編入され、現在の岐阜県となった。

本図幅の中心部に位置する瀬戸市は、尾張丘陵から上質な陶土が産出することから古くから日本有数の陶磁器である瀬戸焼の生産地として知られている。その歴史は平安時代中頃から始まったとされ、江戸時代には尾張藩の直轄領として庇護を受け、瀬戸焼は全国的に流通するまで発展した。明治時代に入ると、瀬戸焼は海外での評価が高かったことから欧米に向けての輸出が盛んとなり、日本の貴重な輸出産業の一つとなった。また、それに合わせて窯業の近代化も進み、一層大量生産化されていくこととなった。しかし、現代においては、東アジアを中心とする新たな陶磁器産地の台頭や、後継者不足などにより、窯業自体は衰退の傾向にあるが、新たな先端科学技術を最大限に駆使したファインセラミックスなどの焼き物も生産されるとともに、観光産業化への取り組みが進められ、新たに発展を続けている。

本図幅の交通の状況を見ると、瀬戸市中心部から名古屋市方面に向かって名鉄瀬戸線が整備されているほか、図幅西部を愛知環状鉄道が通り、名古屋市や豊田市へのアクセスのよい地域となっている。そのため、近年では名古屋市や豊田市への通勤圏として住宅団地の開発が進んでいる。また、高速道路として東海環状自動車道の整備が進んでおり、インターチェンジ周辺では立地特性を生かして工業団地の整備も進んでいる。

(2) 気候

本図幅北側に位置する多治見の気候を1981～2010年の平年値（表2-2）からみると、年平均気温は14.8℃、最寒月（1月）の日最低気温の月平均は-2.3℃、最暖月（8月）の日最高気温の月平均は33.7℃となり、都心部に比べやや年較差の大きい内陸性の気候の特徴がみられる。

年降水量は1,626.7mmで、月降水量は3月から10月にかけて100mm/月を超え、梅雨期の7月と秋霖期の9月に235mm/月を超えている。月降水量の極小は12月の50.3mm/月で、12月、1月の降雨は60mm/月を下回る。

風速は3、4月に極大となるが、月ごとの変動は大きくなく、風向は西風または西北西風が卓越している。また、年間日照時間は2,014.5時間で、梅雨期の6月に極小となり、夏季の8月に極大となるほか、3～5月の春季に比較的多く180時間/月を超える。

表 2-2 瀬戸の気候表 (1981~2010 年の平年値)

要素	降水量	気温			風向・風速		日照時間
	(mm)	(°C)			(m/s)		(時間)
	合計	平均	最高	最低	平均	最多風向	合計
統計期間	1981 ~2010	1981 ~2010	1981 ~2010	1981 ~2010	1981 ~2010	1981 ~2010	1988 ~2010
資料年数	30	30	30	30	30	30	23
1月	56.0	2.9	9.2	-2.3	0.7	西	146.3
2月	70.6	3.9	10.5	-1.9	0.8	西北西	158.6
3月	128.7	7.7	14.4	1.3	1.0	西北西	188.1
4月	132.4	13.6	20.5	6.8	1.0	西北西	195.8
5月	168.0	18.2	24.9	12.0	0.9	西	187.6
6月	208.5	22.2	28.1	17.3	0.8	西	143.5
7月	235.9	26.0	31.7	21.5	0.8	西	160.9
8月	136.8	27.4	33.7	22.6	0.9	西	202.2
9月	235.4	23.5	29.4	18.9	0.8	西	156.3
10月	123.6	16.9	23.5	11.6	0.6	西北西	163.7
11月	85.1	10.7	17.5	5.2	0.6	西北西	153.5
12月	50.3	5.3	11.9	-0.1	0.6	西	154.1
年	1,626.7	14.8	21.3	9.4	0.8	西	2,014.5

「日本気候表(気象庁,2011)」による多治見気象観測所(アメダス)の平年値。

統計期間は1981~2010年の30年間。但し日照時間は、1988~2010年の23年間

(3) 地形及び地質の概要

本図幅は濃尾平野の北東部に位置し、濃尾平野を取り囲む山地・丘陵地が多くを占めている。本図幅の西端は、本図幅以東にも広がる三河高原(山地・丘陵地)と濃尾平野との境界地域であり、山地・丘陵地、台地、低地の多様な地形をみることができる。

山地は、三河高原の西部に位置し、図幅東部の三国山、猿投山周辺が標高700m前後と最も高い山地塊であり、次いで図幅北西部の道樹山周辺が400mを超える標高となっている。三国山-猿投山と山麓部は、深層風化及び断裂をよく受けた花崗岩類よりなり、傾斜の大きな斜面もあることから、集中豪雨時の崩壊・土石流の危険が大きい地域である。道樹山周辺は、主に、一般に堅硬な古生層(粘板岩・砂岩・チャート等)からなるからなり、崩壊地形は少なく、土石流地形もほとんど無く、相対的に安定した山地である。

これらの山地の周辺は、起伏量の少ない丘陵地が広がっており、丘陵の頂部は比較的高度がそろった定高性を示している。地質的には、粘土、砂からなる瀬戸陶土層が広い面積を占め、古くから瀬戸市街地北側を中心に大規模な採掘が行われている。

台地は、庄内川、矢田川の両岸に沿って、上記の丘陵を取り巻くように分布しており、矢田川左岸などで比較的まとまった台地面が形成されている。これらの台地面は主として礫からなる未固結~半固結の堆積物で、比較的地盤が安定していることから、くから

集落や街道が立地し、生活の場として活用されてきた。

低地は、図幅西部の庄内川、内津川、矢田川に沿って細長く分布しているほか、図幅北部の笠原川（多治見盆地）沿いに分布しているが、いずれも規模は小さい。内津川や笠原川沿いには扇状地や自然堤防といった微高地もみられるが、谷底低地、氾濫原低地などの微低地も比較的多く、現在では盛土によって元の地形を留めていない地域が多い。地質的には、主として砂・泥からなる未固結の沖積層である。

（5万分の1土地分類基本調査「瀬戸」説明書による）

3 調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係

本調査では土地条件図などの既往資料や空中写真判読、精密標高データなどに基づき自然地形分類図（図 3-1）及び人工地形分類図（図 3-4）を作成した。

自然地形分類図については、現在、改変済みの範囲についても、終戦直後の空中写真や明治期の旧版地形図などから元々の地形を復元して図化している。また、人工地形については低地での宅地開発等による盛土地、丘陵地などでの大規模改変地（人工平坦地）や人工平坦地での元々の谷の位置、宅地開発等による切土地などを新旧の空中写真や地形図の比較から抽出・図化している。

3.1 地形概説

(1) 地形分布の概要

本図幅は濃尾平野の北東側外縁部に位置し、自然地形は大きく分けると山地、丘陵地、台地及び低地に分類される（図 3-3）。濃尾平野全体では東部に丘陵や台地が発達し、それらは西方に向かって低くなり、やがて沖積面下へと埋没していく。西部には木曾三川などが作る低地が養老山地まで続く。地下構造も地形に対応するように、西側ほど新しい堆積物が厚く堆積している。このように濃尾平野は猿投山から養老山地の間にある地塊が西方に傾き、沈降するような地下構造を形成していることから、濃尾傾動地塊（運動）と呼ばれている（桑原, 1968）。濃尾傾動地塊は猿投山の西縁部を限る猿投一境川断層と、養老山地東縁部を限る養老断層との間の地塊運動で、須貝・杉山（1999）によると、西部の沈降速度は養老断層の活動に伴い 1 m/1,000 年に達すると考えられている。

本図幅内では山地や丘陵地が広い面積を占め、台地や低地は西側を中心に山地や丘陵地に囲まれるように分布している。図幅の南東部は矢作川の流域で、木瀬川や飯野川が南流している。その他の図幅の北～西部は庄内川（土岐川）の流域となり、庄内川（土岐川）は岐阜県と愛知県の県境の玉野（定光寺）峡谷において一度収束してから低地側に流下している。玉野峡谷より上流の庄内川本川は南西に向かって流下しており、その支川は本図幅内では北西側に向かって流下するものが多い。玉野溪谷より下流では庄内川はやや蛇行しながら広い谷底を流下しており、水野川や内津川、矢田川などの支流を合流して伊勢湾に向かって流下している。山地は三国山（701.0m）から猿投山（628.9m）にかけてと、弥勒山（436.6m）から道樹山（429m）付近がやや突出して高くなっており、その周辺は比較的急峻な山地となっている。山地の周辺には丘陵地や台地が接しており、それらを侵食した谷には段丘や低地が細長く分布している。

人工地形としては庄内川や矢田川周辺の低地での盛土地や、山地・丘陵地での大規模改変地（人工平坦地（宅地等））、ゴルフ場（人工平坦地（農地等））がみられ、瀬戸市周辺には陶土・珪砂採掘地が広くみられる。

3.2 地形細説

本図幅における山地や丘陵地、低地などの地形地域区分は、岐阜県及び愛知県の 20 万分の 1 土地分類調査（経済企画庁，1974, 1975）や 5 万分の 1 土地分類基本調査（地形分類図）「岐阜」「大垣」「瀬戸」「名古屋北部」「豊田」「名古屋南部」（図 3-2(1), (2)）、その他の文献（町田ほか編，2006）などを参考に、本調査として、濃尾平野全域で統一の区分及び呼称を採用した（図 3-3）。

また、市町村ごとの自然地形分類の面積を表 3-1 に整理した。

表 3-1 本図幅内の市町村別地形分類面積

区分	市区町村	多治見市	瑞浪市	土岐市	名古屋市		瀬戸市	春日井市	豊田市	犬山市	小牧市	尾張旭市	長久手市	合計
					守山区	名東区								
山地	山地斜面等	35.2	0.2	48.9	6.6	3.4	87.6	30.2	71.6	1.1	8.8	7.7	7.9	309.1
	麓斜面及び崖錐	0.4	0.0	0.5	0.1	0.0	0.6	0.2	0.1	0.0	0.0	0.1	0.2	2.2
	土石流堆積地	1.5	0.0	1.8	0.0	0.0	2.2	0.3	2.2	0.0	0.1	0.0	0.0	8.0
	山地計	37.0	0.2	51.1	6.7	3.4	90.4	30.7	73.9	1.1	8.9	7.8	8.1	319.4
台地	砂礫台地	2.2	0.0	1.1	4.8	0.4	5.3	5.5	0.5	0.0	0.1	5.7	2.2	27.8
低地	緩扇状地	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
	扇状地	2.0	0.0	1.9	0.0	0.0	0.5	3.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.4
	谷底低地	2.7	0.0	4.0	1.7	1.8	13.7	6.6	5.4	0.3	1.7	2.0	4.1	44.0
	氾濫原低地	1.3	0.0	0.0	2.1	0.0	0.0	1.1	0.0	0.0	0.0	3.9	0.0	8.4
	自然堤防	0.7	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	1.2	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	2.4
	旧河道	0.1	0.0	0.1	0.2	0.1	0.1	1.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1.7
	湿地	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	砂丘	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	天井川及び天井川沿い微高地	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
	河原・河川敷	0.1	0.0	0.1	0.5	0.0	0.6	0.9	0.0	0.0	0.0	0.4	0.1	2.6
	低地計	6.8	0.0	6.1	4.6	2.0	14.8	14.9	5.4	0.3	1.7	6.6	4.3	67.7
水部	現水部	0.6	0.0	0.4	0.6	0.0	0.9	0.9	0.6	0.0	0.2	0.7	0.3	5.2
	旧水部	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.2	0.1	0.6
	水部計	0.6	0.0	0.4	0.7	0.2	0.9	1.0	0.6	0.0	0.2	0.9	0.3	5.8
合計		46.7	0.2	58.7	16.9	6.0	111.4	52.1	80.5	1.4	10.9	21.0	15.0	420.7

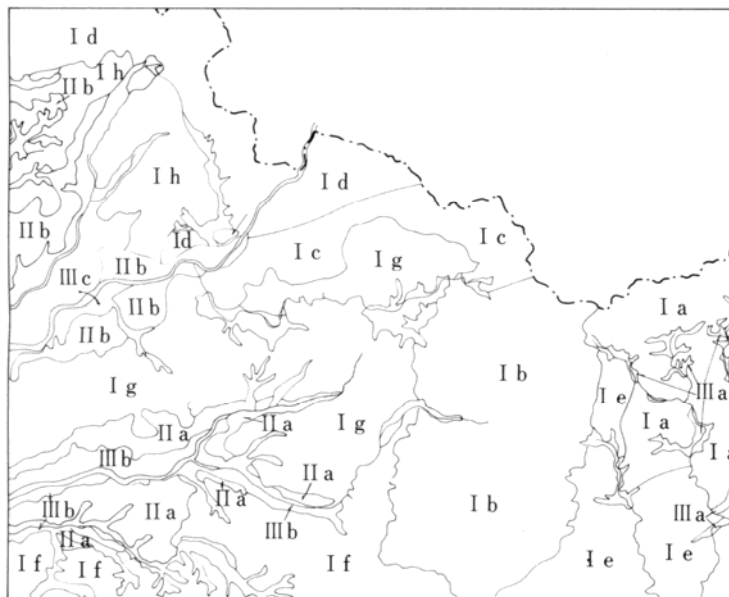
面積は、本調査の成果図の図上計測による。



山地	丘陵	台地	低地
Ia 尾張山地	IIa 多治見丘陵	IIIa 屏風山断層崖北縁台地	IVa 多治見土岐川低地
Ib 三國山・猿投山山地	IIb 土岐丘陵	IIIb 土岐川河岸段丘台地	IVb 土岐土岐川低地
Ic 三河山地		IIIc 矢作川河岸段丘台地	

資料：岐阜県(1987)

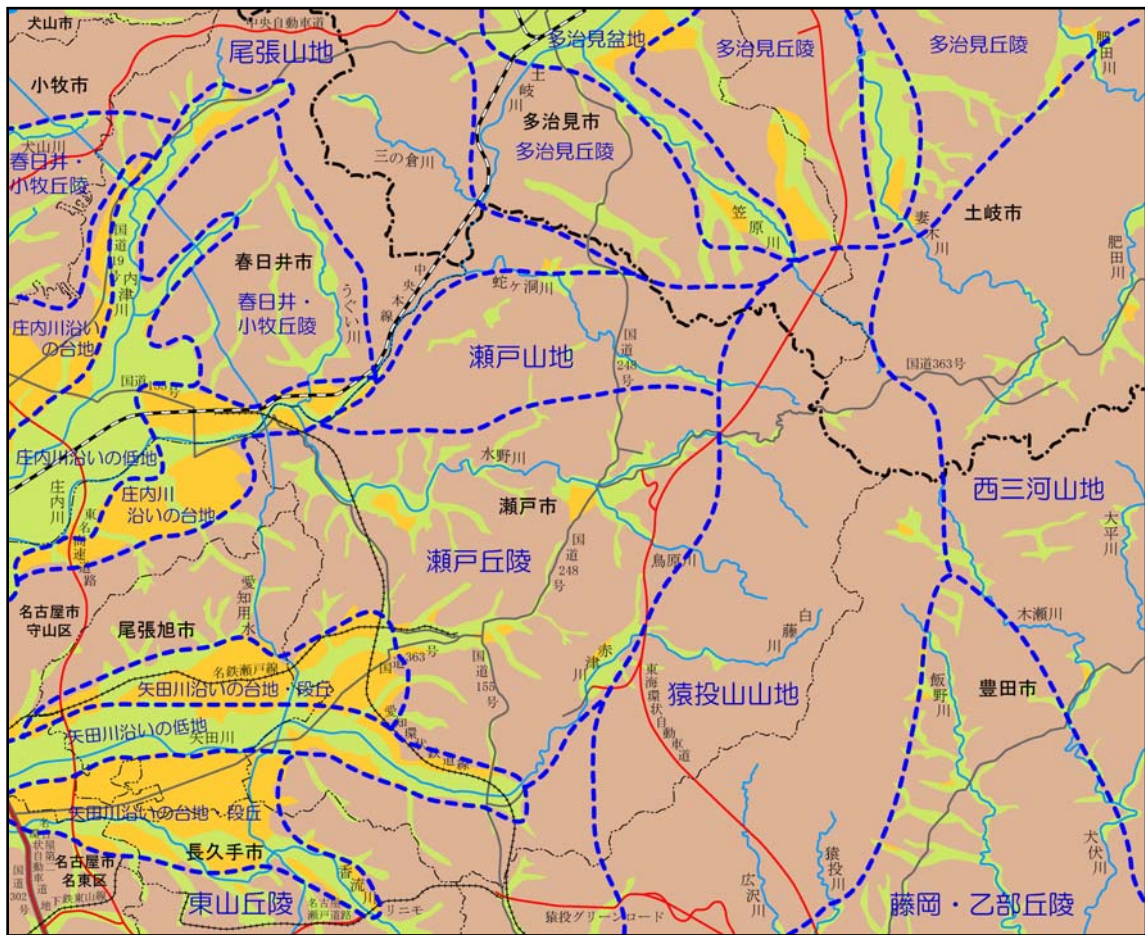
図 3-2(1) 5万分の1土地分類基本調査における地形地域区分(岐阜県側)



I 山地・丘陵地	II 台地・段丘
Ia 三河西部山地	IIa 矢田川台地・段丘
Ib 三國山-猿投山山地	IIb 庄内川台地・段丘
Ic 瀬戸山地	III 低地
Id 尾張山地	IIIa 小原藤岡低地
Ie 藤岡丘陵	IIIb 矢田川低地
If 長久手丘陵	IIIc 庄内川低地
Ig 瀬戸丘陵	
Ih 春日井・小牧丘陵	

資料：愛知県(1983)

図 3-2(2) 5万分の1土地分類基本調査における地形地域区分(愛知県側)



凡 例

- | | | |
|---------|---------|------|
| 山地・丘陵地 | JR(新幹線) | 県界 |
| 台地 | JR(在来線) | 市町村界 |
| 低地 | 私鉄 | |
| 河川・湖沼 | 高速道路 | |
| 地形地域区分界 | 国道 | |

図 3-3 本図幅における地形地域区分

(土地履歴調査において濃尾平野全域で統一した区分及び呼称)

(1) 山地

本図幅の山地は図幅の北西～東部に広く分布しており、東部に西三河山地、中部には猿投山山地や瀬戸山地、北西部には尾張山地が広がっている。

西三河山地は図幅東側の広い範囲に位置しており、稜線の高度は南側で300～500mほど、北側で500～700mほどに達するが、谷底の低地と稜線の比高は100～150mほどの小起伏山地となっている。南部と北部の境界は岐阜県と愛知県の県境で、稜線の高度が150～200mほど変化している。この図幅は恵那山地の隆起帯の南西延長部にあたり、北側は笠原断層などで明瞭に境されている。この図幅の南部には広く花崗岩類が分布するが、地表付近は深く深層風化を受けてマサ化している(愛知県, 1983)。

猿投山山地は本図幅では最も稜線高度が高い地域で、地質的には花崗岩類の深成岩からなる。山地の中心となる三国山は標高701.0m、猿投山は標高628.9mとなっており、その周囲の稜線高度は500～700mとなっている。三国山と猿投山の間には北東-南西方向に猿投山北断層が走り、北西側(三国山側)の山塊と南東側(猿投山側)の山塊を分断している。猿投山北断層が横切る部分では河谷がほぼ同じ直線上で鍵型に屈曲しており、右ずれの断層変位もみられる(愛知県, 1983)。また、山地の南東側は猿投-境川断層で境されており、藤岡・乙部丘陵と接している。その他は周辺の山地や丘陵に漸移しており、周辺部での稜線高度は300～500m程度となる。

瀬戸山地は猿投山山地の北西側に位置する稜線高度300～470mほどの山地で、地質的には花崗岩やチャートなどからなる。東端の潮見公園付近の稜線(標高471.8m)から西端の玉野峡谷南部にかけては、比較的なだらかな稜線が高度を減じながら連続するが、谷沿いには比較的急な斜面が発達している。南北は多治見丘陵や瀬戸丘陵と接している。

尾張山地は図幅北西部に位置する山地で、地質的にはチャートや中生代の砂岩等からなる。玉野峡谷両岸から図幅北西端の入鹿池付近にかけて広がるが、等高性はあまりなく、山地の中心となる弥勒山(436.6m)や道樹山(429m)は標高400mを越えるが、その周辺でも稜線高度は200～400mほどとなっている。特に入鹿池付近の山地は稜線高度が200m前後で、丘陵状を呈している。弥勒山や道樹山周辺は比較的急峻で晩壮年期の山形を呈し、庄内川が先行谷的に流下する玉野峡谷では、河床から100～150mほどの高さの急斜面が庄内川(土岐川)に沿って連続している。

(2) 丘陵地

本図幅では山地と低地(盆地)の間に丘陵地が広く分布しており、前出の藤岡・乙部丘陵のほか、北東部には多治見盆地の周辺に多治見丘陵、庄内川と尾張山地の間に春日井・小牧丘陵、庄内川と矢田川の間には瀬戸丘陵、矢田川以南には東山丘陵がそれぞれ広がっている。

藤岡・乙部丘陵は西三河山地と猿投山山地の間の飯野川沿いに広がる丘陵地で、東側は西三河山地に漸移するが、西側は猿投-境川断層によって明瞭に境されている。丘陵地の稜線高度は150m～300mで、猿投山山地の東～南東麓に比較的幅の広い谷底低地をとまって分布している。地質的には中新世～鮮新世にかけての堆積岩からなる地域である。学校や住宅団地、工場用地などとして開発が進んでいる地域である

多治見丘陵は多治見盆地周辺に広がる丘陵地で、南側は笠原断層などを境界として西

三河山地・猿投山山地・瀬戸山地と明瞭に境されており、西側は尾張山地と接している。丘陵地の稜線高度は150～300mで、丘陵地の頂稜部には土岐砂礫層が堆積し、開析が進んでいるが、平坦な地形面が残存しており、丘陵斜面の中腹や基部には瑞浪層群や土岐口陶土層がみられ、それらの陶土層は陶器等の原料として採掘されてきた(岐阜県, 1987)。また、市之倉町周辺や滝呂町周辺には丘陵地を大規模に改変した住宅団地が点在し、同様な工業団地などもみられる。

春日井・小牧丘陵は尾張山地の西側に分布する丘陵地で、尾張山地とは稜線高度の違いから比較的明瞭に区別される。丘陵地の稜線高度は東側で150～200m、西側で100m前後となり、細かくみると藤岡面、猪高面、高位段丘面群に細分される(愛知県, 1983)。この地域は高蔵寺ニュータウンなどの大規模な宅地造成が数多くみられ、そのほか、工業団地の造成などの大規模改変地も点在する。このため、元々の丘陵地の地形が残る地域は航空自衛隊高蔵寺分頓基地周辺や少年自然の家周辺などに限られる。

瀬戸丘陵は庄内川下流部と矢田川に挟まれた地域の丘陵地で、東側及び北東側はそれぞれ猿投山山地と瀬戸山地に接している。丘陵地の稜線高度は北東端で250m前後、瀬戸市街地付近の中央部で150～200m、図幅西端の緑ヶ丘ゴルフ場付近では100～150mとなる。丘陵地は藤岡面と猪高面などに区分されるが、開析が進んでいてあまり明瞭には区分できない(愛知県, 1983)。地質的には瑞浪層群や瀬戸層群が分布し、瀬戸層群の下部には陶土層をとめない、瀬戸市街地北側を中心に大規模な採掘が行われている。その他、丘陵地の多くは住宅地や工場用地、ゴルフ場として開発されており、元々の丘陵地の地形が残る地域は、東古瀬戸町東方の馬ヶ城ダム周辺や愛知県森林公園周辺などに限られる。

東山丘陵は矢田川の南側に分布する丘陵地で、東側は猿投山山地に接し、西側は名古屋市中心部まで連続している。丘陵地の稜線高度は東部の猿投山地隣接部では200m前後、中部の長久手市付近では100～150m、図幅西端の名古屋市名東区付近では60～90mであり、図幅西側に隣接する名古屋市平和公園付近で100m前後まで高度を上げたのち、八事付近では約60mまで高度を減ずる。丘陵地のほとんどは鮮新世後期の瀬戸層群からなっており、最下部には瀬戸陶土層を伴う。上部の矢田川累層は、礫の多い下部の水野砂礫層、亜炭層、凝灰砂泥層、泥質層などからなる中部の尾張挟炭層、砂礫・シルト互層からなる上部の猪高層に分けられる。矢田川累層は丘陵頂部の傾きより大きく西側に傾いているため、標高の高い東側に下位の砂礫層(水野砂礫層)がみられ、標高の低い長久手市から名古屋市名東区にかけては中位の尾張挟炭層がみられる。その西側(図幅外)の名古屋市平和公園～自由ヶ丘付近には上位の砂礫・シルト互層(猪高層)がみられる。中位の尾張挟炭層が分布する地域は比較的浸食に弱いいため、上位の砂礫・シルト互層(猪高層)が分布する西側の地域より低くなっている(愛知県, 1983)。東山丘陵は名古屋市中心部に隣接しており、西部を中心に大規模な宅地開発が進み、長久手市から西側の地域はほとんどが人工改変地になっている。

(3) 台地

本図幅の台地は庄内川や矢田川等が形成した段丘で、広い台地状に分布するもの少なく、それぞれの河川の低地の周辺に開析された段丘として細長く連続して分布している。

庄内川沿いの台地は、庄内川やその支流の内津川沿いに分布する段丘で、田力ほか(2011)では、玉野峡谷より下流の庄内川には、左岸側を中心に M2 面が比較的連続して分布するとされ、右岸では L1 面が連続して分布するとされる。それらの連続する段丘の上位・下位にも数段の段丘が認められ、春日井市の中部大学付近は H4 面、名古屋市守山区紙志段味の愛知県立大学付近では M1 面などが分布するとされる。田力ほか(2011)は M2 面を MIS6 に堆積が進行して、MIS5/6 境界付近で離水した段丘、L1 面を MIS3 ごろに堆積した段丘としている。また、田力ほか(2011)は玉野峡谷より上流の段丘も含めて、同様な気候条件下(同一の堆積・侵食環境下)の段丘の高度を比較することにより、庄内川(土岐川)流域の隆起速度を算出し、その値を 0.11~0.16mm/年としていて、その隆起速度が上流部(東側)ほど大きくなっている可能性を指摘している。

矢田川沿いの台地は庄内川の支流の矢田川や香流川沿いに分布する段丘で、この地域の段丘は上位・中位・下位の各段丘面に細分され、それぞれ名古屋付近の覚王山面・熱田面・大曾根面に対比されるとされる(愛知県 1983)。上位面は瀬戸市長根町付近・瀬戸市坂上町から長久手町の愛知医科大学付近・尾張旭市長坂町付近に分布し、中位面は矢田川と香流川に囲まれた尾張旭市の晴丘町から南新町にかけて比較的広く分布している。下位面は矢田川北側の瀬戸市街地から図幅西端の名古屋市守山区大森付近まで比較的連続して分布しており、香流川両岸には下流部を中心に連続して分布している(愛知県 1983)。

その他の段丘としては、各河川の支流に断片的に段丘が分布しており、庄内川(土岐川)の支流の笠原川、生田川、妻木川の上~中流部には比較的勾配がある扇状地性の谷底が開析された段丘がみられる。そのうち、生田川の上流部の段丘は西端を隣接する笠原川によって側方侵食を受けており、段丘上の浅い谷の上流端は笠原川の侵食崖によって断たれ、風隙谷となっている。

(4) 低地

本図幅の低地は多治見市街地が位置する多治見盆地、庄内川沿いの低地、矢田川沿いの低地などがあげられる。

多治見盆地は多治見市街地が位置する玉野溪谷上流の庄内川(土岐川)の氾濫原低地を中心とする低地で、庄内川(土岐川)の河道周辺には自然堤防が連続して分布しており、蛇行する旧河道もみられる。周囲の山地・丘陵地から流入する河川も多く、南東側からは笠原川、生田川が流入し、西側からは辛沢川、北側からは大原川が流入している。辛沢川は山地から多治見盆地に流出した際に扇状地を形成しており、笠原川は中流部に比較的開けた扇状地性の低地がみられ、多治見盆地に流出する部分には扇状地は形成していない。既存のボーリング資料によると多治見盆地では表土の下に 4~7 m ほどの砂礫層がみられ、その下は比較的硬いシルトや砂からなる層がみられる(柱状図No.2, 3)。

庄内川の愛知県側では、春日井市高蔵寺町の下流側に、段丘に挟まれて幅 1~1.5km ほどの低地が連続し、その低地には蛇行する旧河道が幾筋もみられ、旧河道の周囲には自然堤防が発達している。支流の内津川沿いには幅 500m ほどの谷底平野が連続して分布し、庄内川との合流点付近では緩勾配の偏形した扇状地を形成している。既存のボーリング資料によると**庄内川沿いの低地**では表土の下に 5~8 m ほどの砂礫層がみられ、

その下は比較的硬いシルトや砂などがみられる(柱状図No.5~7)。また、支流の内津川の谷底低地では10m以上の厚い砂礫層がみられる(柱状図No.4)。

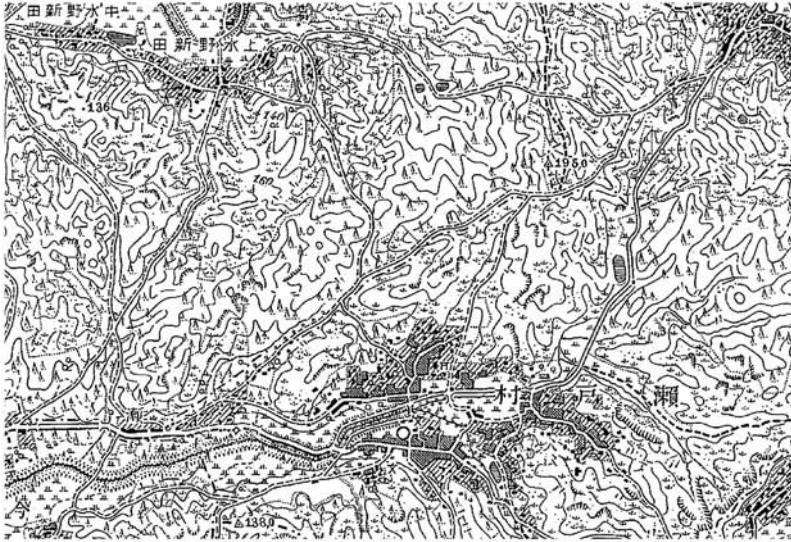
矢田川沿いの低地は、本川沿いでは瀬戸市山口町付近、支流の瀬戸川沿いでは瀬戸市街地付近から下流において、段丘や丘陵に囲まれた幅500m~1kmほどの細長い低地としてみられ、支流の香流川沿いにも断続的に分布する。本川沿いの低地には蛇行する旧河道が所々にみられ、瀬戸川との合流点より下流では自然堤防も分布している。矢田川の流域は最上流部の赤津川流域以外は、丘陵地に源頭部を持つ河川で、河床勾配は緩やかで、概して浸食・運搬作用は著しくないとされる(愛知県, 1983)。既存のボーリング資料によると、最上流部の赤津川沿いでは比較的広く開けた谷底であっても堆積物は比較的薄く、厚さ3~4mの表土や礫まじりの堆積物の下には基盤岩がみられる(柱状図No.9, 10)。低地が広がり始める瀬戸市山口町付近では厚さ10m以上の礫質な堆積物がみられ(柱状図No.11)、下流の尾張旭市稲葉町付近では、厚さ2m未満の砂礫層を挟む砂質堆積物が厚さ10m以上堆積している(柱状図No.15)。支流の瀬戸川や香流川沿いでは砂礫層や砂層・粘土層などが交互に堆積しているのがみられるが(柱状図No.8, 16~18)、下部に硬く締まった有機質土や空洞がみられることから、柱状図にみられる堆積物の全てが現在の河川が堆積した沖積層ではなく、中~下部は丘陵の基盤となる瀬戸層群(空洞は亜炭採掘の坑道跡)と考えられる。

その他の低地としては、矢作川流域の木瀬川や飯野川や庄内川各支川沿いに断続して分布する低地がみられる。

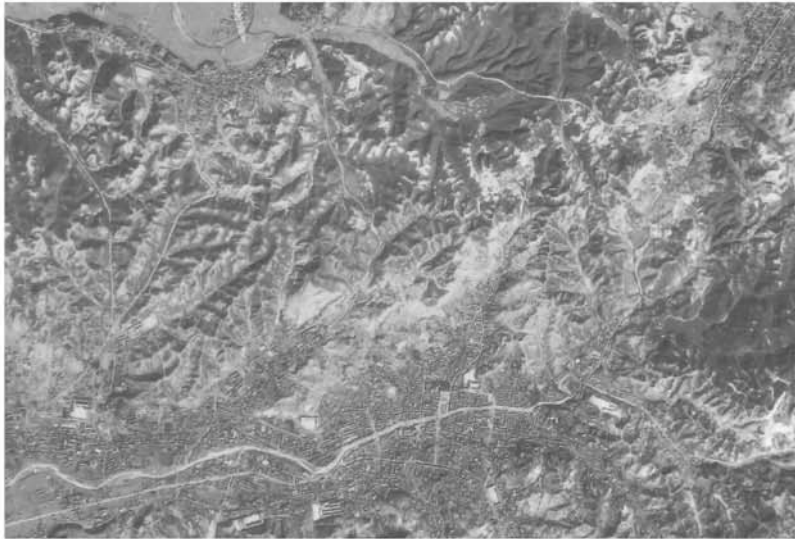
3.3 地形と土地の開発、保全及び利用との関係

本図幅は、瀬戸物が陶磁器の代名詞になっているように、古くから窯業が盛んで、その陶土が丘陵地の基盤をなす瀬戸層群から採掘されてきた。また、名古屋市中心部から比較的近く、JR中央本線が通過しており、また、地域の南西部には比較的開発しやすい丘陵地が広がっていることから、高度成長期以降、名古屋都市圏のベッドタウンとして開発が進んでいる(図3-4, 5, 表3-2)。

陶土採掘は古くから行われていたが、第二次世界大戦以前はスコップ等による手掘りの坑道掘りが行われ(森山, 1983)、現在のような大規模な露天掘り採掘地はみられなかった(図3-5: 明治期の瀬戸周辺の旧版地形図)。戦後、米軍からブルドーザーの払い下げを受け一部に導入されたが、ブルドーザーが本格的に導入されるようになったのは、ブルドーザーが国産化されて普及し始めた1960年代に入ってからとされ(森山 1983)、戦後すぐの空中写真では大規模な採掘地は出現していない。ブルドーザーなどの重機の導入による露天掘り採掘地の拡大は1960年代~1970年代にかけて顕著にみられ、瀬戸市北部の採掘地はほぼこの時期に出現している。採掘跡地の一部は整地され、工場用地などとして利用されている。



明治期の瀬戸周辺の
旧版地形図
(明治 24 年頃)



瀬戸周辺の空中写真
(昭和 22 年頃)



瀬戸周辺の空中写真
(平成 16 年頃)

図 3-5 陶土採掘地の変遷

表 3-2 本図幅内の人工地形面積

区分		分類	人工平坦地		盛土地	切土地	改変工事中の区域	埋立地	人工地形小計(a)	改変なし(b)	自然地形区別計(a+b=c)	改変地の割合(%) (a/c*100)
			宅地等	農地等								
自然地形	山地	山地斜面等	43.7	10.6	0.0	1.1	14.0	0.0	69.3	239.8	309.1	22.4%
		麓斜面及び崖錐	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	1.9	2.2	13.4%
		土石流堆積地	0.2	0.1	0.1	0.0	0.2	0.0	0.5	7.5	8.1	6.6%
		山地計	44.1	10.7	0.1	1.1	14.2	0.0	70.1	249.3	319.4	22.0%
	台地	砂礫台地	2.2	0.2	0.7	0.0	0.1	0.0	3.1	24.7	27.8	11.1%
	低地	緩扇状地	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	20.0%
		扇状地	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	8.3	8.4	1.2%
		谷底平野	5.1	0.7	15.7	0.0	0.6	0.0	22.1	21.9	44.0	50.3%
		氾濫原低地	0.1	0.0	6.5	0.0	0.1	0.0	6.7	1.7	8.4	79.9%
		自然堤防	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	2.3	2.4	3.4%
		旧河道	0.0	0.0	1.2	0.0	0.0	0.0	1.3	0.5	1.7	73.3%
		湿地	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0%
		砂丘	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0%
		天井川及び天井川沿い微高地	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0%
		河原・河川敷	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	2.5	2.6	3.8%
	低地計	5.3	0.7	23.6	0.0	0.8	0.0	30.4	37.3	67.7	44.9%	
	水部	現水部	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	5.1	5.2	2.7%
		旧水部	0.3	0.0	0.3	0.0	0.0	0.1	0.5	0.0	0.6	93.0%
		水部計	0.3	0.0	0.3	0.0	0.0	0.1	0.7	5.1	5.8	11.6%
合計			52.0	11.5	24.7	1.1	15.1	0.1	104.3	316.4	420.7	24.8%

表 3-3 調査地域における年度別の主要宅地開発状況

市	事業開始年						
	～1954	1955～1964	1965～1974	1975～1984	1985～1994	1995～2004	2005～
多治見市			多治見ホワイトタウン地区(108ha)	滝呂地区(52.4ha)			
名古屋市	猪高西山地区(106ha)	東一社地区(67.7ha)	吉根地区(志段味ヒューマンサイエンスタウン213.5ha)	下志段味地区(志段味ヒューマンサイエンスタウン160.2ha) 上志段味地区(志段味ヒューマンサイエンスタウン194.9ha)	中志段味地区(志段味ヒューマンサイエンスタウン192ha)		
瀬戸市		菱野地区(174ha) 水野地区(93ha)		水野地区ポットリタウン SETO みずの坂(68ha)	山手地区(ポットリタウン SETO やまて坂27.7ha)		
春日井市		高蔵寺地区(高蔵寺ニュータウン702.1ha) 白山地区(74.7ha)	下市場地区(55ha) 出川中部地区(102.6ha) 大留地区(56.8ha)	南気噴地区(41.4ha)			
小牧市		桃花台地区(313ha)					
尾張旭市			卓ヶ洞東部地区(41.8ha) 本地ヶ原北部地区(73.6ha)	印場地区(126ha)			
長久手町		長湫西部地区(158.9ha) 長湫東部地区(163.5ha)	長湫中部地区(106.7ha)				

資料：「全国のニュータウンリスト」(平成 22 年度作成), 国土交通省土地総合情報ライブラリーホームページ
(<http://tochi.mlit.go.jp/>)

本図幅の陶土採掘地以外の人工改変地としては、丘陵地を中心に傾斜地を大きく切り盛り造成して平坦な土地を作り出し、住宅や工場などの用地を確保している例が多くみられ、特に矢田川流域南部の丘陵地は名古屋市市街地の外縁部として広範囲に連続して大規模造成地が広がる。また、JR 中央本線沿いには、多治見盆地周辺などの比較的急峻な丘陵地にも大規模な造成地が点在している。本図幅における大規模なニュータウンとしては、春日井市の高蔵寺ニュータウン(702.1ha)、志段味ヒューマンサイエンスタウン(吉根地区:213.5ha、下志段味地区:160.2ha、中志段味地区:192ha、上志段味地区:194.9ha)、瀬戸市の菱野地区(174ha)、多治見ホワイトタウン地区(108ha)などがあり、これら地区の整備は高度成長期の昭和 40 年代に集中して始まり、近年まで開発が継続している。大規模な切り盛り造成地では、地震の際に盛土部分に変形し、建物に被害が発生することがあり、近年では平成 23 (2011) 年東北地方太平洋沖地震や平成 7 (1995) 年の兵庫県南部地震などにおいて被害が生じている。

台地や段丘、扇状地では山地や丘陵地ほどの大規模な切り盛り造成が行われることは少ないが、段丘を開析する谷地形や浅い谷に盛土をして段丘面と一連となった平坦地を造成するなどの改変がみられ、庄内川や矢田川、瀬戸川沿いなどの段丘には市街地が発達している。

谷底低地や氾濫原低地、旧河道などの低地においては、現在も水田に利用されている箇所が多いが、周辺の台地や丘陵地が開発されるにつれて、水田等に用いられてきた土地に盛土をして、宅地等に転用する例が多くみられる。本図幅での谷底低地のうち盛土等で改変された土地は約 50%、氾濫原低地の改変地は約 80%、旧河道の改変地は約 70% となっている(表 3-2)。

また、本図幅の丘陵地の基盤なす瀬戸層群からは亜炭を産し、江戸時代から 1970 年代まで盛んに採掘されたが、海外からの安い石炭の輸入により、現在では採掘は行われていない。採掘は立坑または斜坑を掘削し、着炭すると水平に坑道を展開する坑道掘りであり、戦後の陶土採掘地等の露天掘りと違って地形面の改変は小さいが、埋め戻し等の処理がなされていない廃坑は地表沈下や陥没の原因となっている(充填技術協会ホームページ)。

3.4 地形と災害及び保全との関係

本図幅において地形条件と密接な関係を有する自然災害としては、地震における低地部の建物被害(軟弱地盤地での建物被害、液状化被害など)、及び人工平坦地における地盤災害(地震動による造成地の地盤変形等)、大雨の際の浸水被害、土砂災害(旧河道での浸水被害、麓斜面及び崖錐でのがけ崩れ、土石流堆積地での土石流・土砂流出など)をあげることができる。特に山地・丘陵地の人工平坦地は、盛土箇所の地盤災害と背後の山地斜面からの土砂災害の両方で注意が必要となる。

(1) 地震災害

本図幅を含む東海地方は、たびたび大規模な地震災害に見舞われてきたが、本図幅については、比較的地震被害は少なく、1891(明治 24)年 10 月 28 日に発生した濃尾地震の際も濃尾平野の低地では被害が甚大であったが、本図幅での住宅被害は 10%未満の箇

所が大半であった(飯田, 1979)。なお、本図幅には猿投山断層帯が位置しており、豊田市深見町のトレンチ調査では、高角度の断層が認められ、約 14,000 年前の砂層を少なくとも 0.5m 以上変位させ、ほぼ同時期の砂礫層に覆われているのが確認されている(愛知県, 1999)。

(2) 降雨災害

本図幅には庄内川やその支川、矢作川の支川が流下しており、沿川ではたびたび浸水被害を被ってきた。本図幅は西側を中心に市街化が顕著であり、内水氾濫などの被害に注意が必要である。

また、中～東側の地域は猿投山山地などの比較的急峻な山地が広がり、斜面の下部に斜面から崩れ落ちた土砂が堆積した麓屑面・崖錐が分布し、異常降雨時などにはがけ崩れの危険性が高い。また、溪流や水が集まる谷地形の下部には土石流によって運ばれた土砂が堆積して、小規模な扇状地(沖積錐)や勾配のある谷底低地が形成されており(これらをあわせて「土石流堆積地」とした)、異常降雨時には土石流が発生したり、溪流から土砂が流出する危険がある地域となっている。

①山地、丘陵地における土地利用

山地の土地利用をみると西三河山地、猿投山山地、瀬戸山地、尾張山地のいずれでも基本的に森林(針葉樹林など)が広がっているが、所々に荒地が広がっており、また、丘陵地においては多治見丘陵を中心に荒地が広くみられる(図 4-2)。本地域においては、古くから、窯業が盛んで、陶土の採掘のほか、窯に用いる薪炭材の伐採が進み、明治時代の初め頃には、山林はほとんど伐採し尽くされ、土砂の流出が激しかったとされる。このため、愛知県内では国や愛知県によって、瀬戸市、春日井市において明治 11 年から 13 年にかけて土堰堤工事、植苗工事等が実施され、愛知県は明治 13 年「水源作業管理規定」を定め、水源の涵養にも努め、土木工事と併せ造林も行ったとされる(愛知県建設部砂防課ホームページ)。岐阜県側では、昭和初期まで庄内川流域の砂防事業は岐阜県によって実施されていて、昭和 12 年から妻木川、笠原川、生田川流域において直轄砂防事業が開始されている(多治見砂防国道事務所ホームページ)。

②台地における土地利用

庄内川沿いの高蔵寺町や上志段味付近の段丘、庄内川支流の内津川沿いの段丘などには集落や田、畑、樹木畑(桑畑)が広がっている。矢田川流域では、矢田川や香流川沿いの低い段丘では集落や田、畑が広がっているが、庄内川から少し離れた高い段丘や矢田川と香流川に挟まれた比較的高い段丘には田はみられず、畑や森林が広くみられる。また、瀬戸川沿いにおいては右岸側の比較的低い段丘にも森林(針葉樹林)がみられる。

③低地における土地利用

庄内川、矢田川、香流川などの河川周辺の氾濫原低地や旧河道には田が広く分布しており、庄内川沿いの低地などでの自然堤防が発達する箇所には集落や畑が発達している。

庄内川と内津川が合流する付近の扇状地は田が広く分布しており、周囲の斜面下や河道沿いに集落が立地している。その他、矢作川流域の木瀬川や飯野川や庄内川各支流沿いに断続して分布する低地には田が広がり、周囲の斜面下などに集落や畑がみられる。

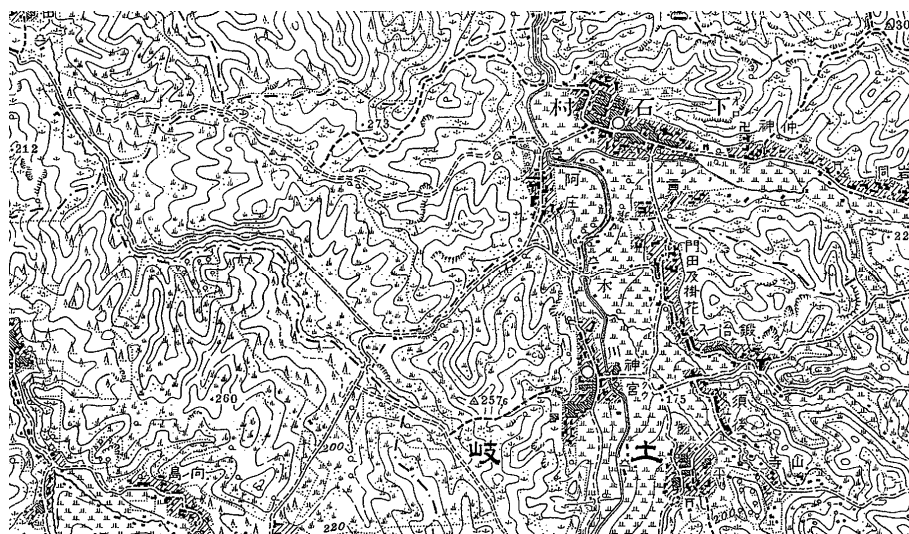
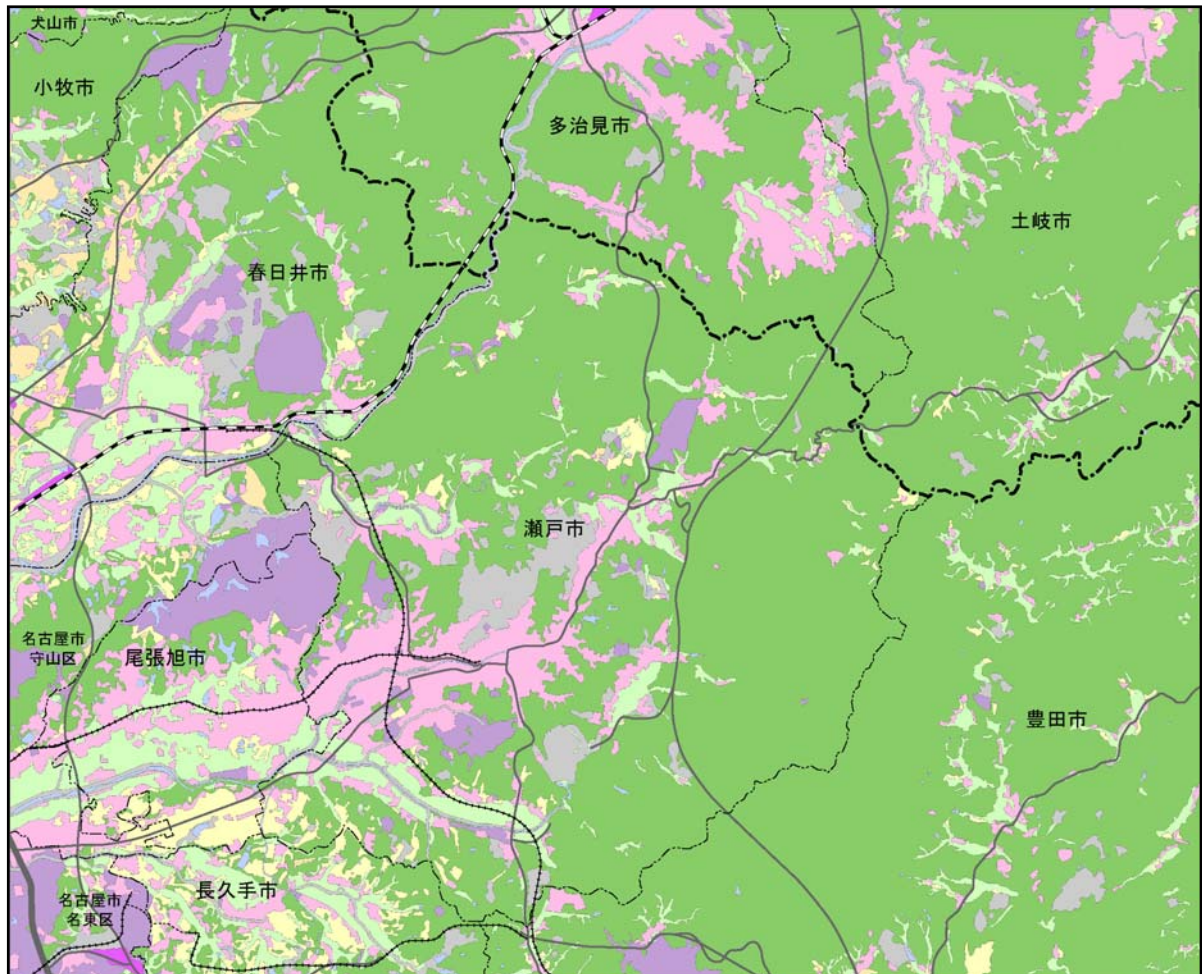


図 4-2 明治期旧版地形図における荒地の例(多治見市笠原町～妻木川)

(2) 昭和 43 (1968) 年頃 (現在から概ね 40 年前) の土地利用

昭和期の土地利用分類図 (第 2 期) は、空中写真測量により改測が行われた 2 万 5 千分の 1 地形図を編集して作成された 5 万分の 1 地形図を基礎資料として、地形図の読図による土地利用分類を行った。本地域では昭和 43 (1968) 年に 2 万 5 千分の 1 地形図の改測や測量が行われ、それに基づき 5 万分の 1 地形図が作成されている。5 万分の 1 地形図で読図が難しい範囲については、2 万 5 千分の 1 地形図を補足的に用いて土地利用分類を行った。作成した昭和 43 (1968) 年頃の土地利用分類図を図 4-3 に示す。



※行政界・鉄道・道路などは現在の情報

図 4-3 本図幅における約 40 年前 (昭和 43 (1968) 年頃) の土地利用

①山地、丘陵地における土地利用

山地、丘陵地の土地利用をみると、比較的なだらかな山地や丘陵において住宅団地やゴルフ場などの大規模な開発が始まっている。大規模ニュータウンのうち、高蔵寺ニュータウンや瀬戸市の菱野地区は造成が始まっていて、高蔵寺ニュータウンの西側では既に宅地となっている区画がみられる。瀬戸市市街地の北側丘陵では丘陵を大きく削り取る陶土などの採掘地が出現しており、同様な改変地は多治見市笠原町付近や瀬戸市の惣作町付近、山路町付近にみられる。また、大学等の教育施設の立地もみられ、瀬戸市上品濃の名古屋学院大学や豊田市八草町の愛知工業大学が既に進出している。

②台地における土地利用

高蔵寺町や多治見市南側の段丘や矢田川、瀬戸川、香流川沿いの低い段丘は市街化が進みつつあり、特に JR 中央本線沿いや名鉄瀬戸線沿いにおいて宅地が増加している。一方、明治期には森林が広くみられた矢田川と香流川に挟まれた比較的高い段丘(本地ヶ原)は、広く畑となっており、これは戦後の開拓による農地で、昭和 36(1961)年に完成した愛知用水により、安定した灌漑が可能となった。愛知用水は木曾川上流域の牧野ダムなどを水源とし、八百津町の木曾川から取水し、犬山市東側の丘陵地を通過して、本地域の北西端から小牧市大山地区、春日井市高蔵寺付近、尾張旭市三郷付近、本地ヶ原東端、長久手市岩作付近を流下する多目的用水で、濃尾平野東側の台地や丘陵地での重要な水源となっている。

③低地における土地利用

庄内川、矢田川、香流川などの河川周辺の低地では宅地化が進みつつあるが、段丘などと比べると農地(田)が残存しており、庄内川と内津川が合流する付近の扇状地でも、明治期と同様、田が広く分布しており、宅地が増加しているのは高蔵寺駅周辺の段丘が中心となっている。

昭和 43(1967)年頃は、減反政策が本格化しておらず、低地の水田は保持される傾向にあり、住宅地開発等は台地・段丘の畑や丘陵地の森林などが中心になっている。

1.2 土地利用変遷の概要

(1) 土地利用面積の推移

図 4-4 と表 4-1 は現在から概ね 120 年前及び 40 年前の 2 時期の土地利用分類図と、国土数値情報として提供されている 2006 年の土地利用細分メッシュデータに基づき、本図幅における**田**、**畑**(畑・その他農用地)、**森林等**(森林・荒地・水面)、**宅地等**(建物・その他の用地)の 4 つの主要な土地利用区分毎の面積集計結果である。

農地をみると 1891(明治 24)年に**田**は約 46km²、**畑**は約 13km²であったものが、1968(昭和 43)年には田は約 38km²、畑は約 17km²となり、田は 2 割近くの減少する一方、畑は 3 割ほど増加している。2006(平成 18)年には田は約 24km²、畑は約 8km²となり、田は明治期から比べると半減し、畑は昭和 40 年代と比べると半減している。市区別にみると、田は名古屋市街地に近い名古屋市守山区、名東区、尾張旭市での減少が大きく、市街地化が著しかった名古屋市名東区では 2006 年の土地利用細分メッシュデータでは田がなくなっている。畑は多治見市、名古屋市守山区、名東区、尾張旭市での減少が大きく、多治見市と名古屋市名東区では 2006 年の土地利用細分メッシュデータでは畑がなくなっている。

森林等は 1891(明治 24)年には約 342km²であったものが、1968(昭和 43)年には約 297km²となり、約 45km²(約 13%)減少している。2006 年には約 247km²となり、明治期から比べると約 95km²(約 28%)減少している。市町村別にみると、瀬戸市、春日井市、尾張旭市で大きく減少しており、陶土等の採掘地やニュータウンが拡大した瀬戸市は、明治期と比べて約 25 km²(約 26%)も減少しており、春日井市や尾張旭市は、戦後の台地・丘陵地の開拓や、その後のニュータウン開発によって、明治期と比べて、それぞれ約 17 km²(約 47%)、約 10 km²(約 74%)減少している。

一方、**宅地等**は著しい増加傾向にあり、1891(明治 24)年には約 20km²であったものが、1968(昭和 43)年には約 70km²となり、およそ 3.5 倍に拡大し、2006(平成 18)年には約 142km²となり、明治期から比べると約 7.1 倍に拡大している。市区別にみると、各市区で 5～10 倍程度増加しており、名古屋市守山区、名東区、尾張旭市では約 10 倍に拡大している。

(2) 地形分類別土地利用面積の推移

明治期、昭和 40 年代、現在の 3 時期の土地利用面積を自然地形分類毎に集計・整理し、図 4-5、表 4-2 に示す。

全体的に田、畑、森林等はどの地形要素においても減少傾向にあるが、田は氾濫原低地等において 1968(昭和 43)年以降の減少が目立つ。畑は 1968(昭和 43)年においては、戦後の開拓により、丘陵地や台地では横ばい～増加であるが、2006(平成 18)年には大きく面積を減じている。森林は山地や丘陵地、台地において明治期から 1968(昭和 43)年にかけて陶土等の採掘地の拡大や農地の開拓、ニュータウンの開発等によって減少しており、2006(平成 18)年にかけても減少傾向が続いている。

一方、増加傾向にある宅地等は、ニュータウン開発が比較的早くから始まった地域のため、1968(昭和 43)年には山地においても増加がみられ、2006(平成 18)年にかけては名古屋市街地の拡大に伴い、全ての地形区分において顕著な増加がみられる。

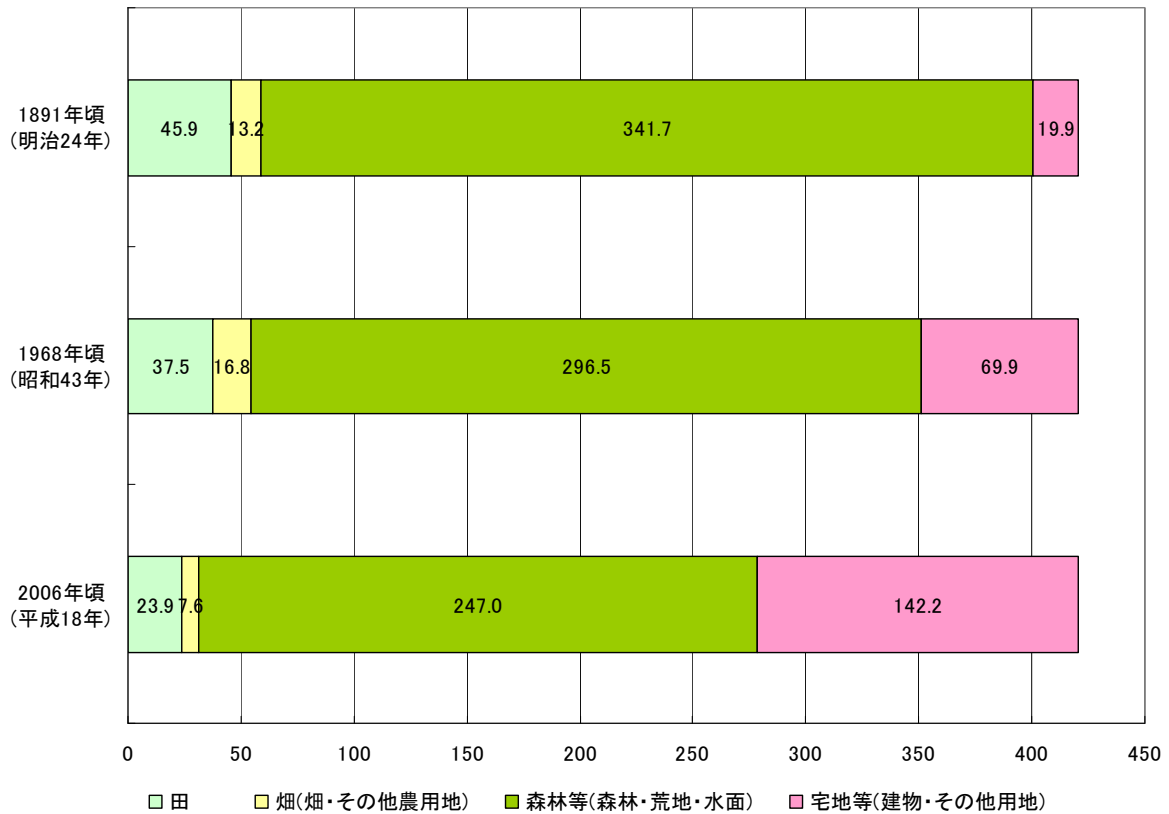
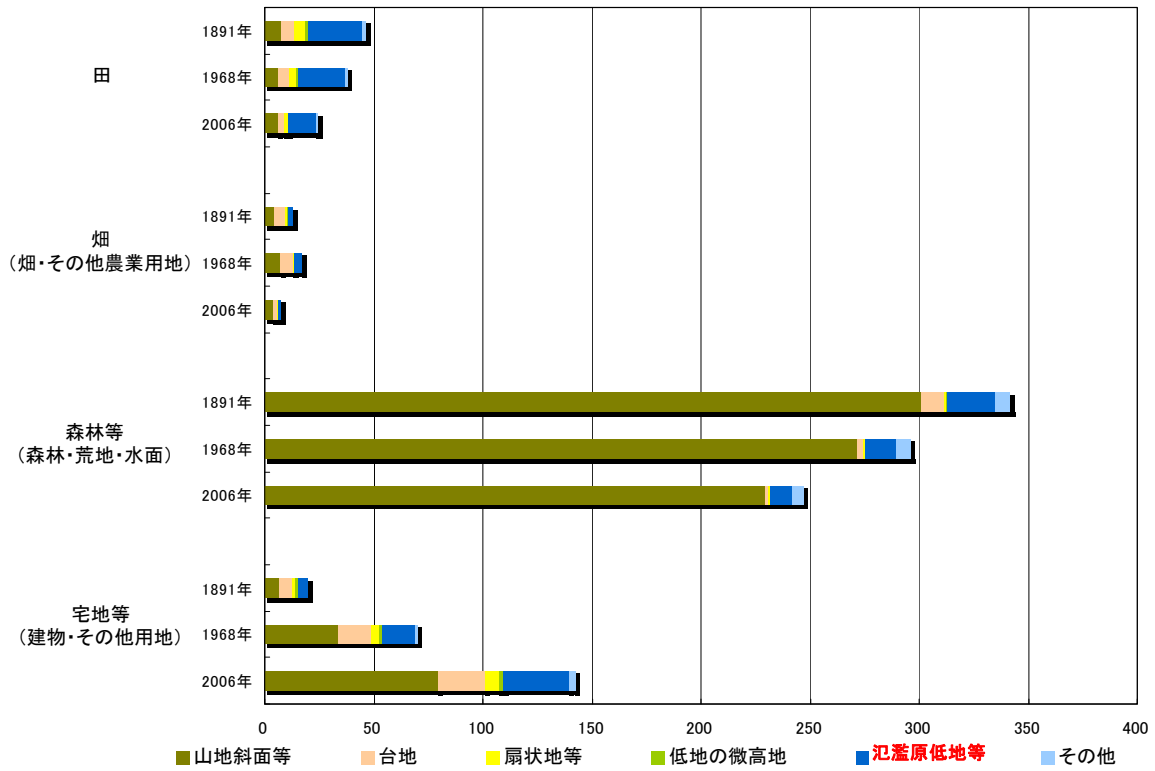


図 4-4 土地利用別面積の推移 (1891年・1968年・2006年)

表 4-1 土地利用別面積の推移 (1891年・1968年・2006年)

区分	市区町村													合計
	多治見市	瑞浪市	土岐市	名古屋市 守山区		名東区	瀬戸市	春日井市	豊田市	犬山市	小牧市	尾張旭市	長久手市	
1891年 (明治24年)頃	田	3.3	0.0	5.2	3.5	1.6	9.7	8.2	4.6	0.1	1.3	4.6	3.8	45.9
	畑(畑・その他農用地)	1.3	0.0	0.3	1.1	0.6	1.3	3.1	0.2	0.0	0.4	1.7	3.2	13.2
	森林等(森林・荒地・水面)	39.2	0.2	51.0	11.2	3.3	96.0	36.6	74.4	1.3	8.9	13.1	6.5	341.7
	宅地等(建物・その他用地)	2.9	0.0	2.2	1.1	0.5	4.5	4.1	1.2	0.0	0.2	1.7	1.5	19.9
1968年 (昭和43年)頃	田	1.7	0.0	3.4	3.1	0.3	7.5	7.0	5.0	0.2	1.4	4.2	3.7	37.5
		△ 1.6	0.0	△ 1.8	△ 0.4	△ 1.3	△ 2.2	△ 1.2	0.4	0.1	0.1	△ 0.4	△ 0.1	△ 8.4
	畑(畑・その他農用地)	0.3	0.0	0.3	1.9	0.1	2.6	4.3	0.8	0.0	1.3	2.2	3.0	16.8
		△ 1.0	0.0	0.0	0.8	△ 0.5	1.3	1.2	0.6	0.0	0.9	0.5	△ 0.2	3.6
	森林等(森林・荒地・水面)	35.5	0.2	48.4	6.5	1.3	84.2	29.7	71.7	1.2	7.3	4.4	6.1	296.5
		△ 3.7	0.0	△ 2.6	△ 4.7	△ 2.0	△ 11.8	△ 6.9	△ 2.7	△ 0.1	△ 1.6	△ 8.7	△ 0.4	△ 45.2
宅地等(建物・その他用地)	9.2	0.0	6.6	5.3	4.2	17.1	11.1	2.9	0.1	0.9	10.2	2.3	69.9	
	6.3	0.0	4.4	4.2	3.7	12.6	7.0	1.7	0.1	0.7	8.5	0.8	50.0	
2006年 (平成18年)頃	田	1.0	0.0	2.3	0.8	0.0	5.5	4.0	4.2	0.2	1.7	1.4	2.8	23.9
		△ 2.3	0.0	△ 2.9	△ 2.7	△ 1.6	△ 4.2	△ 4.2	△ 0.4	0.1	0.4	△ 3.2	△ 1.0	△ 22.0
	畑(畑・その他農用地)	0.0	0.0	0.1	0.6	0.0	1.1	2.2	0.9	0.0	1.0	0.5	1.2	7.6
		△ 1.3	0.0	△ 0.2	△ 0.5	△ 0.6	△ 0.2	△ 0.9	0.7	0.0	0.6	△ 1.2	△ 2.0	△ 5.6
	森林等(森林・荒地・水面)	28.3	0.2	42.9	3.6	0.3	70.9	19.4	67.5	1.1	6.0	3.4	3.4	247.0
		△ 10.9	0.0	△ 8.1	△ 7.6	△ 3.0	△ 25.1	△ 17.2	△ 6.9	△ 0.2	△ 2.9	△ 9.7	△ 3.1	△ 94.7
宅地等(建物・その他用地)	17.4	0.0	13.4	11.8	5.7	33.9	26.5	7.9	0.1	2.2	15.7	7.6	142.2	
	14.5	0.0	11.2	10.7	5.2	29.4	22.4	6.7	0.1	2.0	14.0	6.1	122.3	
合計	46.7	0.2	58.7	16.8	6.0	111.4	52.1	80.5	1.4	10.9	21.0	15.0	420.7	

1. 1891年及び1968年は本調査で作成した土地利用分類図からの集計値。2006年は国土数値情報(土地利用細分メッシュ)による集計値
2. 1968年及び2006年の下段は、1891年の面積との比較値
3. 行政区域は2010年3月31日現在の区域を用いた。



山地斜面等：山地斜面、麓斜面及び崖錐、土石流堆積地
 扇状地等：扇状地、緩扇状地など
 氾濫原低地等：谷底低地、氾濫原低地、旧河道、湿地
 台地等：砂礫台地
 低地の微高地：自然堤防、砂丘など
 その他：河川敷、水部など

図 4-5 地形分類別の土地利用面積の推移 (1891年・1968年・2006年)

表 4-2 地形分類別の土地利用面積の推移 (1891年・1968年・2006年)

年代	地形区分		山地斜面等	台地	扇状地等	低地の微高地	氾濫原低地等	その他	合計
	土地利用区分								
1891年 (明治24年)頃	田		7.3	6.5	5.0	0.7	25.3	1.3	46.1
	畑(畑・その他農用地)		4.3	5.5	0.5	0.5	2.2	0.2	13.2
	森林等(森林・荒地・水面)		301.0	10.4	1.2	0.3	22.1	6.7	341.7
	宅地等(建物・その他用地)		6.8	5.4	1.9	0.9	4.6	0.2	19.8
1968年 (昭和43年)頃	田		6.4	5.0	3.5	0.3	21.8	0.6	37.6
		△ 0.9	△ 1.5	△ 1.5	△ 0.4	△ 3.5	△ 0.7	△ 8.5	
	畑(畑・その他農用地)		7.5	5.3	0.5	0.4	3.0	0.2	16.9
		△ 3.2	△ 0.2	0.0	△ 0.1	0.8	0.0	3.7	
	森林等(森林・荒地・水面)		271.7	2.9	0.7	0.1	14.1	6.8	296.3
		△ 29.3	△ 7.5	△ 0.5	△ 0.2	△ 8.0	0.1	△ 45.4	
宅地等(建物・その他用地)		33.9	14.5	3.9	1.6	15.3	0.8	70.0	
	△ 27.1	9.1	2.0	0.7	10.7	0.6	50.2		
2006年 (平成18年)頃	田		6.2	2.7	1.6	0.2	12.9	0.5	24.1
		△ 1.1	△ 3.8	△ 3.4	△ 0.5	△ 12.4	△ 0.8	△ 22.0	
	畑(畑・その他農用地)		4.2	1.7	0.1	0.1	1.3	0.1	7.5
		△ 0.1	△ 3.8	△ 0.4	△ 0.4	△ 0.9	△ 0.1	△ 5.7	
	森林等(森林・荒地・水面)		229.6	1.5	0.6	0.2	9.9	5.2	247.0
		△ 71.4	△ 8.9	△ 0.6	△ 0.1	△ 12.2	△ 1.5	△ 94.7	
宅地等(建物・その他用地)		79.4	21.9	6.3	1.9	30.0	2.6	142.1	
	△ 72.6	16.5	4.4	1.0	25.4	2.4	122.3		
合計			319.4	27.8	8.6	2.4	54.1	8.4	420.7

(3) 人口集中地区の変遷

国勢調査では、1960（昭和 35）年以降 5 年ごとに「人口集中地区」（DID 区域）※が設定されている。本図幅を含む濃尾平野東縁部の 1960（昭和 35）年、1980（昭和 55）年、2005（平成 17）年の 3 時期の人口集中地区を図 4-6 に示す。

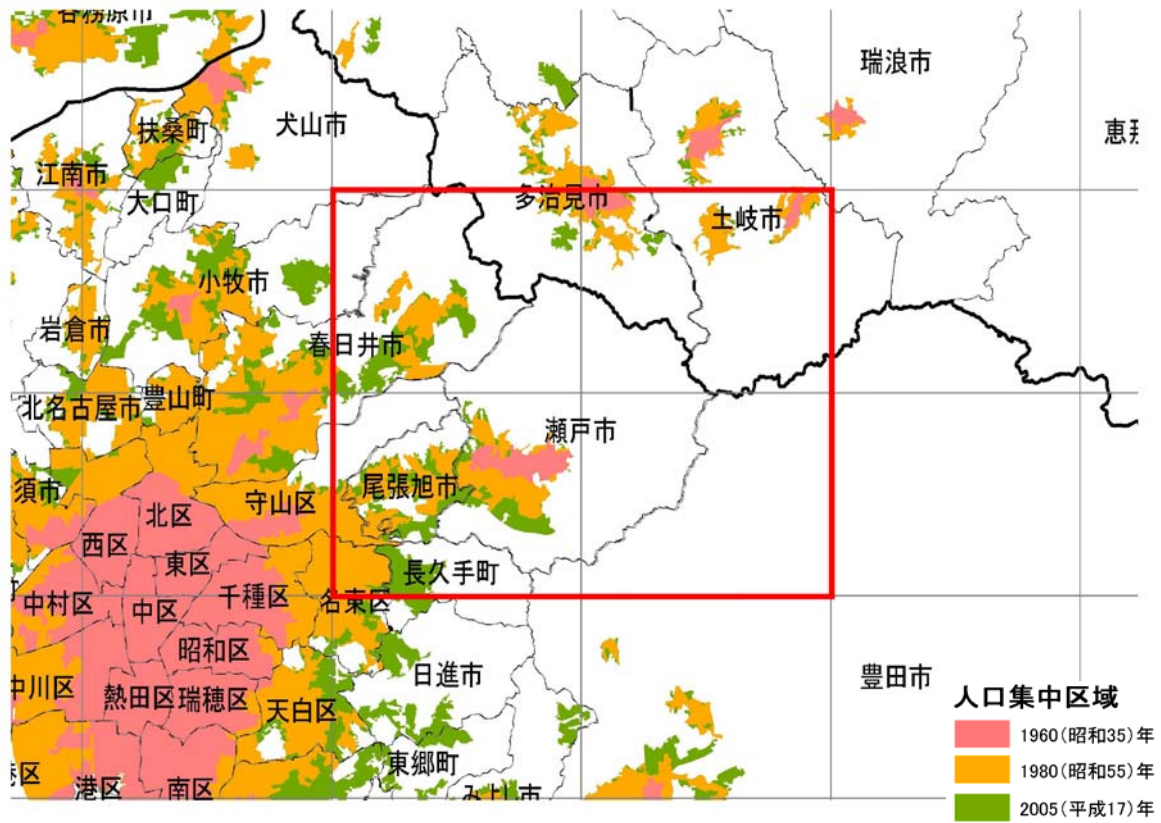
1960（昭和 35）年では人口集中地区は瀬戸市、多治見市の中心部や土岐市妻木地区のみであったものが、1980（昭和 55）年には中心市街地の周囲に拡大し、山地や丘陵を開発したニュータウンも人口集中地区になっている。また、図幅西端部は名古屋市の市街地の外縁部となり、人口集中地区が西方から拡大している。2005（平成 17）年には既存の人口集中地区の周囲での拡大とともに、多治見市の周辺の丘陵地ではニュータウンでの新規の人口集中地区がみられる。

本図幅での人口集中地区の面積を地形分類の大まかな区分毎に整理して表 4-3 に示す。本図幅の人口集中地区の面積は、1960（昭和 35）年に 7.5km²であったものが、1980（昭和 55）年には 47.1km²、2005（平成 17）年には 67.1km²となり、人口集中地区の顕著な拡大がみられる。本図幅は低地が少なく、山地や丘陵地が広いため、人口集中地区も山地や丘陵地に位置する地域が広く、人口集中地区全体に対する山地・丘陵地の人口集中地区の割合は 1960（昭和 35）年には既に 34.7%であり、1980（昭和 55）年には 42.7%まで増加している。その後、2005（平成 17）年には 40.7%に微減しており、代わりに低地の人口集中地区の割合が増加している。

表 4-3 地形分類別人口集中地区面積の推移

区域 \ 分類	地形分類別面積				合計
	山地・丘陵地	台地	低地	その他	
「瀬戸図幅」全域	319.4	27.8	67.7	5.8	420.7
1960年のDID	2.6	1.6	3.1	0.2	7.5
割合(%)	34.7	21.3	41.3	2.7	100.0
1980年のDID	20.1	9.8	16.1	1.1	47.1
割合(%)	42.7	20.8	34.2	2.3	100.0
2005年のDID	27.3	13.6	24.8	1.4	67.1
割合(%)	40.7	20.3	37.0	2.1	100.0

※人口集中地区（DID 区域）：市区町村の境域内で人口密度の高い基本単位数（原則として人口密度が 1 平方キロメートルあたり 4,000 人以上）が隣接して、その人口が 5,000 人以上となる地域をいう。都市的地域の特質を明らかにする統計上の地域単位として、昭和 35 年国勢調査から人口集中地区が設定されている。



資料：国土数値情報(人口集中地区)

図 4-6 本図幅周辺における人口集中地区の推移(1960年・1980年・2005年)

5 調査地域の災害履歴概要

5.1 災害履歴概説

(1) 地震

濃尾平野に被害を及ぼす地震には、①南海トラフ沿いで発生する海溝型巨大地震、②陸域の浅い場所で発生する地震の2タイプが存在する(地震調査研究推進本部 2009)。

①のタイプは北太平洋沖合のプレート境界で発生する地震で、1854年の安政東海地震(M8.4)や1944年の東南海地震(M7.9)が該当する。90～150年程度の発生周期性があること(図5-1)、東海地震・南海地震との連動の可能性がある、広い範囲に揺れや津波による被害をもたらすことが知られている。地震が発生した場合、市街地が広がる地域に被害を及ぼす可能性が高いことから、最も警戒されている地震であるといえる。本図幅にかかる全市町村が「東南海・南海地震防災対策推進地域」に指定されている。

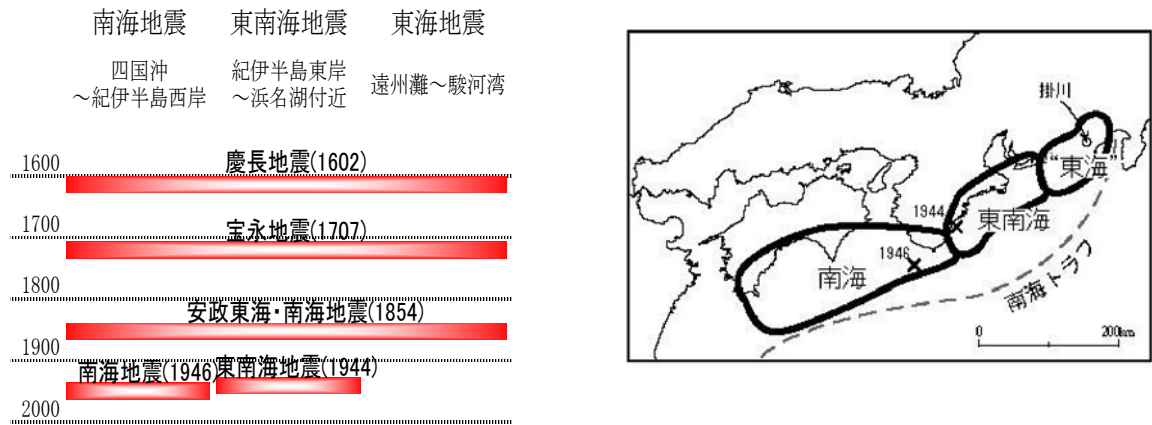


図5-1 過去に発生したプレート境界型地震
(中央防災会議 2008 より)

②のタイプは陸域の活断層によってもたらされる地震である。本図幅近辺には根尾谷断層帯や屏風山・恵那山断層帯、猿投山断層帯といった主要な断層帯があり、これら長大な活断層の動きにより大きな揺れを生じ甚大な被害が発生することが知られている。明治24年(1891)の濃尾地震は、根尾谷断層帯の活動によるものである。

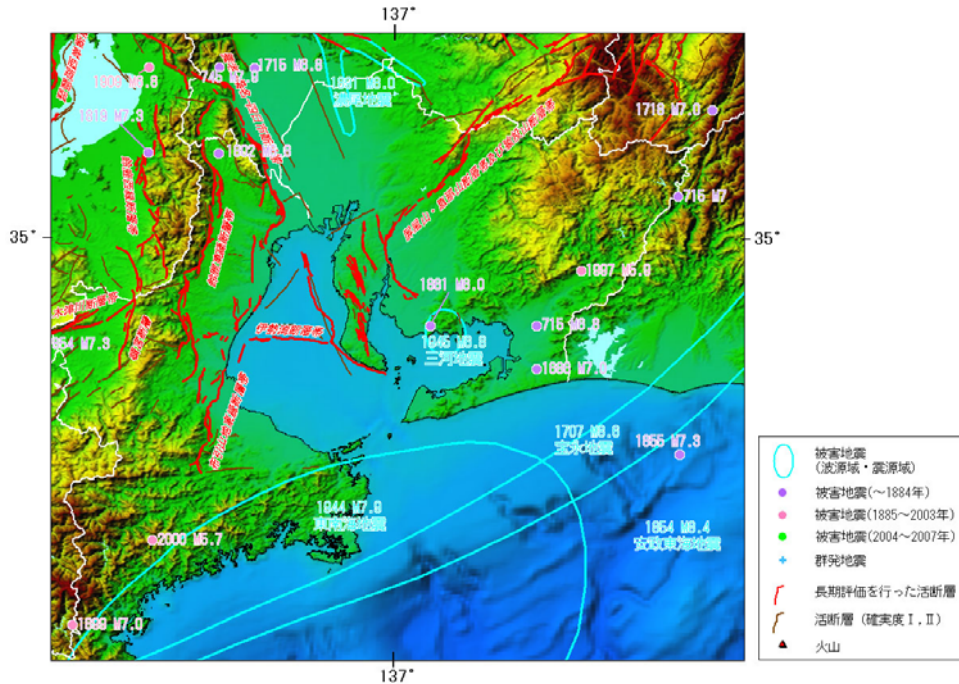


図 5-2 岐阜県及び周辺の活断層と被害地震震源 (地震調査研究推進本部 HP より)

また、天正 13 年(1586) 11 月 29 日に発生した天正地震も規模の大きな内陸型の地震であるが、震源については庄川断層帯、阿寺断層帯、養老-桑名-四日市断層帯の諸説や、2 つ以上の地震の同時発生 (双子地震) 説などがある。

表 5-1 天正地震による推定被害の概要 (飯田 1987)

国名	死者	全壊建物
尾張	2,850	3,500
三河	10	20
伊勢	500	300
美濃	700	1,300
飛騨	700	800
近江	650	800
大和	30	50
山城	20	50
摂津	20	50
和泉	20	60
越前	20	50
若狭	100	150

濃尾地震については、次の詳説にて述べる。

そのほか、周辺地域で発生した地震としては昭和 20 年(1945) 1 月 13 日に発生した三河地震がある。三河地震は、前年に発生した東南海地震の余震で、三河地方中央部の深溝断層、横須賀断層の活動によったものと考えられている。

(2) 風水害

① 地域の特徴と風水害の歴史

本図幅は、濃尾平野の北東部に位置しており、庄内川及び矢作川などの本支流が山

地・丘陵地及びこれらの間にある盆地を流れる位置にある。

庄内川は本図幅の北西部にあり、岐阜県土岐市、多治見市、愛知県春日井市、瀬戸市を通り、名古屋市へ流れる。本図幅の中部・西部の大部分はこの流域である。また庄内川の支流矢田川があり、瀬戸市を源流として尾張旭市を通り名古屋市守山区にて庄内川に合流している。本図幅では、これらの流域の大部分は丘陵地～小起伏山地となっている。

岐阜県内では「土岐川」と呼ばれ、多治見市の中心部の盆地を流れたのち、愛知県境にかけての狭窄部「古虎溪」に向かう。このため、盆地の最下流部（狭窄部の始まり）では、大雨のたびに浸水被害が発生している。

愛知県内では徐々に谷底が広がり、本図幅の西部から隣接する「名古屋北部」図幅に差しかかる付近から、河川沿いに谷底平野が形成される。「名古屋北部」図幅では谷底平野が広がり、「一宮自然堤防地帯」を経て「蟹江三角州地帯」へと流れ、伊勢湾に注ぎ込む。谷底平野より下流では、江戸時代以降頻繁に破堤し、このため昭和4年に国の直轄河川として治水事業が取り組まれた。昭和34年(1959)9月26日の伊勢湾台風では未曾有の豪雨となり下流部で破堤したが、これ以降は本流に関する破堤はみられない。

庄内川の支流は、矢田川、^{かなれ}香流川などがあるが、尾張山地、瀬戸丘陵、長久手丘陵に源流を持つ小流域が集まり庄内川本流に注ぎ込む。これらの小起伏山地や丘陵地帯は、かつては陶土の採集による改変があったが、人口が少なく、内水氾濫が大きな問題になることはなかった。昭和40年代より宅地開発等が始まると、低地に建つ住宅などに被害がおよぶようになった。

矢作川は、本図幅の南東部に位置する豊田市を流域とするが、矢作川本流は本図幅には掛からない。流域は猿投山山地に位置し、現在も山地が残されており際だった水害は発生していない。

② 歴史時代の顕著な風水害

風水害の経緯については、「愛知県災害誌」（名古屋地方気象台監修 1970）、「愛知県災害誌(昭和45～55年）」（名古屋地方気象台 1982）、「愛知県史 別編自然」（愛知県史編さん委員会 2010）及び「庄内川水害史」（庄内川工事事務所 1976）、「庄内川流域史」（庄内川工事事務所 1986）などに整理されているが、慶長15年(1610)の名古屋開府は庄内川の治水工事の開始とも位置づけられる。

「庄内川水害史」等から、江戸時代以降の顕著な水害をとりあげると以下のようなものがある。

- ・寛永9年(1632) 右岸破堤、尾張中部20か村浸水
- ・元禄14年(1701) 五条川合流点の右岸が破堤、海部郡一帯が浸水。
- ・元文4年(1739) 西万場の南で左岸が破堤、名古屋市西部一帯が泥海と化した。
- ・宝暦7年(1757) 右岸、小田井、大野木で破堤
- ・明和4年(1767) 右岸、比良、小野木、土器野、松原などで破堤
- ・安永8年(1779) 味鉢、大野木で右岸が破堤し小牧付近まで水没、二ツ杵から右岸には停止清洲から海部郡一帯が泥海と化した。

- ・明治 29 年(1896) 24 時間雨量 351mm を記録し、川中 3 村は破堤により湖水のよう
になった。また長須賀にて右岸破堤、五条川も上流にて破堤。
- ・大正元年(1912)9 月 22～23 日 暴風雨と高潮により、下流部で甚大な被害
- ・大正 10 年(1911)9 月 25～26 日 暴風と高潮津波
- ・昭和 32 年(1957)8 月 7 日 愛知県 22, 428 戸、岐阜県 4, 540 棟被災
- ・昭和 34 年(1959)9 月 26 日 伊勢湾台風 愛知県 140, 596 戸、岐阜県 6, 227 世帯被災
- ・昭和 36 年(1961)6 月 27 日 水害区域面積 7, 853ha、 被災家屋 39, 775 棟
- ・昭和 47 年(1972)7 月 12 日 水害区域面積 574. 1ha、 被災家屋 2, 347 棟
- ・昭和 50 年(1975)7 月 4 日 水害区域面積 3, 188. 4ha、 被災家屋 10, 422 棟
- ・昭和 51 年(1976)9 月 8 日 水害区域面積 3, 476. 5ha、 被災家屋 8, 713 棟
- ・昭和 58 年(1983)9 月 28 日 水害区域面積 535. 9ha、 被災家屋 8, 035 棟
- ・昭和 63 年(1988)9 月 25 日 水害区域面積 429. 8ha、 被災家屋 1, 990 棟
- ・平成元年(1989)9 月 20 日 水害区域面積 89. 7ha、 被災家屋 655 棟
- ・平成 3 年(1991)9 月 19 日 水害区域面積 969. 8ha、 被災家屋 6, 456 棟
- ・平成 11 年(1999)6 月 30 日 水害区域面積 11ha、 被災家屋 121 棟
- ・平成 12 年(2000)9 月 12 日 水害区域面積 10, 487. 1ha 被災家屋 34, 049 棟 (東海豪
雨)
- ・平成 20 年(2008)8 月末 水害区域面積 992. 2ha、 被災家屋 17, 247 棟
- ・平成 23 年(2011)9 月 20 日 床上浸水 295 棟 床下浸水 474 棟

※ 大正10年までは「庄内川水害史」(庄内川建設事務所, 1976)

昭和32, 34年「庄内川水系の流域及び河川の概要」(国土交通省, 2005)

昭和36～平成20年「水害統計調査」(国土交通省水管理・国土保全局河川計画課経済係,
各年)

水害区域面積及び被災家屋は岐阜県と愛知県の合計

「平成23年台風第15号による被害状況等について」(内閣府, 平成23年(2011)9月30日速
報)

近年でも、溢水、破堤、内水氾濫といった水害が発生しており、平成 12 年の東海
豪雨のように破堤すると人口密集地であることから甚大な被害が生じる。

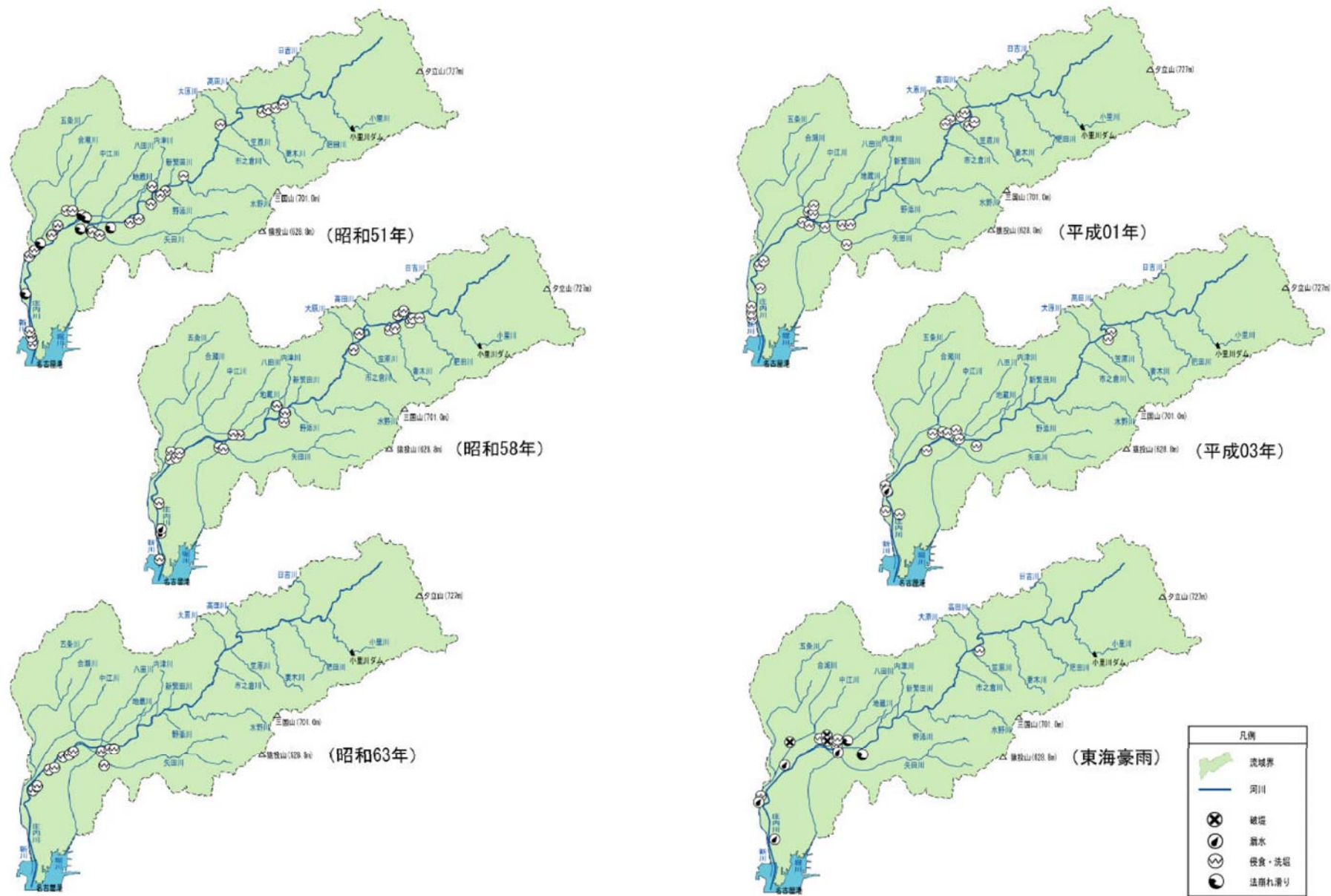


図 5-3 過去の主な洪水と被害状況 (国土交通省河川局, 2005)

5.2 災害履歴細説

(1) 地震

① 作図資料

本図幅の範囲で、記録が正確な明治以降に、多大な被害をもたらした地震としては、濃尾地震(明治24年(1891)年10月28日)がある。被害の記録として建物被害率及び液状化発生地点を図化した。

表 5-2 地震に関する災害履歴図作成の概要

建物被害率	出典	(濃尾地震) 飯田汲事(1979) 明治24年(1891年)10月28日濃尾地震の震害と震度分布. 愛知県防災会議
	図化方法	文献に記録されている、市町村(当時)ごとの被害率(全壊数、半壊数、住家戸数)を、地図上に示した。自治体の位置は、旧版地形図にある当時の役場としたが、不明な場合は地名の位置とした。

② 濃尾地震

i. 地震の震源・規模

明治24(1891)年10月28日午前6時に発生した濃尾地震は日本の内陸で発生した最大級の地震である。マグニチュード8.0、震源は岐阜県本巣市根尾で、ここを中心として北西-南東方向に延びる根尾谷断層帯が延長約80kmにわたって活動した。なお、被害の状況からみて、変位が見られた根尾谷断層帯のほか、濃尾平野の地下の伏在断層がともに活動したというモデルも提示されている。



図 5-4 濃尾地震に伴う地殻変動(村松ほか、1964)

濃尾地震の震動は北海道や南西諸島を除く全国で観測され、震源断層から濃尾平野にかけて震度7、福井県、岐阜県、滋賀県、愛知県、三重県の広い範囲で震度6の揺れが生じたと推定されている。

ii. 被害の概要

被害の概要を右表に示す。震源のある岐阜県と隣接する愛知県の被害が大半を占める。とくに震央にある根尾村付近では、100%の住宅が全壊という惨事であった。さら

に、根尾谷断層帯に沿って被害率が高くなっているほか、岐阜市から愛知県北西部でも甚大な被害が発生している。

表 5-3 濃尾地震による府県別被害

	愛知県	岐阜県	福井県	滋賀県	三重県	大阪府	奈良県	石川県	兵庫県	静岡県	京都府	山梨県	富山県	長野県	計
死者(人)	2,638	5,184	12	16	1	23	1	2		3					7,880
負傷者(人)	7,705	13,365	98	48	17	86	1		1	2		2	2	2	21,329
住家(全壊)(戸)	39,093	52,690	1,075	153	235	110	27	7	12	4	12	1	1	1	93,421
住家(半壊)(戸)	32,059	35,546	1,073	366	445	419	20	49	42			2	1	1	70,023
非住家(全壊)(棟)	46,418	23,122	829	217	397	135	27	28	13	2	1	1			71,190
非住家(半壊)(棟)	23,596	12,787	15,271	410	307	706	7	32	8	5		6			53,135

(飯田,1979による)

iii. 本図幅における被害の状況等

飯田(1979)によると、本図幅において大きな被害が見られた自治体は、志段味村(現在の名古屋市守山区)で全壊率約 1.0%、半壊率約 4.0%、不二村(現春日井市)で全壊率約 2.0%、半壊率約 7.5%、多治見町(多治見市)で全壊率約 1.6%、半壊率約 3.6%などであった。濃尾平野中部の全壊率が 100 に近い自治体と比べるとかなり小さい被害であるとはいえ、甚大な被害であったと考えられる。

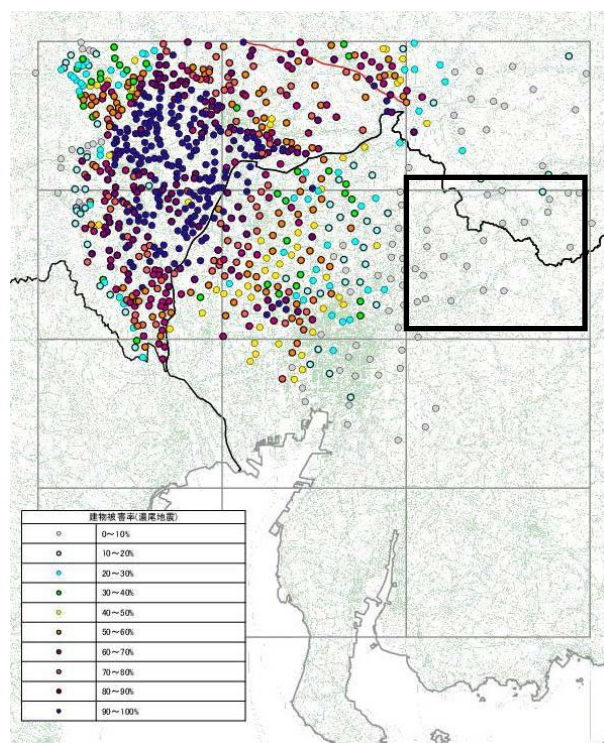
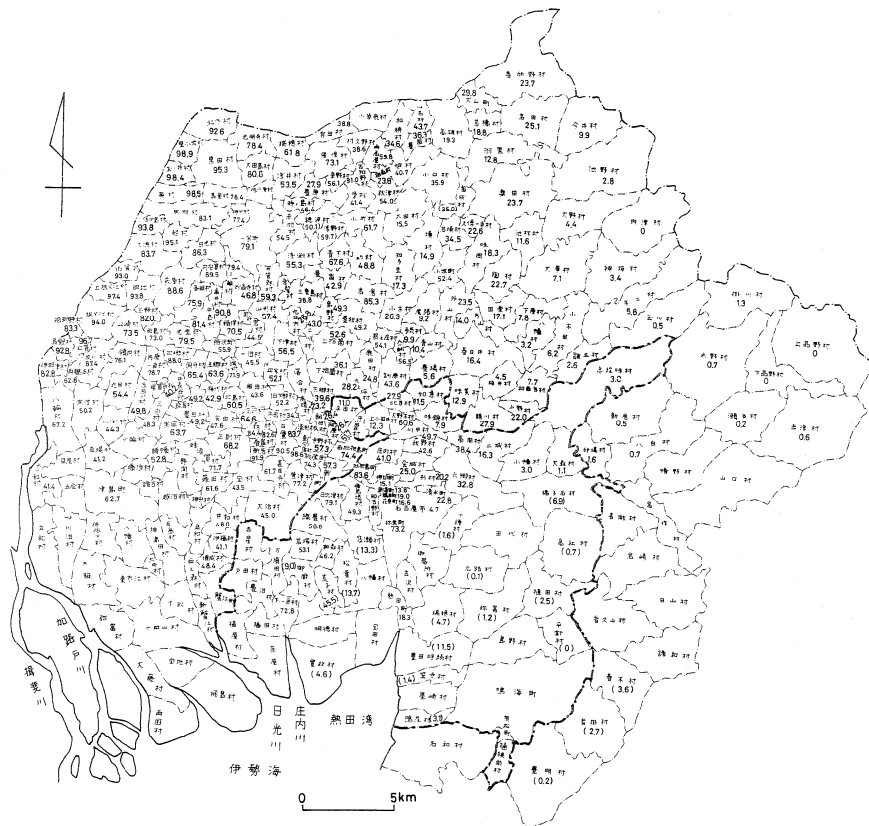


図 5-5 濃尾地震による建物被害率
飯田(1979)より作成



岐阜県西南部



愛知県尾張地方

図 5-6 濃尾地震の建物被害率(出典：飯田 1979)

(2) 風水害

① 作図資料

本図幅の範囲での風水害による災害は、庄内川流域を中心とした破堤・氾濫が数多くある。概略は前述したとおりであるが、作図にあたっては、浸水範囲が記録されていること、地域を特徴づける顕著な災害であること、の2点を考慮し、以下の5期を抽出した。

土砂災害については、山地域で発生した土砂移動現象を「災害」として捉えていないことから、網羅的に地図上に記録保管してはいない。そのため、記録が整っている近年の資料を可能な限り掲載したものにすぎない。また、昭和47年(1972)7月の「七夕豪雨」では西三河地域で多くの山崩れが発生した。浸水実績図を作成した時期に対応するすべての豪雨時の災害を網羅したものではないことに留意されたい。

表 5-4 風水害に関する災害履歴図作成の概要

浸水実績	対象時期	① 昭和 32 年(1957)8 月 8 日 ② 昭和 51 年(1976)9 月 12 日 台風 17 号 ③ 平成 12 年(2000)9 月 11・12 日 台風 14 号 (東海豪雨) ④ 平成 20 年(2008)8 月 集中豪雨	
	出典	(岐阜県) ①「週刊たちみ」(多治見市広報)昭和 32 年 8 月 16 日号 ④河川防御対象氾濫区域図(平成 12 年 9 月洪水実績図 (岐阜県,2001) (愛知県) ②③ 浸水実績図(矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域)(愛知県河川課) ④平成 20 年 8 月末豪雨(矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域)	
	図化方法	浸水範囲を移写した。	
土砂災害	発生記録	対象時期	(岐阜県) 平成 16 年以降(一部それ以前を含む) (愛知県) 平成 11・12 年
		出典	(岐阜県) 岐阜県林務課資料・ (愛知県) 愛知県砂防課資料
		図化方法	各県資料を災害発生地点の情報として移写した。
	多発地域	対象時期	昭和 47 年 7 月
		出典	国土地理院撮影空中写真 CB72-8Y C1~C4
		図化方法	土砂崩れが多発した地域を空中写真より読み取った。

② 昭和 32 年(1957)8 月 7～8 日 集中豪雨

i. 気象状況

名古屋と多治見を結ぶ狭い地域に、雷を伴った短時間の集中豪雨があった。

表 5-5 主な観測値

昭和32年集中豪雨		
項目	観測所	観測値
時間降水量	名古屋	42.0 mm
	多治見	130.0 mm
	上水野	66.4 mm
	赤津	55.2 mm
	中品野	65.5 mm

愛知県災害誌による

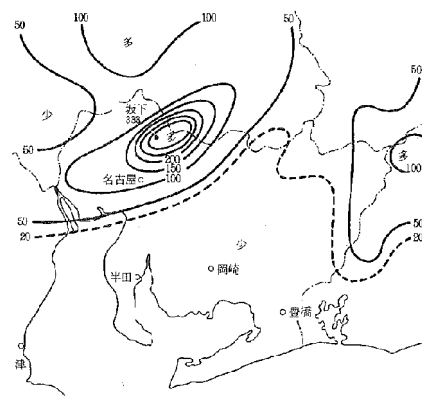


図 5-7 日雨量分布図(7日9時～8日9時)

(愛知県災害誌)

ii. 災害規模

庄内川は、大正 14 年来の大増水となったのをはじめ、付近の小河川や池は大半が氾濫し、高蔵寺、志段味方面の山は地すべりのため山容が一変したほどであった。

表 5-6 被害概要

	愛知県	岐阜県
死者(人)	33	
負傷者(人)	44	3
家屋全壊(戸)	76	6
半壊(戸)	89	7
流失(戸)	12	18
床上浸水(棟)	3,547	80
床下浸水(棟)	23,961	659

愛知県災害誌、岐阜県災異史による

iii. 図幅内の災害発生

上の表に見るように、愛知県下の被害がかなり大きく、雨量の分布から見ても本図幅における災害発生が顕著であったと考えられる。しかし、浸水地域や土砂災害発生地点の統一的な資料はないため、多治見市の広報に掲載された浸水範囲図から整理した。庄内川(土岐川)の多治見市市街地で多く浸水した。

④ 昭和 51 年 9 月

i. 気象状況

台風 17 号は九州西岸を通過した台風であったが、長期間九州南西沖で停滞し、四国から関東へ伸びる前線を活発化させたために、各地に大雨をもたらした。岐阜県では長良川上流で 1,000mm を超える雨となった。

表 5-7 主な気象値

昭和51年台風17号		
項目	観測所	観測値
期間降水量 9/8～14	名古屋	422.5 mm
	岐阜	839.0 mm
日降水量	名古屋	98.5 mm
	岐阜	243.0 mm

気象庁HP「災害をもたらした気象事例」による

ii. 災害規模

長良川右岸の岐阜県安八町では堤防が決壊して多くの家屋に浸水被害が発生した。愛知県でも木曾川流域を中心として浸水被害が多く発生している。

表 5-8 被害概要

	愛知県	岐阜県
死者(人)	1	9
負傷者(人)	37	22
家屋全壊(戸)	14	22
半壊(戸)	435	181
床上浸水(棟)	13,488	24,519
床下浸水(棟)	103,311	51,405

愛知県災害誌、岐阜県災異史による

iii. 図幅内の災害発生

とくに名古屋市守山区から名古屋市名東区にまたがる香流川で広く浸水した。その他瀬戸市、尾張旭市、長久手市などでも浸水した。

④ 平成 12 年 9 月 (東海・恵南豪雨)

i. 気象状況

日本付近に停滞していた秋雨前線に、台風 14 号からの温かく湿った空気が多量に流れ込み、前線の活動が著しく活発となり、愛知県を中心とした東海地方では記録的な大雨となった。9 月 11～12 日の 2 日間の総降水量は名古屋で 567mm、東海市で 589mm などである。名古屋地方気象台では記録した最大日降水量(428mm)は、明治 29 年の既往最大記録の 2 倍近い雨量であった。

表 5-9 主な気象値

平成12年台風14号		
項目	観測所	観測値
日降水量	名古屋	428 mm
	岐阜	204 mm
	多治見	272 mm
	豊田	217 mm

気象庁HP「気象統計情報」による

ii. 災害規模

名古屋市の新川が約 100m にわたり破堤したほか、庄内川や天白川でも越水するなど、

愛知県中心に被害が発生し、伊勢湾台風以来の浸水害となった。

表 5-10 災害概要

	愛知県	岐阜県	全国
死者(人)	7	1	10
負傷者(人)	107	1	115
家屋全壊(戸)	18	11	31
半壊(戸)	154	12	172
床上浸水(棟)	22,078	101	22,894
床下浸水(棟)	39,728	307	46,943

資料:愛知県『平成12年9月11日からの大雨による災害の記録』

岐阜県消防防災年報,防災白書

iii. 図幅内の災害発生

岐阜県多治見市では市街地西部、庄内川の両岸にあたる春日井市、名古屋市守山区、支流の内津川沿い、香流川沿川など、名古屋市の東側の丘陵地帯で多くの浸水災害が発生している。

⑤ 平成 20 年 8 月

i. 気象状況

8月26日から31日まで、低気圧及び前線の影響で、東海、関東、中国及び東北地方などで記録的な大雨となった。岡崎市では29日に観測史上1位を更新する1時間雨量146.5mmに達した。

表 5-11 主な気象値

平成20年8月末豪雨		
項目	観測所	観測値
日降水量 8月28日	名古屋	144 mm
	豊田	78 mm

気象庁HP「気象統計情報」による

ii. 災害規模

東海地方を中心に災害が発生し、河川は矢作川水系伊賀川等4水系4河川で計画高水位を超えた。土砂災害については14都県31市町村で54件発生した。

表 5-12 災害概要

	愛知県	岐阜県
死者(人)	2	
負傷者(人)	5	
家屋全壊(戸)	5	
半壊(戸)	3	3
床上浸水(棟)	2,477	60
床下浸水(棟)	14,108	336

資料:愛知県災害の記録、岐阜県消防防災年報

(岐阜県は8月28～29日と9月2～5日の合算)

iii. 図幅内の災害発生

名古屋市守山区、名東区、春日井市などに浸水被害を受けた箇所が点在している。

⑥ 土砂災害発生位置

本図幅の大部分は、丘陵地～小起伏山地であり、豪雨が発生すると小規模な土砂崩れが頻発する傾向にある。愛知県建設部砂防課、岐阜県林政部治山課が把握している土砂災害発生位置を災害履歴として示したが、全体的に点在する傾向にある。とくに瀬戸市市街地の背後の丘陵地など人工斜面と考えられる箇所に集中している傾向が見られる。

⑦ 昭和47年7月豪雨における土砂災害多発範囲

i. 気象状況

7月9～13日にかけて、本州南岸から四国、九州北部に梅雨前線が停滞した。日本の南海上にあった台風6、7、8号の影響で前線の活動が活発となり、中国地方、東海地方、神奈川県など広い範囲で災害が発生した。

表 5-13 主な観測値

昭和47年7月(七夕豪雨)		
項目	観測所	観測値
日降水量	名古屋	93.5 mm
	岐阜	97.0 mm
	恵那	170.5 mm
	土岐	119.0 mm

気象庁HP「災害をもたらした気象事例」及び岐阜地方气象台(1972)による

ii. 災害規模

この年の、6月下旬から7月前半にかけての、愛知県、岐阜県及び全国の災害概要を以下に示す。活発な梅雨前線の影響で、北海道から沖縄まで多くの都道府県で浸水、がけ崩れ等の豪雨災害が発生した。

6月には5回にわたり九州などに豪雨をもたらした。7月に入っても、前線に吹き込む湿舌は、4日に四国、6日に九州で豪雨をもたらして大きな被害を生じた。7～8日には東北地方北部から北海道にかけての地域で豪雨となった。12日には前線が南下し、中部・関東地方で集中豪雨となったが、特に愛知県三河地方から岐阜県東濃地方などでは局地的に合計500mmを超える降水量を記録した。

表 5-14 災害概要

	愛知県	岐阜県	全国
死者行方不明(人)	64	25	458
負傷者(人)	51	67	605
家屋全壊(戸)	68	49	1,319
半壊(戸)	86	37	1,410
床上浸水(棟)	1,701	438	51,547
床下浸水(棟)	7,556	1,948	176,777

防災白書による(全国6～7月にかけての豪雨被害)

iii. 図幅内の災害発生

七夕豪雨と呼ばれる12～13日のこの大雨は、愛知県では矢作川流域、岐阜県では東濃地方を中心として降雨があり、本図幅もかなりの被害があったと考えられる。本図幅の南に隣接する豊田図幅では、矢作川沿いに浸水箇所がある。また、矢作川上流の豊田市小原地区を中心として土砂災害が多発した。当該図幅でも広い範囲で、写真のように多くの斜面が崩壊した。同年10月に撮影された空中写真によって、崩壊が多発した範囲を示した。

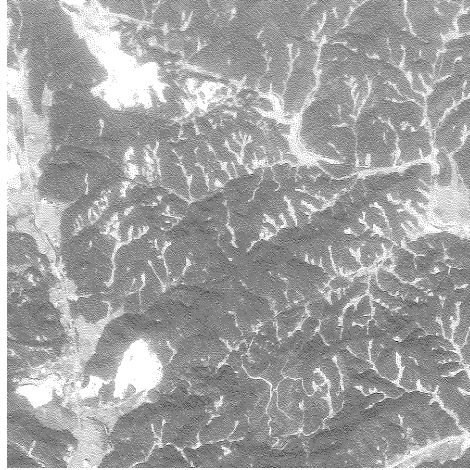


写真 5-1 昭和 47 年 7 月豪雨による土砂災害の爪あと

(豊田市木瀬町、上渡合町付近)

国土地理院撮影航空写真 CB-72-8Y C4-11(昭和 47 年 10 月撮影)

(承認番号 平 23 情使, 第 492 号)

6 調査成果図の見方・使い方

6.1 地形分類図

(1) 自然地形分類図

自然地形分類図は、既存の地形分類図等を参考に、空中写真、地形図等を利用して、宅地造成等により土地の人工改変が行われる前の自然地形を含め、地形の形態・形成時期・構成物質等により土地を分類した地図である（表 6-1）。

これまでの地形分類図では、現状の人工地形が優先して表示される場合があり、改変前の自然地形の詳細が把握できない等の問題を抱えていた。そのため、この調査で提供する自然地形分類図は、地形改変により不明瞭になった地形界線を明確に定めると同時に、かつて存在していた池沼や河川の状況、盛土される前の低地の地形等を分類・復元することで、現在は失われた過去の地形を読み取ることができるようにしている。土地をその成り立ちや、生い立ち、形態等により分類した地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的可能性を知ることができる。

表 6-1 自然地形分類区分

	分類	定義
山地	山地斜面等	山地・丘陵地の斜面や台地縁辺の斜面等をいう。海岸の磯や岩礁、離れ岩等を含む。
	麓斜面及び崖錐	斜面の下方に生じた岩層または風化土からなる堆積地形。
	土石流堆積地	岩塊、泥土等が水を含んで急速に移動、堆積して生じた地形で、溪床または谷の出口にあるもの。
台地	砂礫台地（更新世段丘）	更新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、表層が厚く、且つ未固結の砂礫層からなるもの。
	砂礫台地（完新世段丘）	完新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、形成時期が新しく、未固結の砂礫層からなるもの。
低地	緩扇状地	山麓部から氾濫原低地へと広がる、主として砂や礫からなる、傾斜の緩やかな扇状の堆積地域。
	扇状地	山麓部にあつて、主として砂や礫からなる、やや傾斜の急な扇状の堆積地域。
	谷底低地	山地、丘陵地、台地を刻む河川の堆積作用が及ぶ狭長な平坦地。
	氾濫原低地	扇状地と三角洲・海岸低地の中間に位置し、河川の堆積作用により形成された広く開けた平坦地で、自然堤防、旧河道または湿地を除く低地。
	自然堤防	河川により運搬されたシルト～中粒砂が、河道及び旧河道沿いに細長く堆積して形成された微高地。
	旧河道	過去の河川流路で、周囲の低地より低い帯状の凹地。
	湿地	自然堤防や、砂州等の後背に位置するため、河川の堆積作用が比較的及ばない沼沢性起源の低湿地。現況の湿地を含む。
	天井川及び天井川沿いの微高地	堤防設置によって周囲の地形面より高くなった河床及びこれに沿って形成された微高地。
	河原・河川敷	現況の河原及び河川敷（低水敷・高水敷）をいい、堤内地の旧河原・旧河川敷を含む。
水部	現水部	現況が海、または河川、水路、湖沼等の水部。干潟を含む。
	旧水部	過去の海または湖沼等で、現存しないもの。
副分類	崖	長く延びる一連の急傾斜の自然斜面。
	凹地・浅い谷	細流や地下水の働きによって台地または扇状地等の表面に形成された凹地や浅い谷。

(2) 人工地形分類図

人工地形分類図は、宅地造成等に伴って地形が改変されている範囲を最近の空中写真や地形図等を利用して抽出し、土地の改変状況によって「人工平坦地」や「盛土地」等に分類した地図である（表 6-2）。

昨今、特に都市地域では、市街地の拡大に伴って、従来の地形の多くが大きく改変されるとともに、開発から年月が経過し、最近は土地本来の自然の状況（自然地形）がわ

からなくなっている地域が各地で見られるようになっていく。

丘陵地等で住宅団地の開発のため、切り盛り造成等により宅地整備が行われた「人工平坦化地」の中には、現在ほとんど平坦な土地であっても、開発前には尾根や谷が入り組んだ起伏のある土地だったところがある。この調査では、そうした人工平坦化地内について、かつて谷があった場所を、開発前の状況がわかる地形図や空中写真から調査し、「旧谷線」として表示している。

また低地では、かつて水田等に利用されていた低湿地等に土を盛って造成した「盛土地」や、池沼等を埋め立てた「埋立地」等の人工地形を分類している。こうした情報を自然地形分類と組み合わせることで活用することにより、土地の安全性に関する情報を得ることができる。

表 6-2 人工地形分類区分

大分類	小分類	摘要
人工平坦地 (切り盛り造成地)	宅地等	山地・丘陵地や台地等の斜面を切土または盛土により造成した平坦地や緩傾斜地のうち、主として住宅や工業団地等の造成によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	農地等	上記のうち、主に農地整備、ゴルフ場造成等によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	旧谷線	人工平坦化地内の山地・丘陵地にかつて存在した谷線。
改変工事中の区域		人工的な地形改変が進行している区域及び採石・採土場、採鉱地等及びその跡地。
盛土地		低地等に0.5m以上盛土して造成された土地。台地上の凹地・浅い谷部分の盛土地を含む。
埋立地		水部等を埋め立てて造成された土地。
切土地		山地・丘陵地や台地等の斜面を人工的に切土して生じた平坦地及び急傾斜の人工斜面。

(3) 地形分類図から見た土地の安全性

自然地形分類図及び人工地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的な可能性を判断することができる。特に人工地形が分布する地域では自然地形分類を合わせて参照し、その土地の元々の地形条件を把握することにより、土地の安全性に関する詳細な情報を得ることができる。

例えば低地の盛土地は、谷底低地、氾濫原低地、旧河道といった、盛土施工前の地形を自然地形分類図から判断することにより、表 6-3 に示すような地震の揺れの大きさや液状化の可能性、洪水氾濫による浸水の可能性等を知ることができる。また、人工平坦化地では、施工後の切土地、盛土地の場所を人工地形分類図から判断することにより、現在の地盤や斜面の形成過程を知ることができ、地震や豪雨によって発生する可能性のある災害を、事前に予測することが可能となる。

表 6-3 地形分類と潜在的な自然災害の可能性

分類		地震に際して予想される災害	大雨・洪水に対して予想される災害	
自然 地形が 分布する 地域	山地	山地斜面	崖や急斜面の近くでは、斜面崩壊や落石の可能性はある。急斜面等では斜面崩壊の可能性があり、上流部の地質や崩壊の状況により、豪雨時には谷沿いや谷の出口付近で土石流発生の可能性はある。	
		麓斜面及び崖錐	背後に崖や急斜面がある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。谷沿いや谷の出口付近では、上流部に崖錐や麓斜面が多数存在する場合、豪雨時に土石流発生の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	
		土石流堆積地	傾斜のある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。豪雨時に土石流発生の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	
	台地	砂礫台地 (更新世段丘) (完新世段丘)	台地の縁辺部の斜面では崩壊や地すべりの可能性がある。通常は洪水時に浸水することはないが、凹地などでは浸水することがある。また、低地や近くの水路との間に十分な高さが無い台地では、洪水時に冠水することがある。逆に低地との間に高さがある台地では、縁辺部での斜面崩壊や地すべりの可能性がある。こうした地域では過去の浸水実績や土砂災害実績を知ることも有効である。	
	低地	緩扇状地	一般的に地盤は良好だが、末端部では液状化の可能性はある。豪雨時に砂礫の浸食・堆積の可能性はあるが、排水は良好である。上流部の状況により、洪水時には土石流発生の可能性はある。	
		扇状地	一般的に地盤は良好だが、末端部では液状化の可能性はある。豪雨時に砂礫の浸食・堆積の可能性はあるが、排水は良好である。上流部の状況により、洪水時には土石流発生の可能性はある。	
		谷底低地	低地の中でも堆積物の状況により地震の揺れが増幅される可能性がある。また、斜面の近くでは、斜面崩壊の危険性がある。洪水時に冠水することもあるが、概ね排水は速やかである。斜面の近くでは、斜面崩壊の可能性はある。	
		氾濫原低地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。河川洪水、内水氾濫の可能性はある。	
		自然堤防	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。異常な洪水時に浸水することがあるが、周囲の氾濫原低地と比べ高く、排水も速やかである。	
		旧河道	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性が特に高い地域である。明瞭な凹地では洪水の通り道となる場合があり、排水状況も悪いため、浸水時には長く湛水することがある。	
湿地		地震の揺れが増幅され、地盤変異の可能性はある。盛土の状況により違いはあるが、洪水時には排水がきわめて悪く、長時間湛水する可能性がある。		
天井川及び天井川沿いの微高地	地震の揺れで天井川の堤防が崩壊、決壊等した場合、周辺の低地部への流水の可能性はある。河川の増水による、周辺の低地部への流水の可能性はある。			
人工 地形が 分布する 地域	山地・台地等	人工平坦地 (宅地等)	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。	
		人工平坦地 (農地等)	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。	
		改変工事中の区域	採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。	
	低地	盛土地	谷底低地の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。十分な盛土の高さが無い土地では、洪水時に浸水することがあるが、概ね排水は速やかである。
			氾濫原低地の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
		旧河道、湿地等の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。高い盛土地では、さらに揺れが増幅される可能性がある。十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。	
		埋立地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく液状化の可能性が特に高い土地である。周囲の水面に比べ十分に盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫等により浸水する可能性がある。	
		切土地	切土斜面が半固結・未固結の場合、地震の揺れによる崩壊の可能性はある。切土斜面が半固結・未固結の急斜面の場合、斜面崩壊の可能性はある。	
	旧谷線	旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、地震の揺れが増幅され、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、異常降雨時には地盤が緩み、盛土部分が崩壊する可能性がある。		

6.2 土地利用分類図

土地利用分類図は、現在から概ね 120 年前（明治期）及び概ね 40 年前（昭和 40 年代）の 2 時期の旧版地図を判読し、地形図作成当時の土地利用を分類し、その分布状況を表示した地図である。

（第 1 期） 現在から概ね 120 年前の明治期の地形図には、当時の市街地や集落、森林・農地・河川等が詳細に描かれている。土地利用分類図では、それらを判読し、主要な土地利用ごとに色分けして表示している。

（第 2 期） わが国では、1960 年代後半から空中写真を利用した精度の高い地形図の整備が全国的に開始された。その時代の地形図から作成した土地利用分類図では、現在から概ね 40 年前の土地利用の状況を読み取ることができる。

なお、明治期、昭和期の 2 時期の土地利用分類図は、共通の凡例で分類している。そのため、現在の地形図を背景に 2 時期の土地利用分類図を見比べることにより、その都市の現在の市街地で、かつてどのような土地利用がなされていたかを知ることができる。

表 6-4 土地利用分類区分

分類	定義
田	水稲、い草などを栽培している田。季節により畑作物を栽培するものを含む。
沼田	泥が深く、ひざまでぬかるような田（この分類は明治期だけに適用）。
畑	麦・陸稲・野菜などを栽培する土地をいい、牧草地、芝地を含む。
果樹園	りんご・梨・桃・ブドウなどの果樹を栽培する土地。
樹木畑	桑、茶を栽培している土地。桐・はぜ・こうぞ・しゅろ等を栽培している畑を含む。
森林	高さ 2 m 以上の多年生植物の密生している地域。植林地においては樹高が 2 m 未満であっても森林とする。高さ 2 m 以下の竹、笹の密生している土地。
荒地・海浜等	自然の草地からなる土地及び露岩地、崩壊地、砂礫地などで植物に覆われていない土地。万年雪で覆われた土地を含む。
湿地	干上がった湖沼の跡などの排水の悪い土地で、雨期には水をたたえるところ。
建物用地	住宅や建物類の構築物、商業・業務・工業・公共・流通・通信・各種の処理施設等に利用されている土地。
交通施設用地	鉄道、道路、空港などに利用されている土地。
その他の用地	空地、公園緑地、墓地、採石地、採鉱地、自衛隊などの特別な用途に利用されている土地。
水部	河川、湖沼、ため池等の内水面および海面や干潟。

6.3 災害履歴図

災害履歴図は、国、地方公共団体、その他関係各機関等が調査した資料に基づき、地域に大きな影響を与えた災害の発生状況や、その被害の様子を示した地図で、災害の種類ごとに分けて作成している。この図では、比較的信頼性の高い情報のうち、最低でも縮尺 1/50,000（図上の 1cm が現地の 500m に相当）レベル以上の精度を持つ資料を選定して表示している。なお、地図には災害状況等の情報とともに、対象とした資料で扱った調査範囲を示している。引用する被害調査図等の資料が不十分なため、地図に掲載されていない災害があるほか、災害の種類や規模等の条件により、調査範囲外の地域でも被害が生じているような場合があり、この地図に全ての災害が表示されているわけではないことに留意する必要がある。

なお、災害履歴図の作成にあたり参照した資料の詳細や、被害の場所等を特定できない災害の状況等、その他参考になる事項を、この説明書に記述している。災害履歴図は、地形分類図や土地利用図等と見比べたり、さらに詳しい文献を調べたりすることで、そ

の土地の安全性について理解を深めることができる。

なお、災害発生後の堤防整備や下水道整備、地盤の改良等の防災対策が行われている場合などには、災害発生当時に比べて、現在は土地の安全性が向上している可能性があることにも留意する必要がある。

6.4 成果図面の使い方

本図幅内で今後も想定される自然災害被害としては、本調査の災害履歴等からみて、異常降雨時の浸水被害・土砂災害と、大規模地震発生時の建物倒壊、液状化、斜面崩壊等の地震災害の、大きく2つが考えられる。特に、本図幅内では人工改変の進んだ山地・丘陵地が多いことから、斜面崩壊や地すべり等土砂災害に留意することが必要である。これらの被害想定については、国や各自治体が作成している各種ハザードマップにより、現時点で災害が発生した場合の被害の規模について、ある程度予測することが可能である。

しかし、今後も地形改変をとまなう土地利用の変化が続くと仮定した場合、ハザードマップ等からでは、新たに地形改変が行われた場所でのどのような災害被害が発生するかを予測することは困難である。本図幅においては、地理的には名古屋市の通勤圏に含まれ、地形的には改変工事中や未改変の緩傾斜地がまだ多く残っており、これからも開発余地がある地域といえる。また、すでに人工改変が行われているような場所でも、建築物の更新や再開発等が行われることも考えられる。

そのような場合において、その土地本来の地形や過去の災害履歴から、自然災害に対する危険度が高い地域なのかどうかを事前に知っておくことは非常に重要であり、災害が発生した場合でも被害を最小限に留めるための対策を取ることが可能となる。

本成果図面の使い方としては、一例として以下のような利用方法が考えられる。

- ・現在、本図幅内の土地に住む住民、あるいはこれから住まいを構える住民に対し、その土地の地形特性からみた災害に対する危険性をあらかじめ認識いただき、住民自ら、災害が発生した場合を想定した避難行動や被害を最小限にするための安全対策を考える機会を提供する。
- ・各地域における自治会や自主防災組織等が、自分たちが住む地域の自然災害に対する危険性や過去の被害状況を把握することにより、より具体的な災害状況を想定した避難訓練の実施や、防災物資等の備蓄に役立てることができる。
- ・学校教育や生涯学習等の場を通して、自分たちの住む地域の自然地誌を学ぶとともに、災害と地形との因果関係や過去の災害履歴等から、災害から身を守るための防災教育での資料として活用する。
- ・低地部で新たな開発等を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、軟弱地盤の土地においては、計画場所の変更や軟弱地盤対策工法の選択等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地における過去の被害程度の把握ができることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。
- ・緩斜面で切り盛り造成等により人工改変を行う場合、地形分類より地盤強度が想定

できることから、麓斜面や崖錐などの落石や地すべり等土砂災害の危険性が高い場所では、計画場所の変更や砂防対策の施工等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地と似た地形条件の場所の土砂災害発生履歴が分かることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。

防災に関しては、これまでは行政の側から語られることが多かったが、近年の市町村合併による行政単位の拡大や、行政改革にともなう行政職員の減少や防災関連費用の削減等により、行政のみではきめ細やかな防災対策の実施が困難な状況となっている。

また、近年では集中豪雨などによる災害の局所化、都市部への人口集中などによる被害の甚大化が予測され、事前の防災対策の必要性・重要性がますます高まっている。

そのため、上記で述べたように、本成果図面を活用することにより、行政だけでなく、地域住民が主体となった防災・減災対策を立てるとともに、新たな土地利用を計画する際に、事前に自然災害に対する危険性を予測し、計画の変更や防災・減災対策の導入に役立てることが望まれる。

7 引用資料及び参考文献

7.1 引用資料

本調査成果図等の作成にあたっては、以下の資料、文献等を引用または参照した。

(1) 人工地形及び自然地形分類図

- ①「自然地形分類図」は、2万5千分の1土地条件図（国土地理院）を基本資料とし、以下の資料を引用または利用して編集した。編集にあたっては、空中写真の補足判読により一部修正を行った。

国土地理院（1973）：1:25000 土地条件図「豊田」。

愛知県（1983）：5万分の1土地分類基本調査（地形分類図）「岐阜・美濃加茂・瀬戸」。

岐阜県（1987）：5万分の1土地分類基本調査（地形分類図）「瀬戸・明智・根羽」。

判読に使用した空中写真は、

M525（昭22.9.30 米軍撮影）、M628-1（昭22.11.1 米軍撮影）、

M624（昭22.11.3 米軍撮影）、M1167（昭23.9.27 米軍撮影）、

M4-17-2（昭和27.4.17 米軍撮影）。

- ②「人工地形分類図」は、2万5千分の1地形図「多治見」（平成12年修正）「高蔵寺」（平成11年部分修正）「猿投山」（平成12年修正）「瀬戸」（平成17年更新）の読図及び空中写真（CCB-2004-1X, CCB-2000-1X, CB-2000-5Y, CB-95-4Y, いずれも国土地理院撮影）の補足判読により作成したもので、おおむね平成16年時点の地形の状況を反映している。

(2) 土地利用分類図

「土地利用分類図」は、現在から約100年前（1891年頃）及び約50年前（1970年頃）の2時期を対象に、それぞれの年代に測量された地形図を資料として、当時の土地利用の状況を、資料とした地形図から読み取れる情報の範囲内で分類し、その結果を5万分の1の縮尺精度に編集したものである。「土地利用分類図」の作成にあたっては、以下の地形図を利用した。

【第1期（明治期、1891年頃）】

5万分1地形図「瀬戸」明治24年測図（明治32.9.30発行）

（西端部のみ5万分1地形図「名古屋北部」明治22年測図（明治25.4.28発行））

【第2期（昭和期、1970年頃）】

5万分1地形図「瀬戸」昭和45年編集（昭和46.5.30発行）

なお、本図の背景に使用した地形図は、調査時点の最新図（平成9年修正）である。

(3) 災害履歴図

災害履歴図の作成にあたっては、以下の資料を引用した。

【水害】

①1957年8月水害

・浸水範囲を、『「週刊たちみ」昭和32年8月16日号』（多治見市広報）より転載

②1974年7月水害

浸水範囲を以下の資料より転載

- ・愛知県河川課発行『浸水実績図（矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域）』

③1976年9月水害

浸水範囲を以下の資料より転載

- ・愛知県河川課発行『浸水実績図（矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域）』

④2000年9月水害

浸水範囲を以下の資料より転載

- ・岐阜県河川課提供浸水範囲データ
- ・愛知県河川課発行『矢作川流域浸水実績図』
- ・愛知県河川課発行『浸水実績図（矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域）』

⑤2008年8・9月水害

浸水範囲を以下の資料より転載

- ・岐阜県河川課提供浸水範囲データ
- ・愛知県河川課発行『平成20年8月豪雨（矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域）』

【土砂災害】

①岐阜県

- ・岐阜県林務課が記録している災害位置図を転載した。記録は平成16年以降であるが、それ以前の記録も一部にある。

②愛知県

- ・2000（平成12）年9月降雨（台風14号：東海豪雨）前後の土砂災害発生箇所を、愛知県砂防課資料より転記した。

③その他

- ・昭和47年7月豪雨（七夕豪雨）による土砂災害の多発範囲について、国土地理院空中写真CB72-8Y C1～4から作図した。

【地震災害】

①1891年濃尾地震被害

- ・建物被害は、飯田汲事（1979）『明治24年10月28日濃尾地震の震害と震度分布』より転載。
- ・液状化被害は、多治見市史の情報より転載。

②1944年東南海地震被害

- ・建物被害は、飯田汲事（1977）『昭和19年12月7日東南海地震の震害と震度分布』より転載。

なお、各地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図、数値地図50000（地図画像）、数値地図25000（土地条件）及び基盤地図情報を使用した。（承認番号平23情使、第492号）

7.2 参考文献

本調査説明書の作成にあたっては、以下の資料、文献等を参考とした(50音順)。

論文・書籍・報告書など

- 愛知県(1983) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「岐阜・美濃加茂・瀬戸」。愛知県企画部土地
地利用調整課。
- 愛知県(1985) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「桑名・名古屋南部」。愛知県企画部土地利
用調整課。
- 愛知県(1986) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「津島・名古屋北部」。愛知県企画部土地利
用調整課。
- 愛知県総務部消防防災対策室(1999) 「平成10年度地震関係基礎調査交付金 猿投山断層帯に関する
調査成果報告書」。148 p.
- 飯田汲事(1979) 明治24年(1891年)10月28日濃尾地震の震害と震度分布。愛知県防災会議地震部
会, 304p.
- 大矢雅彦・杉浦成子(1979) 庄内川治水地形分類図(上流)。建設省中部地方建設局庄内川工事事務所。
岐阜県(1983) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「大垣」。
- 岐阜県(1985) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「岐阜」。
- 岐阜県(1987) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「瀬戸・明智・根羽」。
- 桑原 徹(1968) 濃尾盆地と傾動地塊運動。第四紀研究, 7(4), 235-247。
- 経済企画庁(1972) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「豊田」。経済企画庁。
- 経済企画庁(1974) 地形分類図。20万分の1土地分類調図「愛知県」, 経済企画庁。
- 国土交通省(2011) 1/50,000 土地分類基本調査(土地履歴調査成果)「岐阜」「名古屋北部」「名古屋
南部」「豊田」
- 国土庁(1975) 地形分類図。20万分の1土地分類調図「岐阜県」, 国土庁。
- 国土地理院5万分1地形図「瀬戸」明治24年測図(明治32.9.30発行)
- 国土地理院5万分1地形図「瀬戸」昭和45年編集(昭和46.5.30発行)
- 国土地理院5万分1地形図「名古屋北部」明治22年測図(明治25.4.28発行)
- 国土地理院(1973) 1/25,000 土地条件図「豊田」。
- 須貝俊彦・杉山雄一(1999) 深層ボーリング(GS-NB-1)と大深度地震探査に基づく濃尾傾動盆地の沈
降・傾動速度の総合評価。地質調査所速報, no. EQ/99/3, 77-87。
- 田力正好・安江健一・柳田 誠・古沢 明・田中義文・守田益宗・須貝俊彦(2011) 土岐川(庄内川)
流域の河成段丘と更新世中期以降の地形発達。地理学評論 Ser. A, 84, 2, 118-130。
- 春山成子・大矢雅彦(1986) 地形分類を基礎とした庄内川, 矢作川の河成平野の比較研究。地理学評論
Ser. A, 59, 10, 571-588。
- 町田 洋・松田時彦・海津正倫・小泉武栄編(2006) 日本の地形 5中部。385p。
- 森山昭雄(1983) 瀬戸市およびその周辺地域の陶土・珪砂採掘鉱山の人工地形。地理学評
論, 56, 4, 243-261。

ホームページなど

愛知県建設部砂防課ホームページ「あいちの砂防の歴史」

(<http://www.pref.aichi.jp/0000021309.html>)

国土情報検索サイト Kunijiban ホームページ

(<http://www.kunijiban.pwri.go.jp/jp/index.html>)

国土交通省土地総合情報ライブラリーホームページ「全国のニュータウンリスト(平成22年度作成)」

(<http://tochi.mlit.go.jp/>)

国土数値情報 人口集中地区データ

(<http://nlftp.mlit.go.jp/ksj/jpgis/datalist/KsjTplmt-A16.html>)

国土数値情報 土地利用細分メッシュデータ(平成18年度)

(<http://nlftp.mlit.go.jp/ksj/jpgis/datalist/KsjTplmt-L03-b.html>)

充填技術協会ホームページ「各地の空洞情報」(<http://www.juten-tc.com/index.html>)

多治見砂防国道事務所ホームページ「多治見砂防国道事務所の概要 庄内川砂防」

(http://www.cbr.mlit.go.jp/tajimi/senmon/sabou0202/shonai/sho_shisetu.html)

独立行政法人水資源機構愛知用水総合管理所ホームページ「愛知用水とは」

(<http://www.water.go.jp/chubu/aityosui/b%28jyouhou-main%29/01%28aitiyousui%29/01%28hajimari%29/b-01-01.html>)

資料

災害年表（地震災害）

災害年表（水害）

既存資料におけるボーリング資料

災害年表(地震災害)

西暦(和暦) (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	記事	
		北緯	東経		岐阜県	愛知県
715年7月5日 (霊亀1)	三河	34.8	134.4	6.5~7.0		正倉47破損。民家陥没。
745年6月5日 (天平17)	美濃	35.2	136.6	7.9	美濃で正倉、仏寺、民家の傾倒多し。	
762年6月9日 (天平宝字6)	美濃・飛騨・信濃			7.0以上	詳細不明なるも被害のあったことは疑いなし。	
1498年9月20日 (明応7)	東海道全般	34.0	138.0	8 1/4		東海道全般で強く揺れる、愛知県で震度6~7、紀伊~房総で津波、伊勢志摩で溺死1万
1586年1月18日 (天正13)	畿内・東海・東山・北陸諸道(天正地震)	36.0	136.9	7.8 (8.2とする文献もある)	白川谷で山崩れ、城、住家倒壊300棟余、圧死者多数。大垣で家屋倒壊多数。	(死者5,500以上。)
1605年2月3日 (慶長9)	(慶長地震)	A33.5 B33.0	138.5 134.9	7.9		(津波が犬吠埼から九州までの太平洋岸に襲撃し多くの被害が出た。)“双子地震”の可能性があったとされる。
1662年6月16日 (寛文2)	山城・大和・河内・和泉・摂津・丹後・若狭・近江・美濃・伊勢・駿河・三河・信濃	31.7	132.0	7 1/4~7.6	美濃で家屋被害多数。	
1707年10月28日 (宝永4)	(宝永地震)	33.2	135.9	8.6	美濃で家屋倒壊400棟。	渥美郡、吉田(現在の豊橋)で大被害。尾張領内の堤防被害、延長9,000m。三河・尾張で死者19人、負傷者4人、家屋全壊8,573棟。
1833年5月27日 (天保4)	美濃西部	35.5	136.6	6 1/4	大垣領で山崩れなどにより、死者11人、負傷者22人。	
1854年12月23日 (安政1)	(安政東海地震)	34.0	137.8	8.4	高須、大垣、加納、不破郡、土岐郡、恵那郡で家屋倒壊多数。	三河、知多、尾張の沿岸に被害。津波により被害。
1854年12月24日 (安政1)	(安政南海地震)	33.0	135.0	8.4	両日の地震の被害は、美濃南部でひどく、美濃北部へ行くほど軽かった。	(前日の安政東海地震による被害との区別がつかない。)
1891年10月28日 (明治24)	(濃尾地震)	35.6	136.6	8.0	美濃で被害大。死者4,990人、負傷者12,783人、住家全壊50,125棟、同全半壊4,451棟。飛騨、郡上、恵那郡ではほとんど被害なし。	三河・尾張で死者2,339、負傷者4,594、家屋全壊68,899棟。
1909年8月14日 (明治42)	(江濃地震、姉川地震とも呼ばれる。)	35.4	136.3	6.8	県西部を中心に被害。死者6人、負傷者141人、住家全壊6棟。	
1944年12月7日 (昭和19)	(東南海地震)	33.6	136.2	7.9	西南濃地方を中心に被害。死者・行方不明者16人、負傷者38人、住家全壊406棟。	小津波あり。名古屋臨港部などで液状化現象による被害。死者・行方不明者438、負傷者1,148、住家全壊
1945年1月13日 (昭和20)	(三河地震)	34.7	137.1	6.8		幡豆郡、碧海郡に甚大な被害。死者2,306、負傷者3,866、住家全壊7,221棟。
1946年12月21日 (昭和21)	(南海地震)	32.9	135.8	8.0	西南濃地方で被害。死者32人、負傷者46人、住家全壊340棟。	死者10、負傷者19、住家全壊75棟。

出典：地震調査研究推進本部 HP 地震動予測地図(愛知県・岐阜県版)を合わせ、対象範囲で被害が小さいものを除外した。

災害年表(風水害) 江戸時代以前

和暦	西暦			記事(岐阜県災害誌)	記事(愛知県災害誌)	
	年号	年	月			日
和銅	2	709	7		東海道・近畿地方(長雨)。	
和銅	6	713	11	27	三河・尾張では暴風のため、樹木が倒れ、農作物に被害があった。このため穀物は減収。	
和銅	7	714	11	2	美濃ほか5国大風、屋を発く。当年の租税を免ぜらる。	
神亀	3	726				この年尾張に洪水があって、ききんとなり、飢民2,242戸に達した。遠江の5都も水害によりききん。
神護景雲	3	769	9~10		木曾川通り美濃国各務郡鵜沼村より下流数派に分れて、葉栗、中島、海西3郡に流れ入り(3郡古へ尾張の国とす。天正年間3郡各其の半を割って美濃国に属す)数日の間、此等の郡の田、宅を浸損し、中島郡国府庁ならびに国分、僧尼の両寺共に下流の地に在りて困難すと云う。此の年9月尾張国から言上し、其の旧に復することを請い太政官之を許した。	(9月17日)木曾川の洪水により、葉栗・海部・中島3郡が水害をこうむった。 (10月15日)木曾川の洪水により、葉栗・海部・中島の3郡に水害をこうむり、家屋・水田を浸冠水した。また、国府・国分寺(2寺)が流失し、大きな被害があった。
宝亀	6	775	9	21	美濃、尾張、伊勢3国暴風雨で大洪水。木曾川通り氾濫し、3国沿河の地百姓300余、牛馬1,000余頭を漂流、国分寺並びに諸寺塔19が壊れた。	尾張・伊勢・美濃の3国が暴風雨により、大被害を受けた。木曾川氾濫のため、沿川の地では、死者300余人、牛馬1,000余頭、国分寺、諸寺院など19、その他家屋の被害は非常に多かった。
延暦	15	796	7~8			大雨・洪水があり、尾張では、ききんとなる。
嘉祥	3	850				尾張に被害があった。
仁寿	4	854	2~3			尾張の河川が氾濫した。この年、沿川の地では水難に苦しみ、ききんとなる。なお、この年ごろから、河川上流山地の植樹が完成期に入った。
貞観	8	866	5~6			尾張、長雨のためききんとなる。
長祿	2	1458	10	26		尾張・三河に暴風雨、洪水があったもようだが、詳細は不明。
寛正	6	1465	9	14		尾張・三河に暴風雨があったもよう。
文明	18	1486	9	10		東海道・近畿諸国暴風雨。
明応	1	1492	7	2		東海道・近畿諸国大雨・洪水。
永正	14	1517	8	10		諸国、暴風雨となる。
天文	1	1532	9	26		洪水により、矢作川の支流・青木川・伊賀川(岡崎)の堤防が破壊された。
天文	9	1540	9	21		尾張・三河、暴風雨。ところどころで大木が倒れ、高潮により豊川川口の前芝・元梅敷では大被害をこうむった。
天文	10	1541	9	11~12		尾張・三河、暴風雨・洪水。
天文	13	1544	7	28	長良川洪水。岐阜中川原を押し抜き流れ、市神榎が流亡した。	三河・尾張は、暴風雨・洪水となったが、特に三河では、人や家屋の被害が甚大であった。尾張でも木曾川の氾濫により、起町等に水害があった。
弘治	2	1556	10	4		小田井川(庄内川支流)が氾濫し、沿川の地域が浸水した。
元亀	1	1570	9	30		三河・遠江で特に家屋や農作物の被害が大きかった。尾張でも知多郡では、家屋の被害があった。
元亀	2	1571	9	19		東海道・近畿諸国、暴風雨。
天正	2	1574	8	28		尾張、暴風雨。
天正	6	1578	6	17	大雨洪水。被害は詳らかでない。	
天正	14	1586	8	9	木曾川大洪水。各務郡前渡村以西流路を変じた。現木曾川を生じ、流亡した村落多い。この時駒塚、加賀野井両村の間に逆川を分派した。下流高須輪中では水嵩2文程、輪中堤残らず水中に没し、堤の切れた所108ヶ所の多きに上った。この時、牧田川も大出水、沿村各地を害す。(註)この洪水後の木曾川筋を以って濃尾両国の境とした。	木曾川が、大洪水となり、尾張・美濃両国の沿川地域は大被害をこうむった。美濃国各務郡前渡村と尾張国葉栗郡草井村(現江南市内)の間から西で、河道が現在のように変わった。尾張・葉栗・中島両郡では激流が村里をつらぬいて、人や家を流し、新しい河道ができ、富田庄・三谷郷等は新河道となった。
文祿	4	1595	6	16		尾張・美濃、洪水。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
慶長	1	1596	6	4	尾張、美濃国洪水。	
慶長	1	1596	9	26		東海道・近畿諸国、暴風雨。
慶長	9	1604	8	28		東海道・四国諸国、暴風雨。
慶長	9	1604	9	7	美濃、伊勢、尾張、近畿、東海道諸国大風。	尾張・美濃・伊勢・近江、暴風雨。
慶長	9	1604	9	28	美濃、伊勢、尾張諸国大風。	尾張・伊勢・美濃、暴風雨。
慶長	10	1605	9	3	呂久川堤、東西2ヶ所宛切れ、又大垣の下でも切れて、大垣、高須両輪中入水した。	尾張・三河・美濃・伊勢・近江では、被害があったが、木曾川はあまり出水しなかった。
慶長	11	1606	6	30		東海道・関東諸国、暴風雨。三河では、とろどころで堤防が決壊したが、尾張・美濃では大して被害はなかった。
慶長	12	1607	10	4~5	美濃大水。木曾川通り羽栗郡米野村の堤400間程切れ入水。また、河渡川（長良川）でも破堤し、家屋が流失した。	三河・尾張、（東海道諸国）、暴風雨・洪水。14日暴風雨、15日洪水。矢作川では、とろどころで堤防が決壊し、橋が落ちた。
慶長	13	1608	6	3	美濃、尾張大水。	尾張・美濃、暴風雨・洪水。（東海道諸国、暴風雨・洪水）。
慶長	14	1609	9	7~8	大風。美濃、尾張、三川は8日午刻より亥刻まで吹く。	尾張・三河・美濃、暴風雨。
慶長	14	1609	9	14	木曾川大洪水。前年8月の水より3尺ほど高し。	三河に大雨があり、矢作川堤防が拳母村（現豊田市内）内で決壊した。
慶長	15	1610	6	23	木曾川洪水。名古屋へ運送する材木が残らず押し流された。	6月23日・27日・7月8日、木曾川が洪水。8月16日、三河に洪水。西三河（矢作川）では、慶長14年8月の出水よりも水位が約90cm低かった。
慶長	17	1612	7	20	大風。美濃、伊勢、尾張3ヶ国強く吹く。	近畿・東海道・奥羽諸国、暴風雨。朝、東風が強く、正午から16時ごろにかけて、暴風雨となった。特に伊勢・尾張・美濃で強く、伊勢湾では破船2・30隻、熊野灘で破船7・80隻の海難があった。津島には、立田村の堤防が破壊して、川水が浸入した。
慶長	17	1612	8	19		尾張・三河・近江・美濃に洪水があった。
慶長	17	1612	9	26	大風雨。美濃大水。5,000人死ぬ。近江、伊勢、美濃尾張は風強し。	近畿・東海道諸国、暴風雨。未明から午後にかけて、近江・伊勢・美濃・尾張では風が強く、西の吹き返しの風がとくに強かった。尾張では住家に被害があった。
慶長	19	1614	6	4		近畿・東海道、大雨・洪水。5月30日から6月4日にかけて大雨が降り、4日夜には洪水となった。尾張・海東部・勝幡では堤防が切れ、田畑に被害があった。
慶長	19	1614	6	19	天文13年以来の大水。先月末の大水で切れた諸国の堤、復旧前のこととて、又ぞろ切れ入り、和泉、河内、摂津、江州、美州、尾州の6ヶ国が取り分け被害多し。	近畿・東海道諸国、大雨・洪水。18日に大雨が降り、19日には大洪水となった。尾張・美濃・近江・摂津・河内・和泉の6か国では、4月の水害に加えて被害が大きかった。
慶長	19	1614	7	9	杭瀬川筋安八郡曾根堤切れ、夜半大垣へ入水、酒巴下皆水になる。	近畿・東海道諸国、長雨・洪水。摂津・河内・美濃では被害が大きかった。
慶長	19	1614	10	1		近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。遠江・三河では風は強くなかった。名古屋城本丸天守の北東の石垣約140mがくずれた。
寛永	1	1624	8	12		庄内川・矢作川が氾濫した。庄内川右岸の東春日井郡上條村（現春日井市）地内で破堤した。
寛永	3	1626	5	8		庄内川が氾濫し、生棚（現名古屋市区内）では、数haの農地に土砂が流入した。
寛永	3	1626	9			庄内川が、東春日井郡上條村（現春日井市）地内で氾濫した。
寛永	4	1627	9	15	長良川洪水。被害景況詳らかならず。	東海道・関東、大雨・洪水。
寛永	9	1632	10	1		16日間降り続いた大雨のため、庄内川が特に大増水し、枇杷島橋が流失した。本川では、成願寺・福徳（現名古屋市区）右岸の味鏡・大野木堤が決壊し、支川の五条川・合瀬川では、六ツ師・熊之庄（現北名古屋市）で破堤。このため、小田井・比良・平田（現名古屋市）、沖・九之坪（現西春村）の諸村をはじめ、尾張20か村が水害をこうむった。
寛永	11	1634	7			尾張とその近国では、長雨・洪水。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
寛永	13	1636	9	12		尾張・三河・京都・近江、暴風雨・洪水。伊勢湾・三河湾に高潮がおこった。高潮により、熱田の海岸堤防が決壊して、新田に被害があり、道路は交通途絶した。名古屋城にも被害があった。三河吉田（現豊橋市）の船町の住家の大半が流失し、死者が出た。
寛永	14	1637	9	25		東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。
正保	2	1645			揖斐川洪水。新たに中須川を生じた。	矢作川が出水し、拳母村（現豊田市）内で破堤した。
正保	3	1646	9	14		矢作川が出水氾濫した。矢作川は数日來の雨で増水し、14日午後には水勢がにわかに加わり、夕方、碧海郡六ツ美村上青野（現岡崎市）西の堤防約4・50mが決壊して、氾濫した。寺院・民家約20軒が流失し、死者14・5人、田畑は不毛の地となった。
慶安	3	1650	9	26~27	未曾有の洪水と云はれ、濃州の低地は悉く水底に埋没し、岐阜、養老の間干上りたる所なく、舟で往来することが出来たと云う。木曾川通り羽栗郡江川、中島郡加賀野并其の他で破堤、長良川堤平越しとなり、安八郡にて破堤す。揖斐川は大野郡房島、安八郡大島、発、津、佐渡等にて堤防破壊。大垣輪中堤防47~48里の中、過半決壊、大垣城内に入水し、市街は悉く浸水、町家の庭にて水深8尺余。大垣領内のみにて死者1,453人（その他村々死者1,553人計3,006人）牛馬合せて710頭死し、流家、壊家、3,502戸あり。この他、大垣領内外の橋悉く流失、材木45,000本、竹材30,000束、舟数10隻流失など被害甚し。藪川では、大野郡稲富上秋にて堤防破れ、稲富にて高520石の地押流される。牧田川通り上石津郡牧田堤数ヶ所破壊、耕地を害す。俗に「ヤロカの大水」又は「枝広の大水」と云う。	九州・近畿・東海道諸国、大雨・洪水。木曾・長良・揖斐の三川が大出水し各所で破堤した。特に美濃の沿川地方では大被害をこうむった。これを<大寅の洪水>とよぶ。尾張では、木曾川堤防が加賀野井（現一宮市）で決壊した。また、佐屋川堤防が決壊して、海東・海西部へ流入し、尾西地方一帯の住家・田畑に大被害があり、多数の人・馬が死んだ。（尾張領の田畑被害20万石）この洪水以降、尾張の御田堤はますます強固にされた。このほか、三河でも出水があった。
慶安	4	1651	9~10	18	木曾川洪水。中島郡八神村にて80間、石田村70間、城屋敷村65間、一色村55間、長間村70間の堤塘が破壊。	（9月18日）尾張・三河、暴風雨・洪水。尾張・海東・海西部では大出水により、家屋が流失し、多くの人・馬が死んだ。破堤箇所は、佐屋川らしい。
承応	2	1653	6	30		東海道、暴風雨。30日夜半から翌朝にかけて、暴風雨となった。名古屋城・犬山城に被害があり、尾張領内の民家の被害は、22,000軒におよび、人・馬の死ぬもの多数だったという。
承応	2	1653	9	27		中国・東海道諸国、暴風雨・洪水。
明暦	1	1655	9	9		東海道諸国（三河から関東南部）、暴風雨・洪水。矢作川が拳母村（現豊田市）内で破堤した。
明暦	2	1656	4	16	可児川出水。120間破堤。また多芸郡津屋川出水、河道を変ず。	
万治	1	1658	8	15	美濃国大風、洪水。	
万治	1	1658	8	31		近畿・東海道諸国、暴風雨・洪水。おもに近畿地方に風水害。尾張・三河での被害については不明。
万治	3	1660	6~7			尾張・美濃、雷雨・洪水。諸国、長雨・洪水。連日、大雷雨があり、尾張・美濃では水害や落雷による被害が多かった。7月21日には、雷雨がはげしく、住家・田畑の浸水、破堤などの水害があり、名古屋城では、落雷による被害を受けた。尾張では、21日以後も連日のように強雨によって水害がおこった。
万治	3	1660	7~8		木曾川通り羽栗郡沿河の村々破堤、家屋の流失多く、また揖斐川も洪水にて大垣輪中入出し、大垣城内へも押し入った。	（8月12日）諸国、暴風雨・洪水。名古屋では、12日明方から暴風雨となり、住家の風による被害が大きかった。（屋根をはがされた）名古屋から江戸へ向かう途中の大船8隻が破船。尾張以東では風雨が強く、水害を受けた。また、美濃大垣付近でも水害を受けた。
万治	3	1660	9	24		近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
万治	3	1660	10	24		四国・近畿・東海道・関東諸国、暴風雨。名古屋では、城内および城下に建物、住家の被害があり、堀川には海水が逆流して、白鳥の材木が多く流された。尾張全般の家屋・田畑に風水害をこうむった。
寛文	4	1664	11			三河、大雨・洪水。矢作川の堤防が挙母村（現豊田市）で破堤した。
寛文	6	1666	7	16-17 28-29		尾張・美濃、大雨・洪水。各河川が出水したが、特に庄内川は大出水した。尾張各所の田畑が水害を受けた。
延宝	2	1674	9	15		九州・四国・中部・関東諸国、暴風雨・洪水。木曾川の洪水で美濃・尾張の沿川地方は大水害となった。人よんで<小寅の洪水>という。庄内川右岸破堤。（被害については不詳）。
延宝	4	1676	8	13~14	大風雨、洪水。木曾川通り中島郡八神村堤切れ、また可児川沿河の地堤 150 間破る。	近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。尾張藩領内で農地浸水、田（442,634 石相当）、畑（約 2,023ha）、家屋流失 2,417 戸、死者 18 人、水死した馬 30 頭の風水害をこうむった。のちききんとなる。
延宝	6	1678	9	19	濃尾両国大雨、洪水。	九州・四国・東海道諸国、暴風雨・洪水。尾張・美濃、水害。尾張藩領内では、田畑（85,600 石余相当）、堤防約 4,600m、家屋 68 戸に被害があり、3 人と馬 3 頭が水死した。
延宝	7	1679	8	6, 21		中国・中部諸国、暴風雨・洪水。
天和	1	1681	8	3~4	美濃国大風雨。3 日晩景に及んで風雨烈しく、夜に入って大風、大雨あり。丑の刻になって風雨漸く止む。大垣市街の崩家、士族家敷 209 軒、町家 104 軒、大垣領内では 3,000 余軒、死者 11 名、馬 2 頭、城の内外破損甚しく。その数を知らず。	
天和	1	1681	9	2	揖斐川通り大野郡三輪村堤防 40 間破壊す。（註）日本気象史料によれば、この日伊勢、尾張、暴風雨とあり。	伊勢・尾張・北陸諸国、暴風雨・洪水。尾張では夕方から夜半（16 時ごろから 02 時ごろ）にかけて、暴風雨がはげしく、屋根を飛ばされるなど、家屋の被害があった。このあと、18 日の暴風雨とあわせて、この年、田畑の被害が大きかった。（ききんとなる）。
天和	1	1681	9	18, 25	揖斐川通り大野郡上野村堤防 50 間破壊す。	18 日尾張・江戸等、25 日伊勢・尾張諸国、暴風雨。尾張では、8 月とこの 2 回の暴風雨が田畑の農作物へ与えた被害は大きく、ききんとなった。
貞亨	1	1684	3~4		可児川洪水。可児郡内にて堤 200 間破壊。	
貞亨	3	1686	3	17		尾張では、夕方雷雨がはげしく、名古屋城下で落雷により家屋 1 軒が焼失した。
貞亨	3	1686	8	28		尾張、雷雨。名古屋城下に落雷があり、建中寺に被害があった。
貞亨	4	1687	10	1~2	木曾川洪水。加茂郡取組村に於て、激流のため民家 23 戸流失、耕地の流亡多し。	庄内川が出水し、支川の矢田川で 1 人水死した。
貞亨	4	1687	10	14		四国・近畿・北陸・東海道関東諸国、暴風雨・洪水。
元禄	2	1689	5~6		可児川出水。可児郡にて堤防 50 間破壊。	
元禄	7	1694	9	6		紀伊・尾張、暴風雨。
元禄	10	1697	7	27		尾張に雷雨があり、落雷により、名古屋城下で家屋 2 軒焼失。
元禄	10	1697	8	26		尾張に雷雨があり、落雷により、家屋 2 軒焼失、1 軒破損した。
元禄	11	1698	12	28		尾張・三河、大雨・洪水。
元禄	13	1700	4	14		尾張に雷雨があり、名古屋城下で落雷により、家屋 1 軒焼けた。
元禄	14	1701	6	21~22		名古屋城下から熱田にかけて、突風・降ひょう（梅の実大）を伴ない、各所に落雷があり、熱田では突風により、家屋や樹木の被害もあった。22 日夜には庄内川が出水し、田畑に被害があったが大事にはいतरらなかった。
元禄	14	1701	8	2		尾張、暴風雨。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
元禄	14	1701	9	11~14		連日の降雨で、尾張・美濃の諸川は出水氾濫し、堤防破損53か所におよんだ。庄内川水系では、五条川合流点（五条川は改修の結果、新川に合流するようになったが、天明以前は庄内川に合流）の杵（いり）、法界門（新川・甚目寺境）の堤防右岸が破堤し、甚目寺はじめ海部郡一帯が浸水した。この時勝川堤も破壊した。14日、名古屋では、屋前（09~12時ごろ）、屋過ぎ（15時ごろ）ごろと夜（19時ごろ）に雷を伴って雨が強く、天白川の堤防が鳴海の方へ決壊した。
元禄	14	1701	9	19~20	9月14日大雨。19日より20日迄風雨激しく19日より大水出る。木曾川通り加茂郡取組村家屋の流失23戸、下流羽栗郡、中島郡所々破堤。また揖斐川通り揖斐郡小島村溝尻より野中まで400間破堤、下流安八郡大島村堤切れ、大垣町に入水。この洪水で大垣領229ヶ村入水、堤防切れ173ヶ所、3,878間、流れ家、壊家合せて753戸、死者3人あり。この他藪川通り大野郡浅木村で耕地川欠けあり。また、逆川沿い羽島郡島村、牧田川、津屋川、金草川沿の地破堤せり。	四国・近畿・東海道・関東・奥羽諸国、暴風雨・洪水。名古屋では、13日明方から風雨が強く、特に9時ごろから屋過ぎまで大雨となった。このため、各所で浸水し、田畑の被害も甚だしかった。また、矢田川堤防が稲生で切れた。（庄内川・矢田川合流点の矢田川左岸、現名古屋市）。三河では大水害となり、岡崎では、矢作川堤防約900mが切れ、田畑（2万石相当）に氾濫した。流失家屋32軒、倒壊家屋52軒、小橋3か所が落ちた。
元禄	14	1701	10	1		尾張、暴風雨。
元禄	15	1702	8	21		四国・中国・尾張、暴風雨。
元禄	15	1702	11	20		名古屋付近に朝から屋過ぎにかけて（08時すぎ~12時すぎ）大雨が降り、名古屋の東郊は水害をこうむった。天白川堤防が破堤して、鳴海等へ氾濫した。
宝永	1	1704	7	19		三河・尾張・遠江、大雨・洪水。東春日井郡和爾良村字御油東（現春日井市内）で庄内川右岸堤防が約180m破堤した。
宝永	2	1705				三河・尾張・遠江、暴風雨・洪水。岡崎藩領内では、矢作川堤防約1,800m、田（32,540石相当）、家屋倒壊270戸、流失家屋92戸、溺死者13人の被害があった。
宝永	3	1706	9			三河・尾張、大雨・洪水。東春日井郡和爾良村字御油東（現春日井市）で庄内川右岸堤防が約90m破堤した。
宝永	4	1707	9	14~15	飛驒大風あり。稲作に被害多し。本巣郡大風、家屋倒壊多し。20日再度大風。	尾張、暴風雨。明け方から夕方まで南東の風が強かった。（午後、最も強かった）
宝永	4	1707	10	6		尾張・四国・中国諸国、暴風雨・洪水。尾張では家屋の被害などがあつたもよう。
宝永	5	1708	8	17		近畿・東海道諸国、暴風雨・高潮・洪水・竜巻。こののちききんとなる。三河湾・伊勢湾に高潮があつたもよう。尾張・半田では新田の堤防が決壊した。
正徳	2	1712	9	18		近畿諸国・尾張・三河、暴風雨・洪水。尾張・三河では、家屋の倒壊が多かつたもよう。
正徳	2	1712	10			尾張・三河、暴風雨・洪水。家屋の倒壊が多かつたもよう。
正徳	3	1713	7	27~29		尾張、暴風雨・洪水。27日夜半、大山城の天守閣が落ちた。家屋被害12,000戸。28、29日尾張西部から浸水し、家屋・人馬の被害が大きかった。
正徳	4	1714	9	16	暴風雨のため、美濃の諸川氾濫して流水700,000本に及び、神戸、鳥ヶ池、甚兵衛、伝馬等の新田、堤防破壊して水害を蒙る。	近畿・東海道・奥羽諸国、暴風雨・高潮・洪水・ききん。名古屋では午後（16時ごろ）から夜半にかけて暴風雨となる。庄内川が大出水し、味鏡堤（現名古屋市）が破堤して、氾濫した。伊勢湾沿岸に高潮がおこり海西郡愛知郡の新田（神戸・鳥ヶ池・甚兵衛・伝馬・大宝等）堤防を破堤した。尾張・三河とも家屋の倒壊、流失、死者、田畑の被害は甚大で、天和以来の暴風雨といわれる。こののち稲はみのらず、ききんとなる。
正徳	5	1715	6	18	津屋川大水。多芸郡駒野新田にて破堤。また、諸川出水、高須輪中の被害多し。	尾張、暴風雨・洪水。庄内川・矢田川が出水して、氾濫した。佐屋川（木曾川派川、のちに廢川）堤防が津島町付近で破堤した。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
正徳	5	1715	7/30~8/2			尾張に雷雨があり、落雷により、死者が出た。また、愛知郡中津村では住家が焼失した。
享保	2	1717	9	19	大風雨。辰刻より午刻迄辰巳大風にて、町々屋根を吹き破り、所々小屋掛け吹きつぶし、午未の刻、未申に風替り是又大風にて所々破損。	東海道・関東・奥羽諸国、暴風雨・高潮。名古屋では、前夜から雨が降っていたが、朝（08時ごろ）から正午ごろまで南東の風雨が強く、屋根をふき破り、小屋をふき飛ばした。屋すぎ（13時ごろ）風向は南西にかわって、また強く被害が出た。尾張・三河ともに家屋・田畑等に風水害があったもよう。
享保	3	1718	10	5		東海道諸国、暴風雨・高潮。尾張・三河は暴風雨となり、渥美湾に高潮がおきた。
享保	6	1721	9	6~7	大雨。揖斐川通り安八郡前田村堤切れ、大垣町に入水、田畑其の他の損亡多し。	東海道諸国、暴風雨・洪水。尾張・三河は暴風雨になり、寛文以来の大洪水といわれ、庄内川が大出水して氾濫した。尾張藩領内の被害は田畑の損害高162,000石相当、堤防などの破損約4,000m、蛇籠（じゃかご）の破損流失約25,000m。家屋流失74軒、同倒壊659軒、秋（いり）の損失41か所。
享保	7	1722	9	24~25	大風雨。	近畿・東海道諸国、暴風雨・洪水・高潮。尾張・三河の風水害は激甚で正徳4年9月以来の暴風雨といわれた。24日は朝から雨が降り続き、夜半（24時）ごろから南東の暴風雨となり、翌朝（06時ごろ）おさまったが、風が強くこれによる家屋の被害も大きかった。三河吉田（現豊橋市）から東では風はそれほど強くはなかったようである。伊勢湾・渥美湾の沿岸は高い高潮の来襲にあい、各新田をはじめ内陸部まで大打撃を受けた。また矢作川をはじめ、各河川が出水して、氾濫し、その水害を受けた。
享保	16	1731	9	10		矢作川堤防が、拳母村内（現豊田市）で破堤した。そのほかにも水害があったもよう（碧海郡木戸村（現安城市）に水害による木綿減収検見引の免状がある）。
享保	20	1735	8	9		近畿諸国・三河、暴風雨・洪水。矢作川が出水して、小川・木戸村（現安城市）などで水害があった。
元文	1	1736	9	21		近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。（三河）17日、16時ごろから夜半（24時ごろ）まで、北風の暴風雨となり、矢作川が大出水した。
元文	4	1739	10	2~3		尾張、大雨・洪水。の大雨により、庄内川堤防が萬場南の左岸で破堤し、名古屋市西部一帯の稲葉地、中村以南がドロ海となった。また、山崎川の堤防も破堤した。（名古屋では、3日は夕方から22時ごろまで雷雨）。矢作川下流右岸の伏見屋新田で破堤した。
元文	5	1740	8	22	甚雨洪水。美濃領内流亡数ヶ所あり。	
元文	5	1740	9	6		矢作川・豊川その他の小河川が出水して、氾濫し、三河一帯に水害をこうむった。矢作川堤防が拳母村（現豊田市）で破堤した。
元文	5	1740	9	14		尾張・三河、暴風雨。夜20時ごろから風が強くなり、夜半（24時ごろ）にはさらに強く、翌日夜明けまで吹いた。家屋の倒壊、大木の倒れたものも多く、農作物の被害は大きかった。三河横須賀では住家の倒壊145戸、付属家、土蔵、へい、社寺等の被害が多数あった。
寛保	2	1742	8	28		近畿・関東・東海・北陸諸国、暴風雨・洪水。矢作川が出水して、氾濫したもよう。
寛延	1	1748	10	9		三河、大雨・洪水。夜、矢作川が出水して、三河・額田郡能見村（現岡崎市）で堤防約50mが切れた。他にも矢作川流域で水害があったもよう。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
寛延	3	1750	5	18		尾張・三河、大雨・洪水。庄内川が大出水して、生棚（現名古屋北区楠町内）で堤防が切れ、土砂が数haの農地に流入した。また、八田川（庄内川支川）の堤防も一部破堤して、味鏡・如意（現名古屋北区楠町）は浸水した。矢作川下流の伏見屋新田（現碧南市）も浸水した。
宝暦	1	1751	7	19		尾張・東春日井郡小牧村（現小牧市）から、北東の17か村に大雨が降って、山地から土石の流出が甚だしく、田畑を荒廃した。
宝暦	2	1752	6	13		矢作川右岸の中嶋・北野（現岡崎市）の堤防が破堤し、被害甚大であった。
宝暦	4	1754	9	9		矢作川の堤防が拳母村（現豊田市）内で破堤し、下流でも氾濫があったもよう。
宝暦	6	1756	10	24~25		矢作川が出水し、岡崎の伊賀川堤防が、伊賀八幡宮の前で破堤した。
宝暦	7	1757	5~6			東海道・関東・奥羽諸国、長雨・大雨・洪水・ききん。尾張・三河では、この年、2月中ごろから、雨がしばしば降り麦作は不作となる。4月中ごろからは、ことに雨天が多く（旧暦）4月27日から、5月5日ごろまでは、連日降り続き、なかでも5月2、3、4日は大雨が降って、3日・4日は大洪水となり、全般的に大水害をこうむった。＜宝暦の洪水＞
宝暦	7	1757	6	17	木曾川通り恵那郡沿河の地及び阿木川暴漲。長良川通り本巣郡生津村宇大川端にて川欠け、海西郡岡村堤防破壊す。羽栗郡西小熊村杵樋吹き破れ、足近輪中一円入水。境川沿い厚見郡高桑村堤塘破壊。牧田川沿い多芸郡五日市村、津屋川沿い下石津郡徳田新田、堤切り入り等、堤防破損78ヶ所1,950間に上った。	
宝暦	7	1757	7	15	美濃大雨。洪水被害多し。	
宝暦	7	1757	7	30~31		30日大雨が降り、31日出水して、矢作川の堤防が決壊した。死者が多数出た。
宝暦	8	1758	6/30~8/14			三河、長雨・洪水・ききん。連日雨が降り続き各地に水害が発生した。前年の水害に続いて夏作は凶作となる。矢作川の川端堤が決壊し、国江村（現豊田市）などの田畑が埋没した。
宝暦	8	1758	9	28~29		尾張、大雨・洪水。庄内川水系で堤防の切れた所があった。
宝暦	11	1761	5	20		三河、大雨・洪水。矢作川の堤防が拳母村（現豊田市）内で破堤した。
宝暦	13	1763	10	8~9		尾張・三河、暴風雨。8日夜半から9日未明にかけて暴風雨となる。
明和	2	1765	6	3~4	木曾川通り加茂郡取組村入水、同郡飛騨川沿い西栃井村沿河の耕地巨害を蒙る。	山城・尾張・三河・江戸、大雨・洪水。連日の雨で、4日庄内川が出水し、味鏡（現名古屋北区楠町）付近で右岸堤防が決壊して氾濫し、西春日井郡如意・豊場から丹羽郡岩倉・五条川端にいたる尾張30余か村が水害をこうむった。三河では4日矢作川の拳母堤防が決壊した。
明和	2	1765	8	21		三河、大雨・洪水。矢作川堤防が拳母村内で破堤した。
明和	2	1765	9	16~17 21~22	長良川通り方県郡長良村水量10合、同所にて破堤。また、羽栗郡西小熊村杵樋吹き破れ、安八郡大森村堤塘66間、境川沿い厚見郡高桑村56間破壊。揖斐川沿い安八郡神戸村堤40間破れ、耕地36町歩を害す。犀川（長良川支川）沿い本巣郡十七条村の堤もまた破る。凶荒誌には美濃大水人多く死すとある。	四国・近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。尾張では連日の大雨で17日、庄内川が氾濫して、名古屋・熱田は一面に浸水し、東は奥田町から浜街道、西は佐屋街道から津島にいたる一帯が水害をこうむった。矢作川も拳母（現豊田市）で氾濫し、家屋80軒が流失、人が多く死んだ。
明和	3	1766	8	18		三河、大雨・洪水。矢作川右岸の渡刈堤防（現豊田市）が決壊して、家屋6戸が流失した。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
明和	4	1767	8	4~6		尾張・三河、大雨・洪水・山津波。4日から6日にかけて大雨があり、6日夜、庄内川は右岸の比良・大野木（現名古屋市）、土器野松原（現新川町）などで破堤して、氾濫し、味鏡・如意など一帯がドロ海となる（宝暦の洪水と同様）。矢田川は猪子石で破堤し、名古屋の中下門前まで氾濫。名古屋の北東部から西部にかけて低地全部が浸水。（長母寺北で山くずれ）。名古屋城西の道路上で水深1.5m余になり、数日間船で往来したという。このため、のち大幸川の開さく工事が行われた。名古屋南部は天白川の氾濫で、鳴海あたりまで浸水し、鳴海付近では、家屋の水害が大きかった。東海道上の水深は約1.8m。藩は舟を出して救助に努め、小屋を建てて、被災民の救済にあたった。この他、中島郡奥村などで木曾川の水が尾張側へ浸水したようである。同日、瀬戸の赤津や猿投山に山津波があった。矢作川では、渡村・下矢作片町・大門・日名・青木・細川・仁木入江・阿波寺等で破堤し、拳母・岡崎付近に浸水したほか、田畑の損害、人畜の死傷も多かった。また下流の伏見屋・平七新田（現碧南市）でも氾濫した。＜明和の洪水＞
明和	4	1767	8~9			矢作川堤防が、拳母村（現豊田市）内で破堤した。
明和	5	1768	6~7		武儀川筋武儀郡岩佐村、宇多院村、高野村其の他所々で破堤。境川筋厚見郡高桑村、犀川沿い本巢郡十七条村、牧田川筋多芸郡五日市村、津屋川沿い下石津郡徳田新田にてそれぞれ破堤、多良川沿いに被害が多かった。	矢作川堤防が、拳母村（現豊田市）内で破堤した。
明和	8	1771	8	6		三河、大雨・洪水。岡崎の菅生川が門前組へ氾濫して、付近の家屋が浸水した。
明和	8	1771	8	19		三河、大雨・洪水。矢作川が出水した。
明和	9	1772	8	30		東海道・関東諸国、暴風雨。尾張・半田では英比川の堤防が大破損した。江戸など東国の被害大。
安永	1	1772	9	18	東は美濃、近江、西は備後、讃岐等大風雨。民家を倒し樹木折れ、人多く死す。	
安永	2	1773	8	7	大風水にて、島田村堤切れ、烏江村紙木より切入る。	伊勢・尾張・三河、暴風雨・洪水。尾張・三河では、7日0時ごろから暴風雨となる。矢作川が出水し、拳母村内（現豊田市）で破堤。岡崎・門前組破損。橋の落ちたところもあった。矢作川流域では田畑に被害があったもよう。
安永	3	1773	8	28	杭瀬川筋安八郡若森堤切れ、また色目川沿い多芸郡大坪村で6ヶ所切れ、その他前月切れた飯田、橋爪で再び切れ込み、江月村堤所々で破壊し、烏江湊より水押し込み、栗笠輪中へまた入水した。	三河、大雨・洪水。矢作川出水。
安永	3	1774	9	28		三河、大雨・洪水。矢作川堤防が拳母村（現豊田市）内で破堤した。
安永	3	1774	10	5		三河、大雨・洪水。矢作川が出水した。
安永	6	1777	9	21		尾張・三河で14時ごろから暴風雨となり（雷を伴う）、家を流したという。（不詳）。
安永	8	1779	9	3		尾張・三河、暴風雨・洪水・竜巻。
安永	8	1779	9/29~10/4		木曾川大水。美濃、尾張一円洪水、所々橋落ちる。	尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。19日から23日にかけて連日大雨。24日は暴風雨となり、東海道（尾張・三河）・関東・奥羽諸国、洪水となる。尾張では庄内川・天白川が、三河では矢作川が氾濫して、大水害をこうむった。
天明	1	1781	9			尾張、大雨・洪水。庄内川が出水して、右岸の和爾良村字北御油（現春日井市）で約270m破堤した。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
天明	2	1782	8	1		尾張、大雨・洪水・（凶作）。1日夜半（24時ごろ）、五條川左岸で、清洲村の朝日付近から下流へ8か所、また合瀬川が六ツ師村で2か所（約180m）、それぞれ破堤して、田畑に氾濫した。その後9月27日までに4回の出水氾濫があった。このため不作となる。この年尾張・三河をはじめ全国的に凶作となる。矢作川では、拳母村内で破堤。その後8月26日、陽暦8月31日にも出水した。
天明	3	1783	秋			尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。連日の大雨のため庄内川が出水し、大野木（現名古屋市区山田町）で堤防がくずれた。さらに暴風雨となり、決壊氾濫の危険が増したが、幸いに大事にいたらずにすんだ。そのほかにも尾張および三河西部の各地に被害があったもようだが不明。
天明	4	1784	9	21		尾張・三河、大雨・洪水。庄内川が出水し、和爾良・上條（現春日井市）で破堤氾濫した。浸水のため付近一帯に2、3日間は通行不能になった。また、鳴海から三河の知立あたりまで浸水して、東海道は海のようになり通行不能となる。各地の農作物が被害を受けた。
天明	5	1785	7	3	豪雨。近年稀有の洪水。各地に山揚げがあった。	
天明	5	1785	7	22		22日矢作川が出水して、拳母村（現豊田市）内で破堤した。
天明	5	1785	9	15		近畿・東海道、大雨・洪水。
天明	6	1786	8~9		木曾川通り加茂郡沿河の地、平水より高きこと1丈5尺。太田町市街半ばは入水。低地の家屋は床上6尺余の浸水。其の外同郡沿河の地被害最も多く、また、各務郡に於ては前渡村にて水量1升2合、同村堤塘50間破壊し、家屋12戸流失、48戸入水、被害地45町5反歩。下切村にて家屋32戸入水、被害地9町3反歩、其の他下流の村々被害多し。また、飛騨川沿い加茂郡吉田村にて被害地3町2反歩、比久見村にて5町歩、福島村にて2反歩、其の他村々多少の流失地ありと云う。可児川沿い可児郡沿河の地にて堤長80間破壊し、また藪川沿い大野郡温井村また堤塘破壊、耕地被害あり。	
天明	6	1786	9	21		四国・中国・近畿・北陸諸国・尾張、暴風雨。尾張では、農作物の被害が大きかった。
天明	6	1786	9	28		四国・中国・近畿・関東・奥羽諸国・尾張・三河、暴風雨・洪水。28日昼前から（10時ごろ）、尾張・三河では暴風雨となり、各河川は出水した。矢作川は拳母村内で破堤した。尾張・三河の農作物に大きな被害があった。
天明	7	1787	10	6		三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村（現豊田市）内で破堤した。
天明	8	1788	7	20~21		三河、大雨・洪水。矢作川出水、碧海郡小川村（現安城市）付近でとところどころ破堤して、田畑に氾濫し、被害が大きかった。
天明	8	1788	9	24		三河、大雨・洪水。青木川（矢作川支流）が出水した（被害不明）。なお、土用中、雨が降り続き、その後もまた、7月下旬から8月中旬（陽暦8月下旬~9月中旬）まで雨が降り続いた。
寛政	1	1789	7~8		美濃大水。	
寛政	1	1789	8	8~9		美濃・三河・遠江、大雨・洪水。矢作川が大出水して、拳母村（現豊田市）内の青木堤、宗定村などで破堤して、氾濫した。また、矢作古川でも破堤し、上流から下流にわたって氾濫したため被害が大きかった。岡崎藩の米の収納は前年より15,702俵減収であった。吉田藩でも14,263俵減収だったので、被害は大きかったものと考えられる（詳細不明）。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
寛政	1	1789	9	26		東海道、暴風雨・洪水。庄内川が大出水して、東山畑（現名古屋市区楠町）で決壊し、また、矢作川の宗定堤（現豊田市上郷町）が2か所決壊した。
寛政	2	1790	9	27~28		三河、暴風雨・洪水。矢作川が出水し、青木堤・八町橋上の堤・そのほかの堤防が決壊した。岡崎付近が浸水し、家屋・田畑の被害が大きかった。
寛政	3	1791	9	17	17日申の中刻より未曾有の大暴風雨あり。大垣城下町の被害多く、壊家4,000軒余、死者5人、傷者12人。加納領分漬家550軒余あり。飛騨も大風雨。作物大損害。国分寺の塔、大雄寺の門倒る。	尾張、暴風雨・高潮・洪水。夕方前（16時ごろ）から暴風雨となり、夜半（23時ごろ）まで続いた。このため風による家屋の倒壊などの被害があったが、伊勢湾に高潮がおこり、海岸地方では死者94人、倒壊・流失家屋5,825軒におよぶ大きな被害となった。
寛政	4	1792	10	23		23日夜、尾張に暴風雨があったが、被害などは不明。
寛政	6	1794	7			矢作川が出水して、矢作右川の堤防が決壊した。被害甚大。
寛政	7	1795	10	10~12	10日津屋川沿い多芸郡津屋新田杵樋吹き抜け、30間程切り、根尾川大水。大野郡西馬野で流家、死傷者が出た。11日藪川筋大野郡上秋村榎木堤切入る。また、12日杭瀬川沿い多芸郡高瀬村で破堤、大垣輪中入水す。可児川堤も50間破堤。津屋川沿い多芸郡津屋村杵樋が吹き抜けた。飛騨も亦洪水あり。高山中橋損傷す。	尾張では、樹木がたおれ、田畑に被害があった。
寛政	10	1798	5	23, 29	5月15日より天空異状を呈し、21日夕方より強風雨引き続き、22日夜より暴風雨となり、23日に至って各川洪水となる。木曾川通り恵那郡坂下村耕地8町歩流亡河川となり、加茂郡沿河の地流失家屋多く死傷20余人、各務、羽栗両郡沿河の水量1升2合、堤防平越しとなり、前渡より笠松に至る間の堤防決壊8ヶ所、（尾張方も満水の時は危険に瀕せり）家屋流亡、人畜の溺死多く、下流羽栗郡以南伊勢桑名迄一面海の如く、慶安3年（枝広の洪水）より6尺も高く、前代未聞の大水なりしと云う。境川、長良川決堤のため、加納町入水、人々棟上に登れり。長良川筋にては方県、厚見2郡沿河の水量2升到り、厚見郡日野、方県郡雄総、長良等に破堤あり。長良にて家屋の流失17、死者23人、土地の流亡砂入70町歩あり。岐阜町北にては堤防20間破れ、町入水人家8戸流失。忠節、今泉、小熊野、鏡島等でも150間乃至280間の破堤あり。暴水厚見郡西南の諸村に押し入り家屋の流失あり。更に中島郡に至り、衝路の堤防を破れり。飛騨川筋も加茂郡下麻生、西朽井にて耕地10数町歩流亡し、鬼谷川沿い郡上郡下同村にて土地流亡。揖斐川、津屋川、大樽川沿いにも破堤あり。武儀川筋武儀郡八幡村等被害少なからず。この洪水で、木曾、長良両川の堤防決壊ヶ所は実に330ヶ所の多きを算した。	美濃・伊勢・尾張、長雨・大雨・洪水。4月はじめからの長雨に加えて23日大雨となり、美濃では水害が甚大であった（尾張については不詳）。
寛政	10	1798	8	27	25日夕方より暴風雨。26日、27日に至り出水す。木曾川通り羽栗郡無動寺村堤塘破壊し、入水各村に及ぶ。中島郡竹ヶ鼻村堤75間を破り、同郡並びに海西、下石津の3郡入水。長良川通り方県郡長良村流家20戸、壊家32戸、死者3人、半壊家144戸、破船大小8艘あり。また、厚見郡忠節村と今泉村との境に1ヶ所、鏡島村に1ヶ所計2ヶ所の堤（本年5月破壊した滞留堤）再び破る。再度の入水に人民一層困難を極む。長良川上流の郡上川沿い武儀郡曾代村にて高15石余の地を害し、家屋1戸流失、前野村の堤も破壊す。山県郡中屋、世保、溝口、戸田、千疋諸村の地激流漲溢、耕地を害し、加野村にて堤長200間を破り武儀川沿い山県郡植野、茂地、古市場諸村の耕地を害す。また、揖斐川沿い下石	尾張、大雨・洪水。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
					津郡安田村と帆引新田との村境にて本堤切入り、森下、札野、内記、萱野にて中堤破壊す。	
寛政	11	1799	9	18		三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村（現豊田市）内で破堤した。
享和	1	1801	9	18		三河、大雨・洪水。菅生川・青木川（矢作川支川）のところで、堤防が決壊した。
享和	2	1802	7	26		尾張・三河、暴風雨・高潮・洪水。熱田新田をはじめ伊勢湾沿岸では高潮により、家屋が流され死者も多かったという。岡崎城内や額田郡久後村（現岡崎市）は水害を受け、岡崎の殿橋は半壊した。
享和	2	1802	9	2~3		三河、暴風雨・洪水。矢作川が出水し、3日拳母村（現豊田市）内で破堤した。
享和	3	1803	9/30~10/1			尾張・三河、大雨・洪水。30日夜大雨となり、扇川・大高川（天白川支川）が出水、堤防が6か所（約280m）が決壊し、大高で倒壊家屋2軒の被害があった。1日矢作川が出水し、拳母村内で破堤した。
文化	1	1804	10	20		三河、大雨・洪水。矢作川が出水し、岡崎の矢作橋東方で約90m破堤した。
文化	4	1807	10	17		尾張、三河、暴風雨。名古屋では尾張藩主の邸宅を破損、岡崎では社寺の建物樹木など被害があった。
文化	4	1807	7月下旬~8月上旬		美濃洪水あり。田畑損亡多し。	
文化	5	1808	9	15		紀伊・東海道・関東諸国・尾張・三河、暴風雨・洪水。
文化	6	1809	9	15		三河、暴風雨。岡崎では、土べい約120mが倒れた。
文化	8	1811	8	12		尾張、雷雨・強雨、竜巻。数日間雷雨が続き、この日名古屋城下へ多数の落雷があり、強雨が降って浸水したところもある。また熱田の沖に、竜巻が発生した（被害はなかったもよう）。
文化	11	1814	8	14		三河、大雨・洪水。29日夜半前（22時ごろ）から、降り出した雨は強風を伴ない、翌7月1日の早朝には、矢作川水系が出水した。午後には青野堤・川島の大帳堤さらに各所の堤防が相ついで決壊し、夕方には人家に浸水した。雨は2日になってもやまず、矢作川水系の堤防決壊は10か所におよんだ。この方面の人家や田畑のこうむった被害は大きかった。
文化	13	1816	9	24~25		四国・近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。23日夜から風雨が強くなり、24日朝（8時ごろ）から北東の風が激しくなる。家屋の被害など出はじめる。
文政	4	1821	8	31	美濃所々大風雨、洪水。	
文政	4	1821	9	3		三河、大雨・洪水。矢作川が出水し、拳母村（現豊田市）内で破堤した。
文政	5	1822	9	10		三河、大雨・洪水。矢作川が出水し、拳母村内で破堤して、氾濫した。倒壊家屋25戸、死者2人、負傷者35人の被害があった。
文政	6	1823	9	21		三河、大雨・洪水。矢作川が出水した。
文政	7	1824	8	18		三河、大雨・洪水。矢作川出水。
文政	8	1825	5	31		三河、大雨・洪水。矢作川が増水し、碧海郡上青野村（現岡崎市）地内の本光寺西方で、堤防約180mが決壊した。青野村はもちろん、安藤・福樋・高畑・三ツ木・在家の各村が浸水して被害甚大であった。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
文政	8	1825	9	25	長良川上流上ノ保川沿い郡上郡歩岐島村、大島村、白鳥村、徳永村、河辺村にて耕地数10町歩を害し、川欠け或いは荒地となり、下流部上川沿い上田村、山田村、大原村、三戸村にて堤長900間を破り、流家8戸、被害耕地数町歩。武儀郡にては須原村、上河和村、下河和村、保木脇村、立花村など家屋過半入水、2戸流失し、前野村堤長200間を破り、家屋34戸流失、死亡47人、耕地数町歩を害す。 （これを前野切れと云う。）山県郡に於ては、植野村、茂地村、古市場村の地被害あり。また、武儀川千疋村へ切り入り、側島村にて家屋の流失3戸。加納村堤長200間を破り、流家5戸。各務郡芥見村にて流家7戸。方県郡に於ては堤上水深4~5尺、水量1升5~6合、長良村にて堤塘破壊7ヶ所（長さ110~118間）流家数10戸、死亡16人あり。厚見郡に於ては日野村、江崎村にて堤3ヶ所破壊。犀川沿い本巢郡牛牧村堤長20間破壊し、揖斐川沿い高須輪中堤平越しとなる。なお、飛騨も出水。所々損害（4戸流失）あり。	尾張・三河、大雨・洪水。連日の大雨で農作物に被害があった。
文政	11	1828	6	20		三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、岡崎の大平橋が流失した。
文政	11	1828	8	10~11		中部・関東・奥羽、暴風雨・洪水・凶作。矢作川は10日の暴風雨で満水し、11日各所の堤防が決壊氾濫した。
文政	12	1829	7		美濃大水。	
文政	12	1829	8	17		三河、暴風雨。
文政	13	1830	9	3		京都・尾張、暴風雨・洪水。朝から大雨が降り、庄内川が出水して、名古屋側の左岸で、辻村の堤防が決壊し、名古屋北西部の中下・柳町付近・名古屋城下が浸水した。なお、辻村には、城内用水源としての大杖（いり）があった。
天保	7	1836	9	23	可児郡23日夜より暴風雨起り、家屋の半壊多し。大垣も被害あり。	近畿・中部諸国・江戸、暴風雨・洪水。三河、暴風雨・洪水・凶作。尾張南部および尾張知多郡方面と三河全般に暴風雨の被害をこうむった。
天保	8	1837	9	13	大暴風あり。加茂郡、可児郡にては家屋の全半壊頗る多く、一村にて50~100戸に及びし所あり。長良川出水。武儀郡小瀬村30間、池尻村40間、各務郡芥見村70間、厚見郡日野村その他山県郡数ヶ所で破堤す。可児川沿い可児郡中切村堤15間を破り、同川支川の久々利川沿い耕地の被害あり。糸貫川沿い本巢郡曾井中島村堤塘破壊し、犀川筋本巢郡牛牧村の堤も20間破る。揖斐川通り大野郡古橋村堤切り、本巢郡穂積村、別府村、稲里村入水、農作物皆無の被害を受く。多芸郡大牧村杖樋吹き破れ、下石津郡高柳、新田堤塘50間破壊す。安八郡浅草中村掛廻堤も切れ込む。この暴風雨、出水により、笠松郡代支配所の潰家5,200戸に上った。	
天保	10	1839	9			尾張・三河、暴風雨・洪水。庄内川が出水して、大留村杖の口（現春日井市）で約90m破堤して、氾濫した。また渥美郡泉村（現渥美町）地内で田に被害があった。
天保	13	1842	6	25~26	木曾川通り加茂郡取組村中仙道筋へ暴水漲溢し、家屋2戸流失。また、長良川通り中島郡小藪村堤95間破壊。益田川も洪水。沿河の流壊家10戸に上る。	尾張・三河、大雨・洪水。26日、矢作川が出水し、拳母村内で破堤した。起日は不明だが、この年、木曾川の氾濫で、葉栗郡草井村（現江南市）の家屋40軒、耕地25haが、流失あるいは被害を受けた。
天保	14	1843	9	27		三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村（現豊田市）内で破堤した。26日九州諸国・伊勢・江戸・暴風雨。
天保	14	1843	10	3~4	美濃大風雨。	東海道（美濃・尾張）・関東諸国、暴風雨・洪水。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
天保	15	1844	5	25		三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村内で破堤した。
天保	15	1844	9			尾張、大雨・洪水。庄内川が出水して、東春日井郡和爾良村字北御油（現春日井市）で約140m破堤し、上条村（現春日井市）地方が被害をこうむった。
嘉永	1	1848	5	24		三河・遠江、大雨・洪水。長雨ののち雷を伴った大雨が降り各河川が出水した。矢作川が出水して、岡崎の矢作橋が破損した。
嘉永	2	1849	9	24		三河、大雨・洪水。朝（6時ごろ）から矢作川の堤防が決壊し、民家の床下に浸水し、29日になっても水が引かなかった。
嘉永	3	1850	8	28~29	東海道諸国大風雨あり。可児郡竹木の倒潰甚し。大垣では八時半頃より北東の風吹き出し、夜に入りて次第に強く、四ツ時頃より大風となる。翌28日朝六ツ時頃より追々静かになるも、長屋2棟半倒壊、高塚所々倒壊、大垣領分の内小家20軒程倒る。9月2日また大風あり。4日、5日出水8合に及ぶ。	尾張・三河に風水害があった。伊勢・美濃・尾張・三河・遠江・駿河6か国の農地被害概算は約100万石といわれる。
嘉永	3	1850	9	8~15		尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。8日から13日までの間大雨が降り（12日夜から13日朝にかけては暴風雨）、その後も17日まで雨はやまなかった。このため、尾張・三河の各河川は全般に出水し、大きな水害となった。
嘉永	3	1850	9	10	可児郡洪水あり。	
嘉永	5	1852		9/4, 25 10/5	揖斐川通り大野郡古橋輪中入水、安八郡西結村堤切れ入水、犀川沿い本巣郡十八条村で破堤。	三河、暴風雨。岡崎では、9月4日夜半から5日正午ごろまで（南東の風）、9月25日10時ごろから、10月5日夜それぞれ暴風雨となった。矢作大橋は約50m破損した（どの暴風雨によるものか不明）。9月4日、四国・近畿・関東、9月25日、紀伊・安芸、10月5日、中国・近畿・江戸、暴風雨。
嘉永	5	1852	9	21		三河、大雨・洪水。矢作川が出水し（夜20時ごろ）、額田郡天白村大曲（現岡崎市）で約220m破堤した。このため、在家・三ツ木（現岡崎市）および近隣の各村は床上1m位も浸水したが、中之郷・上青野・赤湊・高橋の各村は、やや高地のため早く水が引いた。<天白切れ>
嘉永	6	1853	9			尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、右岸の東春日井郡神領村字海東（現春日井市）で約270m破堤した。
嘉永	6	1853			上之保川出水。郡上郡歩岐島村、越佐村にて堤破れ、耕地被害多し。また、可児川沿い可児郡にて堤69間破堤。	
嘉永	7	1854	2		美濃洪水あり。	
嘉永	7	1854	6			尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡松河戸村（現春日井市）一ツ橋で約390m破堤した。
嘉永	7	1854	9			尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡神領村字海東（現春日井市）で約360m破堤した。
安政	2	1855	9	7~10	可児川一升七合の大水、大被害あり。11日土岐川出水。従来多治見橋付近は40~50間の川幅なりしが、この洪水により、長瀬堤防川欠け、現今の川幅に広まる。武儀川大水。山県郡富波村青波にて流家1戸、山地の崩壊、耕地の流亡数10ヶ所に及ぶ。	尾張・三河、暴風雨（大雨）・洪水。7月7日朝から大雨が降り、夜に入っても降り続き、8・9日はやんだ。しかし、9日夜には再び豪雨になり、10日まで続いた。（7日と10日は暴風雨）。このため各所の堤防が決壊したが、前年の大地震後の復旧が完了していなかったのが被害は大きくなった。
安政	2	1855	9	21	粗川通り池田郡小島村にて決堤500間、家屋18戸流失、耕地数町歩を害す。牧田川沿い多芸郡大墳村堤18ヶ所切入り、耕地数町歩を害し、直江村堤塘2ヶ所延長110間破壊、耕地60町歩余を害す。また小畑川沿い飯積村堤2ヶ所60間を破壊し、耕地2町歩余を害す。	

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
安政	2	1855	9	30	東海道諸国大風雨。牧田川筋石津郡沢田村東140間、大畔40間、茶園原26間、押越村北28間切入り、津屋川沿い多芸郡駒野新田切込み、その他大場新田、釜段新田悪水堤破壊。また、杭瀬川沿い池田郡八幡村、糸貫川筋本巣郡北方村で切れ込む。	四国・近畿・東海道諸国、暴風雨。尾張・三河、暴風雨・高潮・洪水。名古屋、30日午後から暴風雨となり、夜になって最も強くなった。夜22時ごろ伊勢湾・渥美湾に高潮がおこり、伊勢湾沿岸の新田堤防や海岸堤防91か所が決壊した（知多半島から海部郡まで）。流失家屋130軒、死者20人の被害があり、とくに甚だしかったのは堀川・庄内川の間の築地前・熱田前・稲富・永徳・神宮寺の新田であった。
安政	3	1856	8	29~30		尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡勝川村字松ノ内（現春日井市）で約50m破堤した。
安政	4	1857	6	8~9	7日より豪雨。川上川沿い恵那郡川上村、坂下村にて家屋18戸流失、耕地14町歩流亡。付知川沿い同郡付知村、田瀬村、福岡村にて耕地10数町歩余を害す。また、白川大水、沿河の地山崩れあり。橋梁流失す。8、9両日大雨のため木曾川以下諸川氾濫して、堤防を破壊するもの北方代官支配に4ヶ所、鵜多須代官支配に9ヶ所を生ずとある。	美濃・尾張、大雨・洪水。各河川が氾濫した。
安政	4	1857	9	18		尾張、暴風雨・洪水。庄内川が出水して、東春日井郡勝川村（現春日井市）の東切野と西切野で約130m破堤した。
安政	6	1859	7			尾張、大雨・洪水。庄内川が出水して、松川戸村（現春日井市）で約370m破堤した。木曾川・佐屋川破堤のため、この二川にはさまれた輪中に大被害があった（水深3m余になる）。
万延	1	1860	6	29	大風雨。家屋の倒壊、竹木の倒伏甚しく、各川出水す。木曾川沿岸加茂郡取組村に氾濫、各務郡前渡にて欠壊入水し、前宮村全潰す。長良川上流上之保村川沿い郡上郡向小駄良村にて耕地を害し、武儀郡前野村堤200間を破り、耕地1町1段7畝歩を害し、上有知村堤150間を破り、耕地3町歩を害し、山県郡加野村堤240間、厚見郡江崎村、鏡島村、下奈良村、高河原村堤数ヶ所を破り、方県郡一日市場村堤3ヶ所（長さ20間より6間まで）を破り、曾我屋村堤6ヶ所（100間より20間）破壊し、潰家5戸あり。寺田村堤20間切入、家屋を涵し、河渡、生津両村立会地堤平越のところ200間切入り、本巣郡穂積村堤30間を破り、百曲川沿い厚見郡次木川、境川沿い高桑村堤2ヶ所破壊す。揖斐川沿い大野郡房島村堤150間破し、耕地6段歩を流亡。本庄村堤48間を破壊し、大月村、宮田村立会地堤30間を破り、両村耕地70町歩を害す。池田町小島村の内、沿河の地所々堤破し、大野郡杉野堤150間（又85間とも言う）を破り、激流押入り、ために安八郡加納村堤30間破し、耕地30町歩を害し、四成村堤25間破し、耕地45町5段歩を害す。（これを「杉野切れ」と言う。）新屋敷村堤2ヶ所（36間及び18間）破壊し、東結村堤100間破し、家屋100戸流失、耕地数10町を害し、ために、墨俣村、西橋村、二ツ木村入水、墨俣村にて家屋2階の上まで入水せり。西結村堤25間破し、大明神輪中18間破壊し、多芸郡船附村堤破し、津屋川沿い鷺巣村堤切入、下石津郡徳田新田堤塘182間破壊し、堤内田面の水高1丈3尺余、被害40町歩余、多芸郡中家屋入水。根尾川沿い本巣郡東板屋村、西板屋村、板所村、木知原村、神海村にて堤2ヶ所（80間及び100間）破壊し、耕地20町歩余を害し、藪川沿い大野郡稲富村堤を破り、耕地2町歩を害し、七崎村、居倉村堤30間破壊し、耕地5町歩を害し、唐栗村堤43間を破り、耕地を損し、粕川沿い池田郡小島の内、元市場村等の堤を破壊し、耕地3町歩を害するなど、その惨害頗る多し。大垣城下へも水押入る。	美濃・尾張、暴風雨・洪水。伊勢湾に高潮がおこり、新田に被害があったが、あまり著しいものではなかった。中島郡起村（現一宮市）では、全壊家屋2戸、半壊家屋6戸の被害があり、そのほか尾張地方に建物や人の被害があったもようだが詳細は不明。尾張藩領内の被災村数は115か村、農作物被害高は12万石。三河では、矢作川水系が出水し、大平橋（現岡崎市）をはじめ橋の流失があった。また乙川の平橋下流で浸水した。また上流の拳母村（現豊田市）内でも破堤している。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
万延	1	1860	7/29, 9/2, 10/12			尾張・三河、暴風雨・凶作・ききん。稲など農作物に強風が被害を与えたらしい。この年は余り強くはなかったが何度も暴風がふき農作物の収穫に影響した。
文久	1	1861	9	24~25		三河、暴風雨・洪水。24日夜から暴風雨になり、25日夕方雨はあがる。矢作川支川の太平川（乙川）が出水し、大平橋が流失した。岡崎は一部住家に浸水したもよう。
文久	1	1861	11	7~8		三河、大雨・洪水。7日夜大雨、8日未明（3時ごろ）矢作川は満水となり、大平川（乙川）の大平橋（仮橋）は7時ごろ流失した。
文久	3	1863	10	7		尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡勝川村字松ノ内（現春日井市）で約50m破堤した。
元治	1	1864	5	26~30	土岐郡大風雨あり。	
元治	1	1864	8	12		三河、雷雨・落雷・竜巻。岡崎およびその周辺に多数の落雷があり（10か所余）、4人もの死者が出た。碧海郡隣勝寺村（現豊田市）付近に、竜巻が発生し、家屋を倒し、死者数人が出た。
慶応	1	1865	7	9	7日暮れ六ツ頃より3日に亘り大豪雨、各川大洪水となる。木曾川通り恵那郡沿岸の地激流暴漲し、中津川沿い中津川村、駒場村、手賀野村堤400間を破壊し、耕地4町歩を害し、可児郡伊岐津志村字監口に於て、家屋16戸流失、被害地2段3畝歩。加茂郡細目村家屋46戸流失、被害地1町歩、酒倉村、取組村、勝山村家屋数戸流失、上古井村被害地3町2段歩、知和村同8段歩（該郡沿岸の地に於て、天明6年8月の洪水に比すれば水量2尺低しと云う）。各務郡前渡村（水量1升2合）堤塘120間を破り、家屋流失2戸、半潰10戸、死亡1人、被害地21町9段歩。下切村堤98間破壊し、家屋流失15戸、半潰28戸、死亡16人、被害地6町3段5畝歩、漂先き不動山へ衝突して羽栗郡の地へ流れ、米野村にて決潰3ヶ所（各長さ20間）、中野村、円城寺村々境にて2ヶ所、川島地内笠田村2ヶ所（長さ50間、70間）、被害地11町余、松倉村同200間、家屋流失又は浸水するもの数戸、被害地最も多し。柳津村字須賀多堤13ヶ所破し、田代村家屋流失2戸、死亡2人、両村被害頗る多し。平野村の辺に於ては激流堤上に溢し、その深さほぼ3尺。ために堤外の船舶皆堤上を越えて堤内に入り、沿河数10ヶ村	美濃・尾張・三河、大雨・洪水。庄内川が出水し、左岸の瀬古村（現名古屋守山区）・中切村（現名古屋西区）、右岸の味鏡村（現名古屋北区）・勝川村（現春日井市）で破堤して氾濫、一帯に大水害をこうむった。
					恰も一大湖の如く、家屋の流失、人畜死亡最も多し。中島郡駒塚村にても決壊、須賀村正木堤も破し、海西郡成戸村にても決潰せり又各務郡前渡村など決潰のために境川沿い厚見郡蔵之前村堤2ヶ所（合せて90間）、切通村1ヶ所45間、細畑村3ヶ所（合せて112間）、領下村1ヶ所18間、下川手村18ヶ所（合せて212間）、茜部村7ヶ所（合せて118間）、高桑村1ヶ所55間、佐波村4ヶ所、荒田川下流百曲川沿い鶉村4ヶ所（合せて165間）破壊し、家屋耕地の害を被るものその数最も多し。羽栗郡南宿村にても決堤80間、又可児川沿いの地にても同100間あり。土岐川、板取川その他諸川出水せり。	
慶応	1	1865	8	14	可児川通り同郡井尻村決堤56間、中切村308間あり。	
慶応	2	1866	6	26~27		尾張・三河、強風雨。田植期の26日夜から27日にかけて風雨が強く、竹・木が折れる。夏作は不作となる。
慶応	2	1866	7	18		三河、暴風雨・洪水。刈谷の高須新田（猿渡川下流）が冠水し、三河の海岸地方では農作物に被害があった。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
慶応	2	1866	8	10		三河、暴風雨・洪水。岡崎では、10日は雨だったが、夕方（18時ごろ）から風雨が強くなり、夜半（22時ごろ）には、川が氾濫して、一部住家に浸水した。
慶応	2	1866	9	14~15	15日飛騨大風雨。飛騨にて破堤、死者あり。又大風にて稲多く損。大垣14~15日大雨、夜大風。	尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。尾張・三河では、13日夜から15日まで大雨が降り続き、15日は夜（20時ごろ）から翌朝（7時ごろ）まで暴風雨であった。尾張では、家屋・樹木・農作物の被害が大きかった。岡崎では河川の出水により、家屋の浸水もあり、三河の農作物も大きな被害を受けた。
慶応	3	1867	9	27		尾張、暴風雨・洪水。庄内川が出水し、松河戸村（現春日井市）八反田で破堤した。
慶応	4	1868	9	16		尾張、大雨・洪水。庄内川水系が出水し、庄内川の上・中・下志段味村、ほかの各所で堤防が決壊した。矢田川でも瀬戸村・瀬古村・成願寺村・中切村・福徳寺村等で破堤して、家屋流失や死者も出た。名古屋も巾下付近で家屋の浸水が甚だしく、本町・広小路・赤塚（当時は小川や溝が多かった）も床下浸水した。また、一宮等尾張西部地方でも低地が浸水した。

災害年表(風水害) 明治時代以降

和暦年	西暦年	開始日	終了日	気象概要	岐阜県				愛知県						
					降水量		風速等	事象	長期間降水量		短期間降水量		風速等	事象	
					指標	観測局			値	指標	観測局	mm			mm
明治 10	1877			暴風雨											愛知県下全般に暴風雨。死者13人、負傷者9人、家屋全壊1,058戸、家屋半壊253戸の被害があった。
明治 22	1889		9 11	暴風雨・高潮											紀伊半島から名古屋付近を通過した台風により、三河湾・伊勢湾に高潮が起った。熱田では11日19時頃に高潮が来襲し、豊田・柴田・笠寺・伝馬・星崎の各新田一帯が浸水した。県全般での暴風雨と沿岸での水害により、死者876人、流失家屋7,132戸、浸水家屋31,730戸という被害を出した。
明治 25	1892		9 4	暴風雨											愛知県下全般に暴風雨。三河の瀧美・宝飯・八名・額田郡で甚大な被害があった。
明治 31	1898		8 1	大雨											集中豪雨により名古屋市内で1,658戸が浸水。
明治 35	1902		9 28	暴風雨	日雨量	岐阜	62mm								尾張西部と関東東地方を相次いで北上した2つの台風により、尾張地方で強い暴風雨となった。
明治 36	1903		7 7	大雨・暴風・洪水	3日雨量	岐阜	198mm								土佐沖から若狭湾に進んだ台風に伴う大雨と暴風雨で、死者・行方不明者8人、負傷者39人、などの被害が出た。東春日井郡神坂村の内津川や西加茂郡孝母町・根川村の矢作川が破壊された。
明治 37	1904		7 9	台風	5日雨量	岐阜	303mm								10日、和歌山の東方から彦根付近に進んだ台風に伴う暴風雨で、豊川・矢作川等に氾濫被害が出た。台風通過後も雨が続き、11日には東春日井郡藤木村と高岡村で庄内川が破壊し、名古屋市内の住家1,082戸、非住家110棟が浸水した。被害が大きかったのは三河地方で、死者39人はすべて東三河でのものである。
明治 39	1906		7 10	大雨	4日雨量	岐阜	128mm								大雨により庄内川・矢作川流域で、堤防決壊の被害が出た。
明治 41	1908		8 7	暴風雨・洪水											伊勢湾に入った台風の暴風雨により、名古屋市内で床上浸水179戸、床下浸水6,379戸の住家被害が出た。
明治 44	1911		6 19	暴風雨	2日雨量	岐阜	34mm								神戸付近から新潟に進んだ台風の暴風雨により、県下で死者65人、負傷者43人、全壊住家373戸などの被害が出た。
	1911		8 4	暴風雨・洪水	3日雨量	岐阜	181mm								三河湾に上陸した台風の暴風雨により、東春日郡高蔵寺町ほか、西春日井郡中村で庄内川・矢作川が破壊された。また天白川・山崎川が氾濫し右岸の愛知郡笠寺村・熱田町等で浸水した。床下浸水は、名古屋警察署管内で3,671戸、熱田警察署管内で2518戸に及んだ。
明治 45	1912		4 19	降雹・突風	2日雨量	岐阜	23mm								丹羽郡・中島村・海軍郡を中心に激しい降雹があり、農作物に被害を与えた。降雹と同時に強い突風が起り、丹羽郡大口村が古知野村にかけて死者1人、全壊住家11棟の被害となった。
大正 5	1916		7 9	雷雨											尾張地方で落雷30箇所、即死2人、家屋全焼1戸。
大正 6	1917		7 16	雷雨											東加茂郡、八名郡で落雷によって2人が死亡、住家1棟が全焼した。
大正 8	1919		7 18	強雨・落雷											名古屋付近で短時間の集中豪雨で名古屋市内およびその周辺で広範囲にわたって浸水被害が発生した。
大正 9	1920		7 27	落雷											落雷により東春日井郡内で3人が死亡、家屋2戸が焼失した。
大正 10	1921		6 30	暴風雨	5日雨量	岐阜	158mm								梅雨前線と低気圧の影響で、県下で死者5人、負傷者10人、全壊家屋362戸、半壊家屋132戸、浸水家屋199戸の被害が出た。
	1921		7 14	大雨	3日雨量	岐阜	78mm								雷を伴う大雨が降り、名古屋と鳴海町を中心に2,625戸の浸水被害が出た。
	1921		7 18	大雨											雷を伴う大雨が降り、江川と菟瀬川が氾濫した。名古屋市街を中心に9,116戸の浸水被害が出た。
	1921		7 26	大雨・洪水											雷を伴う激しい雨が瀬戸川が増水氾濫し、瀬戸町で焼く700戸が浸水した。鳴海町・天白村では天白川・扇川の堤防が決壊し、床上浸水200戸、床下浸水150戸の被害となった。
	1921		9 25	暴風雨・高潮	4日雨量	岐阜	98mm								紀伊半島を北上した台風の影響で暴風雨となり、伊勢湾北部に高潮が起った。海部郡から名古屋市内にかけて、高潮と日光脚の氾濫による被害が甚大で、3,060haにわたり、10日~2ヶ月間も浸水した。
大正 13	1924		10 8	短時間豪雨	4日雨量	岐阜	107mm								台風の影響で、可児、土岐、恵那の各郡で短時間に豪雨が降り、土岐川、可児川が氾濫した。

		愛知県				岐阜県				愛知県						
和暦年	西暦年	開始日		終了日		気象概要		気象値		気象値		事象				
		日	月	日	月	日	日	降水量	風速等	指標	観測局	値	風速等	指標	観測局	事象
大正 14	1925	8	14	8	15	大雨・洪水	岐阜	91mm	最大風速 14.5m (20分平均)	2日雨量	岐阜	181mm	1時間雨量	名古屋	58	低気圧の影響で庄内川・矢作川流域に激しい雨が降った。西加茂郡孝母町などで河川が氾濫し、付近一帯が浸水した。春日井郡瀬戸町でも、堤防の決壊で57戸が倒壊する被害が出た。
	1925	9	11			暴風雨・洪水	岐阜	132mm	最大風速 14.5m (20分平均) (岐阜)	2日雨量	岐阜	187mm		名古屋		伊勢湾を北上し名古屋付近を通った台風により、沿岸部と平野部を中心に暴風雨となり、死者10人、家屋の全壊52戸、半壊16戸、浸水約2万戸の被害が出た。
昭和 4	1929	8	14	8	15	暴風雨					名古屋	118mm		名古屋		大阪湾から若狭湾へ進んだ台風で、矢作川上流部に豪雨が降った。西尾町の付近で矢作川古川の堤防が大きく決壊し、1,500余戸の浸水家屋を出した。
昭和 5	1930	7	19			大雨・洪水	岐阜	15mm		2日雨量	岐阜					台風から襲われて日本海を東進した温帯低気圧の影響で、庄内川の中流や上流域の局地に短時間に激しい雨が降った。東春日井郡高蔵寺町で内津用水が氾濫し、死者7人、重傷者2人を出した。このほか東春日井郡を中心に、西春日井郡、丹羽郡方面で大きな水害となった。
昭和 7	1932	7	8			大雨							1時間雨量	名古屋	92	低気圧と前線の影響で、庄内川や日光川流域で激しい雨が降り、名古屋をはじめ各所で多くの浸水被害が出た。庄内川流域では堤防、橋などが破損決壊する大きな被害が生じた。
	1932	9	13	9	16	長雨										9月初旬からの長雨に驟雨性の豪雨が重なり、名古屋市内だけでも約2,000戸の浸水家屋を出した。
昭和 8	1933	9	14			豪雨							1時間雨量	名古屋	27	名古屋地方で大雷雨となり、床上浸水80戸、床下浸水6,380戸の被害が出た。
昭和 9	1934	9	8	9	9	強風雨					名古屋	31mm				台風から襲われて日本海を北上した温帯低気圧に伴う強風で、風に飛ばされたり、飛来物にあたるなどして、死者2人、負傷者1人を出した。
	1934	9	21			台風第7号 (室戸台風)	岐阜	11mm		2日雨量	岐阜	24mm		名古屋		室戸岬から富山湾に進んだ台風に伴う暴風で、名古屋管内だけでなく死者4人、負傷者51人の被害が出た。河川の出水による被害は少なかったが、海岸地方では高潮の被害が出た。
	1934	11	1			大雨										猛烈な雨で、江川管内116戸、笹島管内697戸、熱田署管内280戸の浸水被害が出た。
昭和 10	1935	10	27			豪雨							3時間雨量	名古屋	126	低気圧の影響で豪雨となり、名古屋全体で1万戸以上が浸水した。天白村では天白川への氾濫行方不明者1人を出した。
昭和 11	1936	10	2	10	3	台風	岐阜	139mm		3日雨量	岐阜	198mm	1時間雨量	名古屋	41	南海上を進んだ台風の影響で大雨が降り、名古屋市内だけでも12,686戸の浸水家屋を出した。
昭和 12	1937	6	18	6	19	低気圧	岐阜	125mm		4日雨量	岐阜					梅雨前線が活発化した豪雨の影響で、一宮市で5,000戸の浸水家屋を出したのをはじめ、多くの浸水被害が発生した。
	1937	7	13	7	15	長雨・豪雨										足摺岬から鳥取沖へ進んだ台風の影響で風雨が強まり、名古屋市内で飛散物による死者2名が出た。
	1937	9	11			暴風雨	岐阜	59mm		2日雨量	岐阜					低気圧が通るたびに梅雨前線が活発になって豪雨が続き、名古屋市内で3,409戸の浸水家屋を出した。
昭和 13	1938	7	3	7	5	大雨	岐阜	291mm		9日雨量	岐阜		1時間雨量	名古屋	27	名古屋付近で大雷雨があり、市内で4,561戸が浸水した。
昭和 14	1939	8	7			落雷・洪水				3日雨量	岐阜					千天の大雨で庄内川が大増水し、名古屋市内で1,600余戸の家屋が浸水した。
	1939	9	16	9	17	低気圧										梅雨前線の長雨が激しい雨となり、山間部でかけ崩れ、平野部で河川の氾濫、堤防の決壊などの大きな被害が出た。名古屋市内で床下浸水家屋2,000余戸、西加茂郡で重要道路通行不能。
昭和 15	1940	6	16	6	17	大雨					名古屋	192mm				太平洋岸に発生した前線が活発化し、庄内川上中流域に激しい雨が降った。名古屋で死者3人、浸水家屋1,100棟の被害が出た。
昭和 16	1941	6	27	6	29	長雨・豪雨										
	1941	7	10	7	12	大雨・洪水	岐阜	20mm		4日雨量	岐阜					
昭和 17	1942	10	1			前線										
昭和 19	1944	10	7	10	8	強風雨					名古屋	80mm				伊勢湾から名古屋付近に上陸した台風の影響で、濃尾平野ばかりの被害を受けた模様であるが、資料不足のため詳細不明。
昭和 20	1945	9	18			台風第16号 (枕崎台風)	岐阜	179mm		3日雨量	岐阜	40mm		名古屋		猛烈な台風の影響で20m以上の暴風となり、急造のパラックが多数倒壊し、死者も4人あった。

開始日				終了日				岐阜県				愛知県					
和暦年	西暦	月	日	和暦年	西暦	月	日	気象概要	気象値		事象		気象値		事象		
指標	降水量		値	指標	風速等		値	指標	長期間降水量		短期間降水量		指標	風速等		事象	
	指標	観測局			mm	mm			mm	mm	mm	mm		mm	mm		mm
昭和20	1045	10	5	昭和20	1045	10	5	台風第19号									紀伊半島をかすめて東海道沖を東進した台風の影響で、広範囲に水害が発生した。
		10	11			10	11	台風第20号(阿久根台風)	岐阜	140mm							台風に刺激された前線の影響で大雨が降り、水害が発生した。
昭和23	1048	11	19					台風第34号									東海道沖を海岸沿いに進んだ台風により、風水害を生じた。
昭和25	1950	7	28	昭和25	1950	7	30	台風第9号(熱帯低気圧)	岐阜	124mm							九州の南海上で停滞した台風と熱帯低気圧に伴う大雨の影響で、1,600余戸の浸水被害が出た。
		1950	9			1950	9	台風第28号(ジェーン台風)	岐阜	125mm							室戸岬から若狭湾に進んだ台風に伴う暴風で、名古屋、一宮市、西加茂郡で計6人の死者を出した。
昭和26	1951	7	8	昭和26	1951	7	16	梅雨前線	岐阜	308mm							
昭和27	1952	7	10	昭和27	1952	7	11	豪雨・洪水	岐阜	300mm							前線の活動が活発になり、庄内川中流域から名古屋にかけて大雨が降った。名古屋近郊の天白川、山崎川が増水氾濫し、名古屋市で床上浸水2,353戸、床上浸水38,757戸の被害となった。
昭和28	1953	7	17	昭和28	1953	7	20	大雨	岐阜	276mm							日本海から延びた前線の通過に伴い局地的に豪雨が降り、名古屋市で1,500余戸の浸水被害が出た。
		1953	9			1953	9	台風第13号(テス台風)	岐阜	208mm							熊野灘から知多半島に進んだ台風により県下全体で暴風となった。大潮の時期に高潮が重なり、暴風による波浪とともに海岸堤防を破壊し被害が大きくなった。名古屋市をはじめとして6市26町76村に災害救助法が適用された。
昭和29	1954	7	30	昭和29	1954	7	30	豪雨									飛騨川下流域から南下した雷雲が名古屋市北西部に達し、移動経路上で短時間の豪雨を降らせた。名古屋市の北部、西部の限られた狭い地域で5,000戸を超える家屋が浸水した。
		1954	9			1954	9	台風第14号(ローナ台風)	岐阜	76mm							紀伊半島南端をかすめ御前崎に上陸した台風に伴う暴風雨で死者4人の被害が出た。
		1954	9			1954	9	台風第15号(洞爺丸台風)	岐阜	68mm							台風に刺激された本州南岸の前線が、名古屋付近から知多半島にかけて激しい雨を降らせ、名古屋市で5人の負傷者、3,448戸の浸水被害が出た。
昭和30	1955	10	20	昭和30	1955	10	20	台風第26号	岐阜	107mm							田辺付近に上陸し、強い勢力を保ったまま名古屋と岐阜の間に進んだ台風の暴風で、74戸の家屋が全半壊した。これに伴う死者3人、負傷者18人という被害が、名古屋市を中心に起きた。
昭和31	1956	7	7	昭和31	1956	7	7	大雨									寒冷前線の通過に伴う強い雨で、名古屋市を中心に浸水被害が発生した。
		1956	9			1956	9	台風第15号	岐阜	186mm							湖前から東海道沖を通過して御前崎に上陸した台風により、名古屋市で全半壊家屋4戸、浸水家屋3,559戸の被害が出た。
昭和32	1957	6	25	昭和32	1957	6	28	台風第5号	岐阜	165mm							名古屋から多治見の狭い地域に短時間の集中豪雨があり、庄内川が増水、付近の小河川や池が氾濫した。瀬戸市、高蔵寺町を中心に死者33人、負傷者44人、全壊家屋76戸、床上浸水23,961戸という被害となった。
		1957	8			1957	8	豪雨	岐阜	88mm			1時間雨量	多治見	64		和歌山県白浜付近から琵琶湖西岸を通過した台風により、各地で浸水被害が起きた。
昭和33	1958	8	25	昭和33	1958	8	26	台風第17号	岐阜	142mm							太平洋岸の前線と北上する台風第7号の影響で大雨が降り、負傷者1人、家屋全半壊25戸、床上浸水14戸、床上浸水8,826戸の被害が出た。
		1958	9			1958	9	台風第22号(狩野川台風)	岐阜	91mm							
昭和34	1959	8	12	昭和34	1959	8	14	台風7号・大雨	岐阜	262mm			3時間雨量	名古屋	34		湖前から富山湾に進んだ台風によって猛烈な暴風雨となった。また高潮による異常潮位が伊勢湾奥で基準面上4mに達した。急激な洪水波と高潮で、木曾川、庄内川、矢作川などが破壊し、死者3,260人、負傷者59,045人、住家全壊23,334戸、住家半壊97,049戸、流失家屋3,194戸、浸水家屋10万戸以上という未曾有の被害を出した。
昭和34	1959	9	26	昭和34	1959	9	26	台風第15号(伊勢湾台風)	岐阜	133mm			1時間雨量	矢作川流域	70		相次いで室戸岬から日本海へ進んだ台風の影響で、海部郡立田村で長良川が氾濫し1戸が流失した。また名古屋市北区で突風が吹き1戸が倒壊した。
昭和35	1960	8	11	昭和35	1960	8	13	台風第11号、第12号	岐阜	276mm							

開始日		終了日		岐阜県				愛知県					
和暦年	西暦年	月	日	気象概要		事象	気象値						
				指標	降水量		指標	観測局	値	風速等			
平成10	1998	9	21	9	23	台風第7号	指標	観測局	mm	指標	観測局	mm	風速等
						台風第7号により、県下全域で死傷者47人、家屋の損壊2,693戸の被害が出た。					蟹江	29	最大風速42.6m
平成11	1999	9	14	9	24	台風第16号、第18号と秋雨前線による「9・15豪雨災害」で、県下全域で死傷者16人、家屋の損壊36戸、浸水1,391戸の被害が出た。					稲武	51	
平成12	2000	9	11	9	12	大雨 東海豪雨	総雨量	岐阜	265mm			114	
平成16	2004	9	4	9	5	大雨					名古屋	93	
平成20	2008	8	28	8	30	8月末豪雨						53	
平成21	2009	10	8			台風第18号	総雨量	東海	206mm		東海	84	

和歌山県西部に上陸した台風8号により激しい雨となり、続いて上陸した台風7号が愛知県西方を通ったことから暴風雨となった。名古屋と一宮市で死者3人、県西部地方を中心に重軽傷者151人などの被害が出た。

県東部を中心に、竜巻による被害。

秋雨前線に台風第14号の影響が加わって、非常に激しい雨が降り、死者7人、重軽傷者107人の被害を出した。

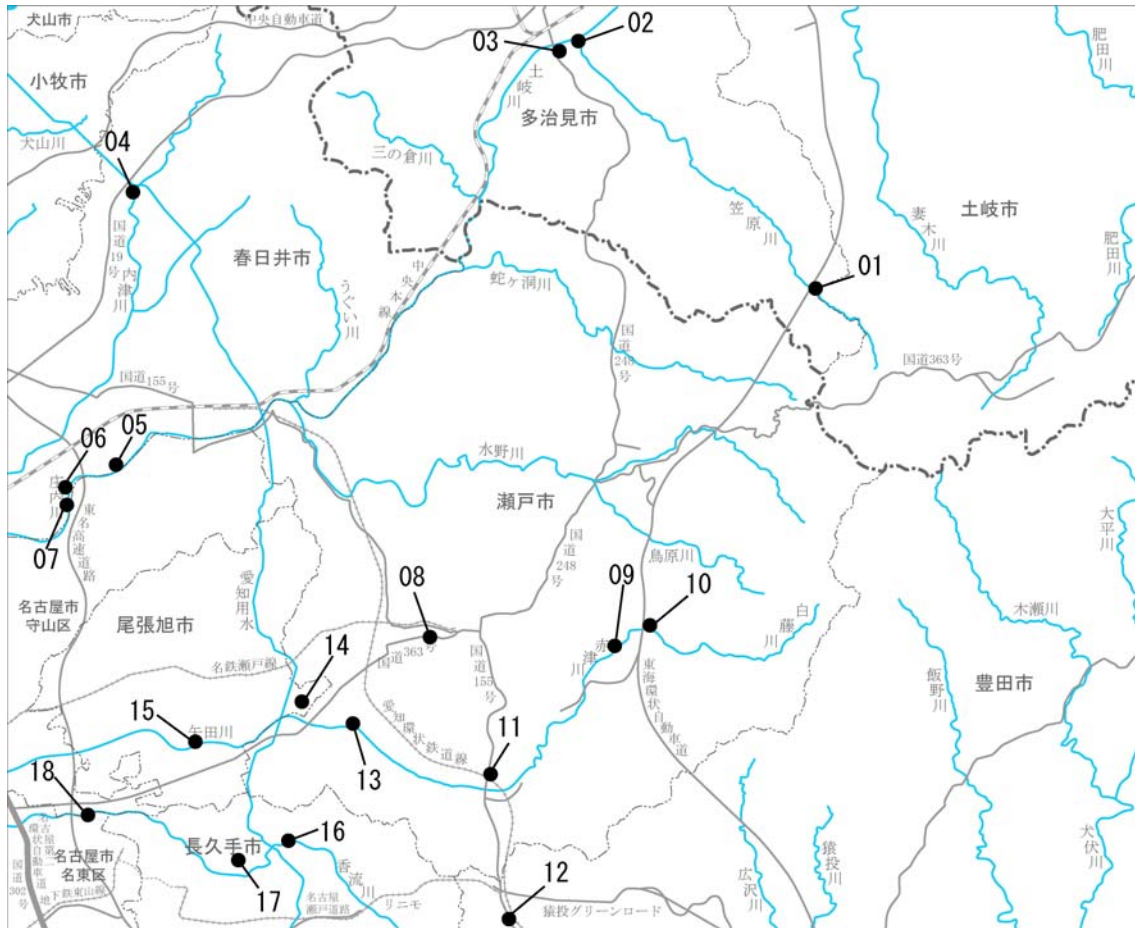
日本海の停滞前線に暖湿気流が流れ込んだ影響で、名古屋市付近で短時間に局地的な大雨が降り、床上浸水250棟、床下浸水1,584棟の被害を出した。

名古屋市で住家の損壊8棟、床上浸水1,175棟、床下浸水9,929棟の被害が出た。一宮市では軽傷者1人もあった。

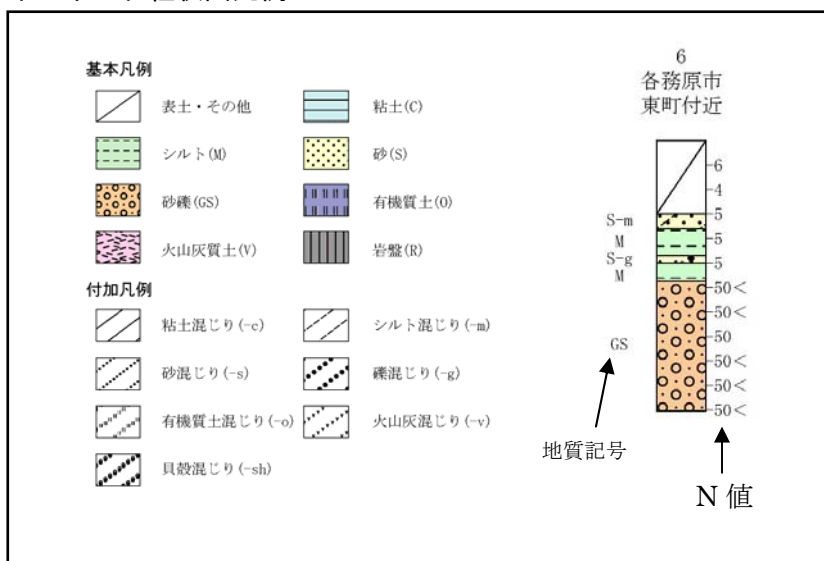
強い勢力を維持したまま多半島に上陸した台風の影響で、非常に強い風が吹いた。重軽傷者19人、住家の全半壊47棟、一部破損2,092棟、床上浸水246棟、床下浸水1,235棟の被害となった。

既存資料におけるボーリング資料

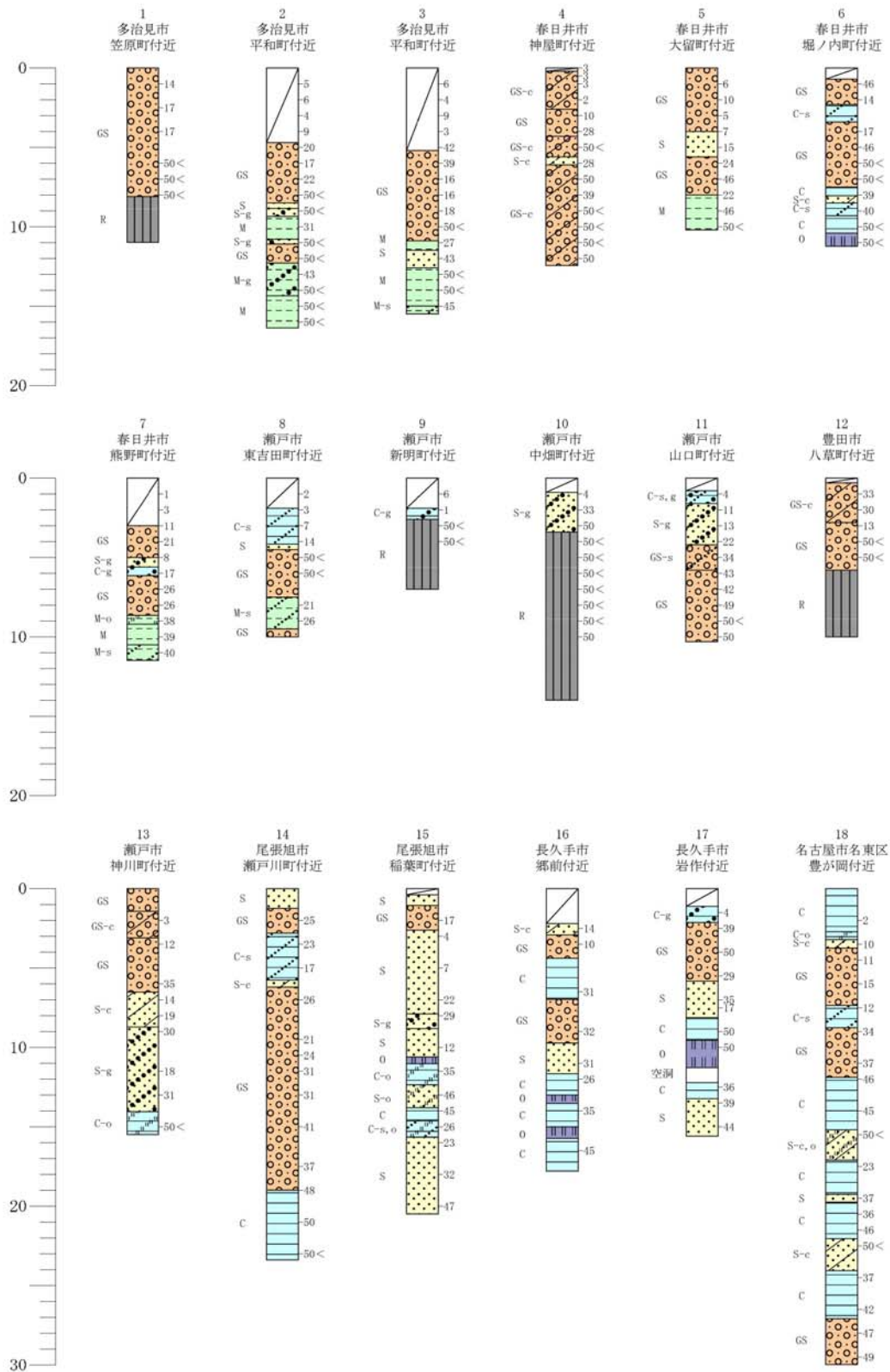
既存資料におけるボーリング調査地点位置図



ボーリング柱状図凡例



ボーリング柱状図



土地分類基本調査（土地履歴調査）
説明書

瀬 戸

5 万分の 1

平成 2 4 年 3 月

国土交通省国土政策局国土情報課

土地分類基本調査（土地履歴調査）の成果は、国土交通省
ホームページからご利用いただけます。